琉球大学学術リポジトリ

沖縄におけるライフコースの出生コーホート間比較研究

メタデータ	言語:
	出版者: 安藤由美
	公開日: 2009-05-26
	キーワード (Ja): 沖縄, 生活史, 社会史, 家族, 職業, コーホート分析, ライフコース, コートホート
	キーワード (En): life history, social history, Okinawa, life course, cohort analysis, family
	作成者: 安藤, 由美, Ando, Yumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10187

K377.7
AN
1997

沖縄におけるライフコースの出生コーホート比較研究

研究課題番号：09610188

平成９，10年度科学研究費補助金
（基盤研究(C)(2)）
研究成果報告書

平成12年３月

研究代表者
安藤　由美
（琉球大学法文学部助教授）

琉球大学附属図書館
0000994009829

研究代表者　安藤由美　（琉球大学法文学部助教授）

研究経費

平成９年度	700 千円
平成 10 年度	100 千円
計	800 千円

研究発表

『激動の沖縄を生きた人びと――ライフコースのコーホート分析――』
（安藤由美著、早稲田大学人間総合研究センター、1998 年）

目　　次

1　本研究の課題と方法 …… 1
　　1．1．はじめに
　　1．2．本研究の経緯
　　1．3．本研究の目的

2　ライフコース研究の理論的枠組 …… 3

3　調査の方法と対象者の基本属性 …… 12
　　3．1．標本構成と調査の実施
　　3．2．対象者の基本属性

4　出来事経験のタイミングからみたライフコース …… 31
　　4．1．ライフコースにおける主要な移行
　　4．2．ライフコースの出来事タイミングと時代背景

5　生活史資料からみたライフコース経験——戦争の影響を中心に—— …… 43

6　まとめと今後の課題 …… 51

＜巻末資料1＞　面接調査ガイド …… 53
＜巻末資料2＞　生活史資料 …… 63

1 本研究の課題と方法

1. 1. はじめに

本研究は、大正期ならびに昭和初期に生まれた沖縄の人びとが生きてきた過程を、人生上の主要な出来事の経験の時機と内容からライフコースとして再構成し、それを出生年を異にするコーホート集団（同時出生集団）間で比較することを通じて、ライフコースがそのコーホート特有の歴史的脈絡のなかで現在まで展開してきたようすを記述し説明することを目的としている。

1. 2. 本研究の経緯

本研究は、研究代表者が客員研究員をつとめる、早稲田大学人間総合研究センター設置の研究プロジェクト「社会変動と人間発達」（研究代表者：正岡寛司早稲田大学教授）における、一連のライフコース調査研究と連動している。この研究プロジェクトが、1988年から1992年まで数次にわたって大都市地域（東京都新宿区）と地方都市（福島市）において、ライフコースにかんする統計的調査（「世代間における人生の出来事経験の比較」調査、1988・89年）、および詳細な生活史インタビュー調査（1990・91年）をおこなった。著者はこのうち、1988年の東京調査と1989・90年の福島調査に、調査の開始段階から1990年の東京調査の中間報告書の執筆までかかわった。これら一連の東京と福島の調査結果の報告書はそれぞれ同センターから、『昭和期を生きた人びと——ライフコースのコーホート分析——』（正岡寛司・藤見純子・池岡義孝・大久保孝治・安藤由美・嶋崎尚子編、1990年）、『昭和期を生きた人びと——ライフコースのコーホート分析——地方都市編』（正岡寛司・藤見純子・佐藤友光子・嶋崎尚子・西野理子・中村賢子編、1991年）、『ライフコースの形成と転機——クロノグラフの応用と分析——（東京調査のフォローアップ）』（正岡寛司・藤見純子・佐藤友光子・嶋崎尚子・西野理子編、1992年）として刊行されている。

研究代表者は、上記の東京および福島の調査と標本のコーホート構成を一部同一にして、沖縄県本島中南部の3カ町村（西原町・南風原町・豊見城村）を調査地として「沖縄における人生の発達的・歴史的変化についての調査研究」と題するライフコースの出来事経験調査を1994年と1995年の2カ年にわたっておこなった。1994年の調査経費は、文部省科学研究費補助金の助成（奨励研究(A)、課題番号06851029）を受けた。これは、人生出来事のタイミングを調べた定量的研究である。これをここでは第一次調査とよんでおく。

そして、本研究では、やはり東京・福島調査と同じデザインで、口述生活史インタビュー調査を行い、そのデータベース資料を作成した。これは、上の第一次調査に対して、質的調査であり、ここでは第二次調査とよんでおく。なお、研究計画の2年間では、生活史データの詳細な分析はもとより、第一次調査データとの関連づけがまだできていないので、

こうした作業は今後の課題に属する。

なお、第一次調査の結果は、すでに『激動の沖縄を生きた人びと——ライフコースのコーホート分析——』（1998 年）と題して早稲田大学人間総合研究センターより刊行した。そして、本書は、それに継続する、第二次調査も含めた研究報告である。

1．3．本研究の目的

本研究では、大正期ならびに昭和初期に生まれた沖縄の人びとの人生を主要な出来事から再構成し、それを集合的に（出生コーホートのフローとして）記述しようと試みている。

第一次調査では、かれらがこれまでの人生で、①どのような出来事を経験してきたか(experiencing)、あるいは、②ある出来事が特定の出生コーホートにおいてどれほど普及しているか(prevailing)、③ある出来事がいかなる時機(timing)に経験されているか、あるいは、④ある出生コーホートがある出来事を経験し終えるまでにどれくらい時間を要したか(phasing)、さらには、⑤人生上の重要な移行(transition)をかたちづくる複数の出来事をどのような順序(sequencing/ordering)、あるいは⑥間隔(spacing)で経験し、⑦移行を終えるまでにどれくらい時間を要したか(duration)、の各点を計量的に調査分析した。

第二次調査では、回顧法による口述生活史データを収集し、第一次調査でとられた出来事経験の定量的な情報に、より詳細な質的な情報を付け加え、なおかつ、当事者の主観的な意味づけについても迫ろうとする目的をもつ。

これら２つの調査を通じて、本研究は、ライフコースがそのコーホート特有の歴史的脈絡のなかで歴史的・社会的あるいは文化的な変動の影響を受けながら現在まで展開してきたようすを記述し説明することを目標とする。その分析に際しては、社会・歴史的変動の影響が出生コーホートの成員の出来事経験やその軌跡にどのような痕跡をとどめているかをコーホート間において比較する技法を採用している。さらに、社会・歴史的な変動が特定の出生コーホート内の人びとに及ぼした影響に差異があるかどうかを確認し、差異がみられた場合には、その要因を解明しようと試みている。

上の２点は本報告書が直接の目的として掲げるものであるが、今後の展開として本研究が最終的にめざすところは、以下のことである。まず、人びとの人生の展開（発達）過程に影響を与えた効果を総体として記述するとともに、その総合効果を構成している諸効果、たとえば加齢効果（身体的・心理的成熟の程度）、コーホート（出生年および社会化の）効果、歴史（観測時点の時代状況ないし歴史変動の長期的趨勢）効果、ライフチャンスの構造的な差異（社会構造）の効果などを可能な限り識別することである。また、人生形成における出来事の連鎖を、多元的な個人時間ならびに社会時間の組織化の観点から分析することを通して、大正期以降の日本における全体社会システムとその下位システムの態様と変動の一端を析出することである。

2 ライフコース研究の理論的枠組

ライフコース研究の方法論的前提

本研究が採用しているライフコース論の枠組とは、「個人の人生、人間発達、加齢を、変動する社会に位置づけて研究するための一般的理論枠組」である[Elder,1992:1128]。そして、その際もっとも基本的な方法論的な前提は、人生を説明可能、検証可能、モデル化可能なかたちで研究することである。すなわちそれは、単なる思弁的、直観的な考察に終わらず、かといって、単なる事実の寄せ集めに終わることのないという意味である。科学的な研究をするための道具として、理論と方法とデータの三要素があるが、方法やデータが理論に従属するとは考えていないし、またその逆でもない。これらは三角形を成し、対等な立場にあると考えられる。すなわち、方法やデータが理論を制約することがあるかもしれないが、逆にそれらがあらたな理論的発展の糸口をもたらすこともある(1)。さらにいえば、このような志向をもっておくことは、人生にかんする通文化的な比較にたえるようなデータを集める際に不可欠であろう。

ライフコース研究には、もう一点述べておくべき方法論的前提があるように思う。個人の人生を研究するというとき、大きく二つの立場が対極にある。法則定立的か個性記述的かといってもよい。一方には、個人個人の人生は、一人一人みな違うのであり、したがって、そうした違いを無視して集合的パターンを析出したところで無意味であるとの前提から、個々人の人生を、文化、歴史性にそって、あるいはかれ／かのじょのルサンチマンに肉迫して、できるだけ個性記述的に追うべきだという立場（文学的・歴史学的立場）があろう。他方には、そうした個別性を取り払ったところに、人間発達あるいは加齢過程にはある種の普遍性があり、これを追究することに価値があるとする立場（心理学的立場）があろう。これらはどちらも個人の人生の理解には不可欠な視点ではあるが、本研究では、そのどちらか一方に与するのではなく、両者の前提を受け入れつつ、個性にも普遍性にも解消することができない、社会的なパターンが存在するとの前提にたつ。誰でも一定年齢に達すれば、生殖能力がそなわる。しかし、何歳で子どもをもつかは、みな違う。違うといっても、まったくばらばらではなく、そこには一定の規則性が存在する。問題は、その規則性が一体何によって決まるのかである。

ライフコースの定義とその理論的前提

ライフコースとは、「社会的諸制度にはめ込まれた、また歴史的変化を遂げうる、年齢階層化した人生パターン(age-graded life pattern)」である[Elder,1992:1128]。パターンというからには、あらかじめそれが複数ありうることを始めから想定している。そのパターンとは、ここでは社会的パターン、すなわち、集合レベルでの規則性ないし分布を意味する。したがって、個々人がいかにユニークな人生を生きたかではなくて、むしろどの

ような似たような人生すなわちパターンが当該社会に存在するか、そしてそれらを決定づけている要因は何かを問題にする。ただしその場合、文化や歴史や社会構造や社会的相互作用などの枠組みを外した、普遍的な加齢過程を追究しようとするのではない。これらの諸条件を人生の形成要因としてみなしている。

もちろん、人生の形成がその多くを内的な生物学的メカニズムに追っていることは言うを待たない。しかしながら、ライフコース論では、内的なメカニズムと外的な要因との相互作用によって人生が形成されていくという前提をもっている。ライフコースに影響する外的な要因をあげれば、大きく次の三つに分けられる。

人生の形成とその要因その1:社会文化的要因

人生の形成要因そして集合的パターンの規定要因が何かというとき、社会学的な人生研究では、おのずとそこには「社会」的要因といったものが想定されている。それは、社会学の一般的な用語でいえば、社会構造や文化である。

ライフコース論において重要なのは、どんな社会も、その成員の身体的・心理的な発達過程と多かれ少なかれ反映し、またそれを規定する規範や期待のシステムともいうべき「社会的時刻表」をそなえており、人生の研究ではそうした「社会的時間 social time」を取り上げることができるという点である[Clausen,1986]。本研究は、まさにこの人生の社会的時間を扱おうというものである。個人はその社会や文化の社会的時刻表にそって（ときにはそれから逸脱しながら）人生を歩んでいく。その時刻表には、おのおのの年齢段階で期待される属性や行動・思考・情動の様式が含まれている。

人生を社会学的に研究する際の基本的な前提の第一は、他の条件が同じであれば、同じ社会構造や文化のもとでは、人びとの人生コースは類似性をもつだろうというものである。一番わかりやすい例をあげれば、日本では満6歳に達したら、通算9カ年にわたる義務教育を受けることが定められている。日本の学校教育法に従うかぎり、人びと人生のこの側面はみな共通している。ただ、法制度によって明示的に定められ、しかもほぼ全員がそれにしたがって同一の行動をとるような現象は、実はきわめて少ないのであり、多数の人の人生コースを似たようなものにしている時刻表がどのような明細をもっているかは、まだ学術的にはほとんど知られていない。たとえば、結婚する年齢はだいたい似通っている（現代女性ならば20歳代に集中している）が、なにも法律がそれを定めているわけではないので、多くの女性を一定の年齢幅のなかで結婚させるような社会文化的要因が存在するはずである。

人生の形成とその要因その2:ライフコースの歴史的要因

上で述べた社会構造や文化は、ライフコースを形づくる要因としては、比較的変わりにくいものと想定されている。ところが、第一の前提にかかわらず、人びとの人生コースは、しばしば類似性よりも相違点のほうが多く見いだされる。その理由は大きく二つに分けられよう。一つには、社会構造や文化以外の条件の作用がこれらよりも強く働いた場合であり、いま一つは、社会構造や文化それら自体が変化した場合である。後者は、社会変動と

いうことができる。いずれにしても、ライフコースに多様性をもたらす要因を探し求めればきりがない。しかし、ライフコースと社会構造や文化との関連を時間の流れのなかで研究する場合、それは必然的に歴史的要因ないし条件を視野に入れることになる。（実は、ライフコース論は、従来の没歴史的な人生の心理学的・社会学的研究に対するアンチテーゼとして登場してきた経緯がある。）つまり、人生コースが人によって違う理由の一つは、歴史的な条件が違うからだということである。これを逆に言えば、歴史的条件を同じくする人びとの人生コースは類似性をもつだろうということである。これが第二の基本的前提である。

では、歴史的条件を同じくする／あるいは異にするとはどういうことなのか。ライフコース論では、歴史的脈絡 historical context という概念を用いる。それは、もともと個人にとっての歴史的な環境はみな違うということであるが、ライフコース論の場合、その観念はとりわけ、同じ歴史的な事件やその連鎖は、それらに遭遇する年齢が違えば影響の度合いが異なるという人生段階原理[Ryder,1965; Elder,1992]に基づいている。このことから、本研究では、生まれた時代や、歴史的出来事を経験した年齢が似通った人びとの集合をコーホートとしてまとめて分析する方法を採用している。

人生の形成とその要因その3:ライフコースの累積的加齢過程

人生の加齢過程を対象とする先行研究が明らかにしてきたところによれば、人生上のある時点での経験の特質は、その後の経験に影響を及ぼすという知見である。このライフコース研究の重要な前提の一つとしてハレーブンがあげた、ライフコース上の先行経験の後続経験への累積的影響を本研究でも重視している[Hareven,1978]。そこで、先行する経験を同じくする人びとの人生コースは類似性をもつだろうという第三の基本的前提を提示しておく。たとえば、兵役を経験したかあるいはしなかったか、あるいは見合い結婚だったかそれとも恋愛結婚だったかといった違いは、その後の人生過程に違いをもたらすかもしれない。これまであげた社会文化的要因や歴史的要因が外的要因であるとすれば、ここで述べているのはライフコースの内的要因と言えなくはないが、しかし、それはあくまで経験する当事者個人の内部という意味であって、遺伝子のプログラムにあらかじめ組み込まれているという意味ではない。以上、ライフコース論が基本的な理論的前提としている、個人の人生の発達形成のメカニズムにとって重要と想定されている要因を大きく３つに大別して提示した。

社会学的ライフコース

本研究は、人生を社会学的に研究するねらいをもっている。そのことの主要な意味は、社会学では個々の人間からは独立した実在としての「社会」の存在を想定しており、人生がその社会とのかかわりにおいて形成される側面を研究対象とするということである。ただし、それは社会を常に個人の外部に存在すると考えるのではない。社会はがんらい人びとの集まりであって、人びとがいなければ社会は成立しない。社会の要素は個人の要素でもある。つまり、個人の人生にはきわめて社会的な要素があり、そして集合的にみればそ

のような要素の集まりイコール社会だともいえる[1]。このような個人と社会を媒介し、あるいはそれらの間を相互に浸透する概念として、社会学では社会的役割の概念を用意している。

社会的役割の連鎖過程としてのライフコース

社会的役割の概念は、個人がかかわる集団や組織や社会における機能という観念と結びついている[Merton,1957; Riley *et. al.*,1972; Rosow,1976]。つまりそれら集団や組織や社会からみれば、個人がそれらの目的・目標に対してなしうる貢献についての期待が社会的役割を構成している。

集団や組織や社会からすれば、社会的役割を用意し、それをうけもつ個人が必要である。これはマクロな観点からみた社会的役割である。一方、個人の側からみれば、多かれ少なかれ、社会的役割をもつことによって、その個人の欲求が充足される。その意味で、個人は社会的役割を必要とするという、ミクロな観点からの役割も存在する。この場合、役割をもつということは、自分以外の他者とかかわることとほぼ同義である[富永,1986]。

このように、社会的役割の概念は、個人と社会を媒介するので、個人が社会的役割をどのように保有するかを研究することは、社会そのものを研究することにもなるのである。したがって、ある一時点における、個人の役割保有状況を集合的なレベルで観察すれば、それはその時点の社会構造をとらえることになるし、またこれを時間の流れのなかで変化を追えば、社会構造の変化すなわち社会変動をとらえることになるのである。あるいは、年齢が異なる人の役割保有状況の違いは、社会的役割構造が年齢別に分化していることをあらわしている（年齢別役割構造）。

さて、個人が人生上で保有する主要な社会的役割をあげるなら、それは家族役割と職業役割であろう。これらはマクロ社会の観点からみれば、前者は人口学的再生産、後者は物的な再生産にかかわるものである。そして、近代以降の社会では、これに個人の社会化のエージェントとしての学校制度における、社会化の受け手としての役割すなわち生徒あるいは学生としての役割を付け加えてよいだろう。これらはいずれも、マクロ社会の存続や目標達成にとって重要であるし、また個人の身体的・心理的属性や能力あるいは欲求充足とも深くかかわっている。したがって、あらゆる人類社会において、個人のある役割の取得やそこからの離脱、あるいは役割の内容の変化は、社会的な決定事項であり、また個人にとっても身体的・心理的に大きな変化や負荷を伴うことがあるので、なんらかの儀礼を伴ったり、重要な出来事 life event として認知されていることが多い。入学・卒業・就職・結婚・子の出生・退職などがそうである。こうした出来事は、研究対象である人びとの認識と、個人と社会との関連を考察しようとする研究者のそれとの間に大きなずれがない、いいかえればライフコースを観察研究するための客観的な手がかりといえるだろう。その意味から、本研究では、ライフコースをまずこうした人生上の主要な出来事の連鎖からなるものとしてとらえている。

ただ、生涯時間上での人生コースの展開をとらえるとき、単一の出来事をみるだけでは必ずしも十分ではない場合もある。名称は異なっても、出生から死亡までの生涯時間はふ

つう、いくつかの時期ないし段階に区切って認識されていることが多い。子ども対おとな（成人期）、また大人のなかでも、中年期や高年期などがそうである。たとえば、成人期の開始は、単一の出来事ないし役割よりは、卒業・就職・結婚・子の出生などといった複数の出来事によって特徴づけられるといえる。そうした段階が切り替わる局面を人生移行 life transition とよぶ。ライフコース論では、ある人生移行がそれを構成する出来事の経験時機や順序によって、後の人生にとって異なる意味をもつことに注目している [Elder,1985]。

社会的システムとしてのライフコース

さきに、個人と社会双方にとって重要な役割として、家族役割、職業役割、教育役割の三つの異なる役割領域をあげた。このことは、社会が少なくとも、ある程度相互に関連しつつ、しかも互いに独立した三つのシステムに分化していること、また、個人においても、それぞれの役割はある程度自立的であることを意味する。こうした役割領域を生涯時間上でとらえる概念が経歴 career である。つまり、ライフコースを１つの全体システムと考えれば、経歴はそれを構成する要素であり、経歴間は相互に連関しつつ、ある程度独立しているととらえられる。本研究では、個人のライフコースは、家族経歴、職業経歴、教育経歴の三つを主要な構成要素としていると考えている。

個人の経歴間の関係と、社会の諸システム間の関係はある程度並列的である。すなわち、社会の多くの成員にとって、家族役割の遂行と職業役割のそれが調和的であるならば、社会における家族システムと職業システムの間の関係はうまくいっているとみなすことができる。反対に、個人が職業役割を遂行するために家族役割を犠牲にしなければならないとき、職業システムは家族システムをおびやかしていることになる。

社会は、その下位システム間の関係と、それをになう個人のライフコースにおける経歴間の関係とを同時に最適化するような人生の時刻表を用意しようとするが、必ずしもそれがうまくいくとは限らない。そこで、人びとがどのような時刻表にそって行動しているか、あるいは、それを阻害するような外的な条件があるかということを、経歴間の関連からとらえることは、社会システムの統合と分化について考察する手がかりとなるだろう。

ライフコースにおける社会的時間資源とその分析戦略

本研究の第一次調査では、人びとが人生上で出来事をどのような時機(timing)で経験しているかについて記述を行った。つまり、出生から現在（調査時点での生存者のみを対象としているので）までの生涯時間(lifetime)上に、どのような出来事が配置されており、その位置や順序がどのようなものであるかといった、いわば時間的側面(temporal aspects)を直接の分析対象としている。その理由は、時間の概念が、個人の人生、社会構造、歴史過程、そしてそれらの相互関係を知るための有力な手がかりであるという前提にたっているからである。この問題を、さきに提示した三つの理論的前提にそくして説明しておこう。

ライフコースにおける社会的時間

時間という資源は、個人と社会双方にとって、本来的に希少なものであり、したがって

それの配分が個人、社会どちらにとっても重大な決定事項であること、そして、あるいはそれゆえに、時間が個人を社会に結びつけるための、および社会の異なるセクター間を統合・組織化するための道具として用いられている[Moore,1963]。

個人のライフコース上における時間の希少性は一つには、人的ならびに物的な再生産にまつわる能力が生涯時間上で不変ではないことから生じる。たとえば、生殖能力（とくに女性の場合）、筋肉労働や頭脳労働の能力が年齢とともに変化することを考えてみればよい。したがって、結婚や出産や就職や引退は、ころよい時機（タイミング）でおこなわれるよう個人の側も社会の側も企てようとする。ただ、いつがころよい時機なのか、あるいは結果的にどのような時機で出来事が経験されるかは、条件によってさまざまに異なると考えられる。さきに、現代女性の多くが20歳代に結婚すると述べたが、その大きな理由が、それに続く出産という出来事を経験するための身体的な能力すなわち妊娠能力によるところが大きいことは言うまでもないが、それでも現代女性は30年近くに及ぶ妊娠可能期間を有しているのにもかかわらず、特定の年齢に集中するのには、定位家族、教育、職業といった他の経歴上、ひいては、彼女が関係する社会関係や集団、あるいは制度に起因する要因によって結婚・出産時機が決まってくるからだと考えられる。

ライフコースにおける社会的時間のもう一つの重要な側面は、それが個人の特定の社会関係や集団への帰属をあらわす指標として用いられていることである。ここに着目して、特定の役割を保有する時機やその継続期間を測定することによって、個人の特定の社会関係や集団への帰属を知ることができると考えられる。たとえば、定位家族と生殖家族との同居の開始と終了およびその年数は、２つの核家族ユニット間の結びつきおよびそれへの個人のかかわりの強さを表す指標となろう。また、特定の従業先での就職と退職あるいは就業年数の場合も同様である。このような、個人の特定の社会関係や集団への所属時機と期間は、多かれ少なかれ社会規範や相互行為する他者の期待によって決まってくると考えられる。

さらに、先にも社会的役割について述べたことであるが、個人のライフコース上で、異なる経歴への時間配分が競合しているということは、社会レベルにおいてもセクターないし下位システム間で競合や階層化が存在していることの指標となりうる。時間の制御権を勝ち取ることは、貨幣と同じかあるいはそれ以上に、権力を握るための重要な要件であるに違いない。

ライフコースにおける歴史時間

時間が毎日・毎週・毎年の繰り返しといったような循環的な現象としてとらえられるか、あるいは一回性の歴史的現象としてとらえられるかは、時間によって何を表現するかによるが、個人の生活を生涯時間というタイムスパンでとらえる場合には、後者であることは説明するまでもないだろう。ライフコース論では、歴史過程という一回性な時間の流れが、個人の一生というこれまた一回性の時間の進行のなかにどのような刻印を残しているかをとらえようとする。考えてみれば、人生が一回性の現象であるという認識も、歴史時間との関わりにおいてなされることが多いといえる。ただ、一回性といっても、すでに述べた

ように、歴史的脈絡を同じくする人びとを集合的に扱うことにより、歴史過程の人生への影響をある程度定式化することはできる。コーホート分析という技法を用いて、個人が経験した出来事の情報に歴史的な日付を加えることによって、われわれはライフコース上で歴史時間の刻印を操作的に分析することができる。

ライフコースにおける先行する移行時機と後続する経験への影響

時間は誰にとっても不可逆的な進行であるから、ある意味では、この問題は取り上げるまでもないことかもしれない。たとえば、結婚時機が遅かった人は、子育てが終わる時機も遅くなるだろう。しかし、時間についての前の二つの側面と、個人の生涯時間上での出来事や移行の継起を結びつけてみると、問題はそれ以上の広がりをもってくる。まず時間の社会的な側面では、個人が過去に特定の社会関係や集団においてかかわった量や位置関係が後の人生に影響を及ぼすさまというのが時間を尺度として析出される。また歴史的な側面では、個人が歴史的な事件に遭遇した時機の違いが、やはり後の人生に影響を及ぼすと考えられる。たとえば、戦争による家族との死別が、思春期であったか、あるいはすでに成人に達していたかによって、後の家族経歴の移行が異なる特徴をもつかもしれない。そして、少なからず、社会的時間と歴史的時間の作用は個々に独立しているというよりも、両者関連しあって個人のライフコースに刻み込まれていく。

時機(timing)の概念

本研究ではこうした前提にたって、少なくとも他の関連する役割の保有状況や、過去の人生で獲得された時間資源、その個人がアクセスできる社会的機会といった客観的な指標から、時機の分布やばらつきを説明しようとする（個人の主観的な思い入れや意味づけは今回の調査では考慮の外においてある）。その際に、時機(timing)をキー概念を用いている。

W．ムーアによれば、上述のような時間をめぐる個人の人生や社会生活の組織化をとらえるために分析されるべき様相は、共時性(synchronization)、継起(sequencing/ordering)、進度(rate/spacing)である[Moore,1963]。これらを個人のライフコースの研究にあてはめていえば、出来事の時機の他の人間や集団あるいは社会制度との同調であり、複数の出来事の組み合わせおよびそれらの経験順序であり、また複数の出来事の一定の時間内の経験数ということになろう。たとえば、共時性としては、就職や結婚はかつては家族のニーズや裁量によって決められていたが、現代社会ではその当事者本人に決定権がより移ってきている。また、継起としては、今の日本では結婚前に子どもをつくることはあまり歓迎されないけれども、戦前までの農村では子どもが産まれてから結婚の披露をすることも少なくなかった。こうした出来事経験の時間的様相は、前にも述べた「社会的時刻表」すなわち社会規範によって統御されるが、しかし、当事者の資源保有状況によってもまた異なってくると考えられる。本研究では、まだこれらの時間概念を体系的に分析する手だてをもっていなく、それは今後の課題に属することだが、少なくとも本書ではあとにも述べるように、まず時機という概念で出来事それぞれの時間的特性をとらえ、ついでの各様相につ

いて考察をすることになる。

[注]

(1) この問題についての詳細な議論はMerton[1957]を参照のこと。

(2) 社会ないし社会構造とは、他者との相互行為ないしコミュニケーション行為を要素としており、当該個人からみれば外在していて、個人に影響を及ぼすものだが、しかし、ある個人の行為は、直接的に他の人間の社会的行為を引き起こしうるという点において、あるいは言い方を変えれば、ある個人の行為の結果が、即、相手側の行為の要因やそれを導く期待や規範となりうるという点で、必ずしも個人に対して外在しているとは言い切れない。また、行為が期待や規範にもとづいて行われる場合、行為者とその受け手双方に解釈の過程が常に入るため、その当事者間でしか意味をもたない相互行為もありうる。社会の場合は解釈が行為の結果や評価を左右する。こうした諸点で、社会は個人の行為を形成し、また社会は個人によって支えられているとも言えるが、一方で、個々人の集合的行為の結果がすなわち社会であるとも言いうる。

このことは、個人が人生上で深くかかわりをもつ家族や職場などの集団とライフコースとの関係を考察する上で重要である。たとえば、家族のなかで夫や妻という役割は、それが他者や社会から一方的に付与されただけでなく（役割を取得するきっかけは強制的であることもありうるが）、配偶者との相互行為を通して、その中身自体が主体的につくりあげられていくものである。こうしてできあがった社会関係はそれ自体が一つの社会であるというべきである。

このような前提にたてば、われわれの対象者のライフコースは、彼ら個人個人をとりまく「社会的ないし社会構造」要因によって形づくられているのだが、一方で、かれらのライフコースの結果を集合的・統計的レベルで扱うとき、それはすなわち社会構造だとも言いうるのである。

ついでながら、文化について社会構造（狭義の社会）との違いに関して述べておくならば、本研究では、文化はシンボルによって表現・伝達される生活・行動様式で、個人を離れて存在するものととらえている。したがって、文化が個人の行為を形づくる側面と、文化が個人の集合的な行為によって支えられている側面とは、一応別個に考えることができる。たとえば、沖縄の人びとのライフコースが日本本土のそれとの差異が文化の違いであるというようなとき、そこではそれぞれの文化は一個人の行為によって影響されることのない、不変のものとしてとらえられている。さきに、社会（構造）はすでにその内部に行為者の解釈過程を含んでいると述べたが、文化の場合には、個人の解釈が入り込む余地をがんらい許さない、すなわち解釈は常に文化に外在するといえる。

[参考文献]

Clausen, John A. 1986. *The Life Course: A Sociological Perspective*. Prentice Hall.
（佐藤慶幸・小島茂訳. 1987. 『ライフコースの社会学』. 早稲田大学出版部）

Elder, Glen H.,Jr. 1985. Perspectives on the Life Course. In Glen H. Elder, Jr.,ed., *Life Course Dynamics:Trajectories and Transitions,1968-1980*. Pp.23-49. Cornell University Press.

Elder, Glen H.,Jr.1992. Life Course. In Edgar F. Borgatta and Marie L. Borgatta, eds., *Encyclopedia of Sociology*. Macmillan.

Hareven,Tamara K. 1978.Historical Study of the Life Course. In Tamara K. Hareven ed., *Transitions: The Family History and the Life Course in Historical Perspective*.

Academic Press. N.Y.

正岡寛司・藤見純子・池岡義孝・大久保孝治・安藤由美・嶋崎尚子編. 1990. 『昭和期を生きた人びと ― ライフコースのコーホート分析』. 早稲田大学人間総合研究センター.

正岡寛司・藤見純子・佐藤友光子・嶋崎尚子・西野理子・中村賢子編. 1991. 『昭和期を生きた人びと ― ライフコースのコーホート分析　地方都市編』. 早稲田大学人間総合研究センター.

Merton, Robert K. 1957. Social Theory and Social Structure. Rev.ed. The Free Press. (森東悟・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961 年).

Moore, Wilbert E. 1963. *Man, Time, and Society.* Wiley & Sons. (丹下隆一・長田攻一訳『時間の社会学』新泉社、1974 年)

Riley, Matilda White, Marilyn Johnson, and Anne Foner. 1972. *Aging and Society: Vol.3 A Sociology of Age.* Sage.

Rosow, Irving. 1976. Status and Role Change through the Life Span. In Robert Binstock and Ethel Shanas, eds., *Handbook of Aging and the Social Sciences,* Van Nostrand, Renhold Co. Pp.457-82.

Ryder, Norman B. 1965. The Cohort as a Concept in the Study of Social Change. *ASR* 30:843-61.

富永健一. 1986. 『社会学原理』. 岩波書店.

White, James M. 1991. *Dynamics of Family Development: A Theoretical Perspective.* The Guilford Press. (正岡寛司・藤見純子・西野理子・嶋崎尚子訳『家族発達のダイナミクス』ミネルヴァ書房、1996 年)

3 調査の方法と対象者の基本属性

3. 1. 標本構成と調査の実施

3. 1. 1. 標本構成

この研究の調査対象者は、出生が1914～1918（大正3～7）年、ならびに1924～1928（大正13～昭和3）年にわたる、２つの出生コーホートの男女、計４グループ合計346名から構成されている（詳細は表3-1参照）。このような標本構成にしたのは、すでに述べたように、早稲田大学人間総合研究センターが東京と福島でおこなった調査結果と比較するためであった。それぞれ５歳の年齢幅をもつ２つのコーホートの出生年が、一見、西暦年と元号年のどちらからも中途半端な区切りであるのは、最初の調査が1988年に東京でおこなわれたとき、年長のコーホートが70～74歳、同様に若いほうが60～64歳であったからである。このときは、現在を起点に過去にさかのぼって情報を収集するという回想法の理念により忠実にする意味で、調査時点における区切りのよい年齢階級値を用いたにすぎない。そして、本研究では、この東京サンプルと同一の出生年の人を対象にしたのである。

表3-1　出生年別・性別標本構成

ｺｰﾎｰﾄ	出生年			年齢	男性	女性
C-I	1914	大正	3	80	17	19
	1915		4	79	18	12
	1916		5	78	19	18
	1917		6	77	20	21
	1918		7	76	19	15
	計				93	85
C-II	1924	大正	13	70	14	10
	1925		14	69	17	12
	1926		15	68	18	23
	1927	昭和	2	67	25	20
	1928		3	66	8	21
	計				82	86

注：1）数字は実数
2）年齢は平成６年12月31日現在の満年齢

ただし、東京・福島の両調査では、これら２つのコーホートに加えて、50～54歳、40～

44歳、30〜34歳の３つのコーホートが標本に含まれていたが、沖縄調査では、調査員の人数、調査期間、経費の制約から、年長の２つのコーホートに限定せざるを得なかった。ライフコースの時代差をはっきりと出すためには、近接するコーホートではなく、もっと出生年が離れたコーホートを比較したほうがよりよい結果が得られたかもしれない。しかし、最年長のコーホートはいうまでもなく、２番目のコーホートもすでに高齢に達しており、かれらのライフコースについてのデータ収集を急ぐべきであると判断されたので、上記のような設定とし、若いコーホートの調査は将来にまわすことにした。出生年別・性別の標本構成は表3-1を参照されたい。なお、本書では、以下、２つのコーホートのうち年長のほうを「C-Ⅰ」、若いほうを「C-Ⅱ」と表記する。また、文中、それぞれのコーホートの男女の各集団を、「グループ」とよぶことにする。

３．１．２．対象地の選定と概況

対象地の選定作業

今回の調査対象者のユニバースは沖縄県全体であることを想定しているが、いかに年齢層（出生コーホート）が限られているといっても、標本抽出を県民全体からおこなうことは困難であったので、実際の対象者選定は、西原町・南風原町・豊見城村の３ヵ町村の住民を母集団としておこなった。その手順は後で述べるとして、ここではこれら３ヵ町村を選定した理由を明らかにしておきたい。

この調査研究のデータ収集が回想法に依っているため、調査時点（現在）の母集団人口や地域の特性にあまりこだわる意味はないかもしれない。とくに、戦争を経て多くの人が死亡した世代の現在の生存者のみを調査しても、それによって明らかにされるコーホートのライフコース過程には始めから偏りがあるからである。とはいえ、もとはそのほとんどが純農村だった沖縄の各地域は、戦後50年余の間に主に都市化の度合いにかんしてかなりの格差が生じており、それがライフコースの展開過程に影響を及ぼしていることは推測するにたやすい。そこで、今回の調査にあたっては、なるべく県全体の平均に近い値をもつ調査地点を選定するように努めた。なお、選定にあたって、本島北部地域、宮古・八重山地域、南部離島は、大学から遠く、通いの調査は不可能、または困難であるのであらかじめ除外した。

残る沖縄本島中南部の市町村から、まず第一次産業人口比、農家世帯率、農業部門別出荷割合などの指標からみて農村としての色合いをほかよりも残す地域が除かれ、つぎに人口密度と持ち家率からみて都市化の程度が極端に高いと思われる地域（市部がこれにあたる）が外された。さらに、米軍基地の面積が高い割合で占めている地区は、それだけで強制移動の体験者が多く、また、現住している人々の生活における基地の存在が占めるウェイトが他地域よりも大きい、すなわちそのようなところは、県の全体像とは異なっていると思われるので除外した（嘉手納町、北谷町、沖縄市がその代表である）。上のような選定作業を経て、南部では、豊見城村、南風原町の２町村、中部では石川市、具志川市、西原町、北中城村、中城村の５市町村、合計７町村が残ったが、最終的には、冒頭にも述べたように大学から通いで調査できる地域であること、そして、著者自身が過去に調査の対

象とした地域と重複しないことなどを考慮に入れて、西原町、南風原町、豊見城村の計3町村が選定された。これら3つの町村の位置は図3-1に示した。

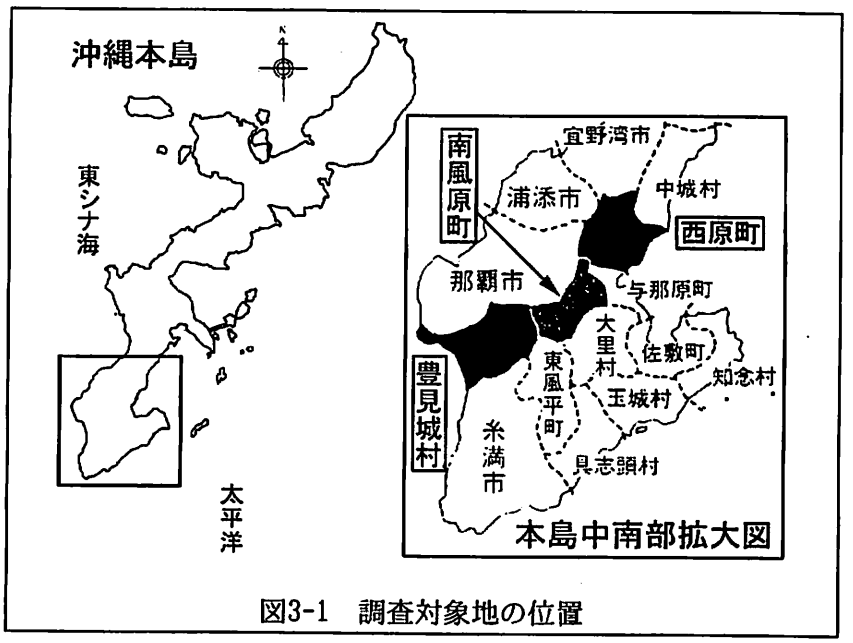

図3-1　調査対象地の位置

対象地の概況

今回の調査の対象地となった3町村は、いずれも県都である那覇市に隣接し、ちょうどこれを北東から東回りで南まで取り巻くように位置している。それぞれの町村の特徴をあげておこう。

琉球大学の敷地の一部が含まれる西原町は、今日までサトウキビを基幹産業として第一次産業が発展してきた。今日、町ではキビの生産向上を図ると同時に換金性の高い作物である花卉の生産や畜産などの振興を図っている。盛んな農業経営の一方で、近年は都市化も進んできている。町内の中心部を南北に走る国道329号線、市部へつながる県道38号線の沿線に商店数が年々増加する傾向にある。また企業進出も昭和48年頃から急激に増加し、現在約60社の各種工場が立地している。

西原町の南境界に接する南風原町も、やはり古くからサトウキビと野菜栽培を主とする純農村であったが、那覇市の近郊にあるため近年の人口流入に伴う農地の転用は著しく増加している。商工業は町内の北部をを東西に走る国道329号線沿いを中心に発展し、商業は町内に約900の事業所を数える。

那覇市の南側に隣接する豊見城村は、戦前・戦後を通じて甘藷・野菜づくりが盛んな純農村地帯であったが、昭和45年頃から急速に人口が増加し、それに伴い商工業が盛んになった。那覇市のベッドタウンとしての住宅街と農村の両面を持った近郊村となっている。農業は近年宅地化の波を受けつつあるが、住宅と農業振興地域の土地利用の法的規制で線引きをして農地の確保に努めている。野菜に加え戦前からの甘藷生産が盛んである。また、増加する人口に合わせて第3次産業も盛んとなっており、就業人口の約7割が第3次産業

に就いている。

3. 1. 3. ライフコース出来事調査(第一次調査)の実施

調査項目

第一次調査の調査項目は、内容面で大きく分けると、前章で述べたような、人が人生上で保有する社会的諸役割、それに関連すると思われる属性や出来事、主観的認知・評価の3種類からなり、諸役割が展開する経歴(career)ないし生活・活動歴などの領域ごとに、これらすべて、あるいは一部が含まれている。調査にあたって採用された領域は、定位家族経歴、生殖家族経歴、教育経歴、職業経歴、の諸経歴に加え、地域移動歴、基本属性（フェースシート）項目、その他の出来事（自宅取得、資産自己評価、階層帰属意識、大病けがなどの経験）である。

調査項目の形式は、その大部分をなす客観的なことがらについての質問では、いつ（何年に）、どのような出来事ないし状態を経験したかをたずねるものとなっている。たとえば、学校を終了したのは昭和何年で、それはどのレベルの学歴か、あるいは初めての結婚は何年であったか、また相手とはどのようにして出会ったのか、などである。

標本抽出

第一次調査の対象者は、先に述べた標本設計に従って、1914～18年生れ（C-Ⅰ）および1924～28年生れ（C-Ⅱ）の男女で、1994（平成6）年5月30日（豊見城村は5月27日）現在で住民基本台帳に記載されている住民から等間隔抽出法で選定した。ただし、病院・老人ホームなどの施設入所者はあらかじめ除外した。また、西原町と豊見城村では、日程上の都合によりすべての地区（自治会区）の閲覧がかなわなかったため、転入人口が多いと思われる、主として新興住宅地や県営の高層団地によって構成される新しい自治区のいくつかは割愛した。標本規模（対象者人数）は、1994年の1回目の実査では425人、1995年の2回目の実査では183人の、合計608人とした。当初の計画では、統計的調査は1994年だけで済ませ、次の年には対象者を絞った生活史インタビューをおこなう予定であったが、後述のように有効回収率が思わしくなかったため、翌1995年に補足調査というかたちで2回目のデータ収集を行った。その際、対象者は前年に作成した住民基本台帳からの転記リストから追加的に調達した。

実査

実査は、1度目の調査は1994（平成6）年7月28日～8月19日、2度目の調査は1995（平成7）年7月8日～7月30日に、構造化した調査票を用いて、訪問面接法でおこなった。実査の結果は表3-2に示したとおりである。2度の調査を通じての有効回収票数と回収率は、それぞれ346人および56.9パーセントであった。なお、調査は筆者が琉球大学で担当している社会学実習とかねておこなったので、その履修学生が本調査の調査員である。これについては、生活史インタビューをおこなった第二次調査についても同様である。

表3-2　有効回収率

調査	性別	コーホート	抽出数	有効標数	有効回収率
第一次調査1994年	男	C-I	99	49	49.5%
		C-II	124	66	53.2%
	女	C-I	101	56	55.4%
		C-II	101	59	58.4%
	計		425	230	54.1%
第二次調査1995年	男	C-I	67	44	65.7%
		C-II	30	16	53.3%
	女	C-I	47	29	61.7%
		C-II	39	27	69.2%
	計		183	116	63.4%
両年度合計	男	C-I	166	93	56.0%
		C-II	154	82	53.2%
	女	C-I	148	85	57.4%
		C-II	140	86	61.4%
	総計		608	346	56.9%

表3-3　実査結果

性別	コーホート	有効	所在不明	短期不在	長期不在	回答不能	その他	N（人）
男	C-I	56.0	3.0	2.4	3.0	35.0	0.6	166
	C-II	53.6	3.9	5.9	7.2	29.4	-	153
女	C-I	57.4	2.0	2.0	4.7	33.2	0.7	148
	C-II	61.0	1.4	6.4	3.5	27.7	-	141
全体		57.0	2.6	4.1	4.6	31.5	0.1	607

注：1）短期不在とは、調査期間中、曜日、時間を変えて３回訪問しても不在のもの
　　2）長期不在とは、調査期間中、旅行、出張などで不在であることが明確なもの

３．１．４．口述生活史調査（第二次調査）の実施

口述生活史インタビューを行った第二次調査では、第一次調査で聞けなかったライフコース経験の詳細を、各経歴にわたってたずね、対象者に語ってもらった。その際、主な出来事経験をあらかじめ年表形式にまとめた「ライフコース整理表」と、質問の指針となるような項目を列挙した「面接調査ガイド」とを用いて面接を進めた（巻末資料１参照）。

面接の最後に、対象者に自分の人生をいくつかの時期に区分してもらい、それを用紙に記入してもらうとともに、主観的な人生の浮沈についての曲線図を書いてもらった。面接の模様は、対象者の承諾が得られた場合にのみ、テープに録音した。ほとんどのケースで録音が可能であった。

対象者の選定

口述生活史インタビューを行った第二次調査の対象者は、第一次調査の結果をふまえて、対象者 346 人のなかから、いくつかの選定基準を立てて選び出した。以下にそれを列挙しておく。

＜基本属性＞

出生地 ・・・・・・・・ 県内出身者は 9 割を超える。しかし、現住所と同じ町村の出身者は、C-Ⅰでは過半数であるが、C-Ⅱでは半数を切る。現住所と同じ町村の出身者であるか否かを選定の基準として、それぞれに該当するケースを選んだ。

居住開始時期 ・・ 現住地への居住開始年代は、1940 年代と 1970 年代に山が見られたので、居住開始時期が、1944 年以前／1945～1971 年／1972 年以降の 3 種類を設定した。

兵役経験有無 ・・ 男性の兵役経験者は 6～7 割であった。選定基準として、兵役経験のある人とない人を選んだ。

＜家族経歴＞

跡取り有無 ・・・・ 男性で、跡取り予定者よりも実際者が多い。そこで、予定者ではなかったけれども実際に跡をとった人／予定者であったけれども、実際にとらなかった人/それ以外の 3 つを基準とした。

親との別居有無　初離家以前の親との別居経験者は、どのグループも 1 割以上あり、C-Ⅱ男性は 4 分の 1 であった。そこで、初離家以前の親との別居経験の有無をみた。

親との同居有無　結婚後の親との同居経験者は 4 から 6 割であった。選定基準として、結婚後の親との同居経験有無をみた。

初婚時機評価 ・・ 早い／標準／遅いの 3 つを基準とした。

初婚の形態 ・・・・ 見合い・紹介、恋愛の両方を選んだ。

既婚子との同居有無 ・・・・・経験者は 3～6 割であった。選定基準として、既婚子との同居経験有無

家族との死別経験有無 ・・・親を 1945 年に亡くしている人／それ以外、配偶者を 1950 年までに亡くしている人／それ以外、配偶者と死別したが、再婚しなかった人／それ以外、初めての子どもの死亡を 1950 年までに経験した人、祖父母のいずれかを 1945 年に亡くしている人／それ以外

＜教育経歴＞

中退経験 ・・・・・・ 中退経験の有無

＜職業経歴＞

管理職への昇進有無

安定職の開始時機 ・・・・・ 安定職の開始年が 1946 年以後／それ以外（1945 年以前）

＜居住経歴および自宅取得＞

自宅取得時期 ・・ 沖縄の本土復帰のころに自宅取得が集中していた。1970 から 1975 年に自宅取得を経験した人／それ以外の２種類とした。

以上の基準をもとに第二次調査の対象者を選定したところ、表 3-4に掲げたように、４つのグループで合計 81 人が確定した。

実査

生活史調査の実査は、やはり第一次調査の場合と同じく、２年度に分けて行った。その理由は、学部の調査実習とかねており、面接調査を担当した学生の人数、調査可能期間の条件によるものである。実査は 1996 年と 1997 年の、いずれも夏季に実施した。表 3-4に調査後の有効票本数を示す。

表3-4　生活史調査の結果

	96年調査		97年調査		総計	
	標本数	有効標本数	標本数	有効標本数	標本数	有効標本数
C-Ⅰ男性	10	6	12	7	22	13
C-Ⅱ男性	9	9	11	9	20	18
C-Ⅰ女性	10	5	10	8	20	13
C-Ⅱ女性	9	5	10	7	19	12
計	38	25	43	31	81	56

生活史データの作成

テープに録音されたケースについては、まず調査員とのやりとりのすべてを反訳し、これをテープ起こし文とした。つぎに、調査員が、これをもとに、Ａ４数ページほどの生活史レポートに要約した。巻末資料２として、その一部を掲載した。

３．２．対象者の基本属性

本節では、調査の対象者の基本属性を 1994・1995 年の第一次調査の結果から示しておく。以下、出生地と現住地および居住開始時期、世帯の属性、対象者個人の社会的属性、その他、の４つに分けてみていこう。

３．２．１．出生地と居住開始時期

出生地

表3-5にあるように、男女ともに９割以上の人が県内の出身である。県外出身者はいずれのコーホートにおいても 2～5 名程度である。現住所と同じ町村の出身者は、C-Ⅰでは過

半数を占めるが、C-IIでは、男性の南風原町出身者をのぞき、半数を切っている。

表3-5　対象者の出生地と現住地

単位：人

		現住地	出生地					
			同一字	同一町村	県内	県外	外国	N
男	C-I	豊見城村	15 53.6%	5 17.9%	7 25.0%	1 3.6%	0.0%	28 100.0%
		西原町	11 29.7%	13 35.1%	13 35.1%	0.0%	0.0%	37 100.0%
		南風原町	21 100.0%	1 100.0%	4 100.0%	1 100.0%	1 100.0%	28 100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	47 50.5%	19 20.4%	24 25.8%	2 2.2%	1 1.1%	93 100.0%
	C-II	豊見城村	9 47.4%	1 5.3%	9 47.4%	0.0%	0.0%	19 100.0%
		西原町	7 28.0%	4 16.0%	10 40.0%	2 8.0%	2 8.0%	25 100.0%
		南風原町	23 60.5%	2 5.3%	10 26.3%	2 5.3%	1 2.6%	38 100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	39 47.6%	7 8.5%	29 35.4%	4 4.9%	3 3.7%	82 100.0%
女	C-I	豊見城村	8 26.7%	13 43.3%	8 26.7%	1 3.3%	0.0%	30 100.0%
		西原町	5 20.8%	10 41.7%	7 29.2%	0.0%	2 8.3%	24 100.0%
		南風原町	18 58.1%	0 0.0%	12 38.7%	0.0%	1 3.2%	31 100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	31 36.5%	23 27.1%	27 31.8%	1 1.2%	3 3.5%	85 100.0%
	C-II	豊見城村	9 30.0%	4 13.3%	16 53.3%	0.0%	1 3.3%	30 100.0%
		西原町	3 15.0%	4 20.0%	9 45.0%	3 15.0%	1 5.0%	20 100.0%
		南風原町	9 25.0%	7 19.4%	20 55.6%	0.0%	0.0%	36 100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	21 24.4%	15 17.4%	45 52.3%	3 3.5%	2 2.3%	86 100.0%

注：出生地のカテゴリーのうち、西原町と南風原町は、それぞれ旧西原村、南風原村を含む。また、表中、「同一」とは現住地と同じの意。

現住地への居住開始時期

現住地への居住開始年は、C-IIの男性をのぞく、3つのグループでは、1940年代に1つの山がみられる。また、C-Iの女性をのぞく、3つのグループでは、1970年代に1つの山

がある。前者は、終戦直後に今のところに住み始めたケースを、後者は、沖縄の本土復帰のあたりに現住地に住み始めたケースが含まれているといえよう（表3-6）。居住開始年齢の分布も、前述の居住年のそれに対応した傾向となっている（表3-7）。男女の違いとして指摘しておきたいこととして、女性の多くは、結婚とともに居住地を移動しているので、男性に比べて、現住地への居住開始年では遅く、また年齢は高い。

表3-6　居住開始年

		1910年代	1920年代	1930年代	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	N (100%)
男	C-I	22.8	2.2	1.1	23.9	10.9	7.6	16.3	14.1	1.1	92
	C-II	-	19.5	2.4	11.0	9.8	7.3	31.7	13.4	4.9	82
女	C-I	2.4	-	25.0	25.0	9.5	8.3	15.5	9.5	4.8	84
	C-II	-	1.2	-	24.4	17.4	5.8	29.1	17.4	4.7	86

表3-7　居住開始年齢

		0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	N (100%)
男	C-I	22.8	3.3	7.6	25.0	5.4	14.1	10.9	10.9	92
	C-II	20.7	2.4	17.1	8.5	20.7	22.0	8.5	-	82
女	C-I	2.4	14.3	17.9	26.2	6.0	14.3	10.7	8.3	84
	C-II	1.2	2.3	32.6	9.3	17.4	26.7	10.5	-	86

3. 2. 2. 現在の世帯の属性

世帯規模

対象者の家族規模をつかむために同居世帯人数をみてみると、表3-8にあるように、男性に比べ、女性は同居人数が少ない人の割合が高い。特に女性は一人暮らし世帯の割合が高い。ちなみに、対象者全体の同居世帯人数の平均は 3.8 人であった。

表3-8　世帯人数

		1人	2人	3～5人	6人以上	N (100%)	平均（人）
男	C-I	6.5	34.4	31.2	27.9	93	3.9
	C-II	2.4	28.0	52.4	17.2	82	3.7
女	C-I	18.8	21.2	32.9	27.1	85	3.8
	C-II	10.5	24.4	37.2	27.9	86	3.8

注）全体平均＝3.8人

世帯構成

対象者が現在暮らしている世帯の構成では、世帯規模でもみたように、女性の単身世帯率は高く、男性の 3 倍以上である。夫婦世帯、核家族世帯については、各コーホートとも男性の該当者が多い。直系世帯率は、男女とも、C-IIに比べC-Iが高い。男女で比較したばあい、女性の直系世帯率が高い。これらをまとめると以下のように言えるだろう。女性は男性に比べ、単身世帯と直系世帯が多い。男性は女性に比べ、夫婦世帯や核家族世帯が多い。また、男女を通じて、C-IIに比べて、C-Iでは単身世帯と直系世帯が多い。こうした傾向は対象者と配偶者の年齢差による死別・対象者の高齢化による既婚子との同居などが原因と考えられよう（表3-9）。

表3-9　世帯構成

		単身	夫婦	核家族	直系家族	N (100%)
男	C-I	6.5	33.3	21.5	38.7	93
	C-II	2.4	24.4	36.6	36.6	82
女	C-I	19.0	10.7	13.1	57.1	84
	C-II	10.5	22.1	24.4	43.0	86

世帯主からみた続柄

男性では、ほとんどのばあい、対象者本人が世帯主である。ただし、C-Iにおいてはその割合がC-IIよりも低く、子どもが世帯主というケースが増える。配偶者が世帯主というケースはなかった。一方、女性では、本人が世帯主であるばあいは少なく、C-Iでは世帯主の親、C-IIでは同配偶者が一番多い。C-Iで、配偶者の割合が減り、本人もしくは親が多くなっているのは、いうまでもなく、夫と死別しているケースであろう。特に、前者は、単身世帯率の高さと対応している（表3-10）。

表3-10　世帯主との続柄

		本人	配偶者	親	子	N (100%)
男	C-I	79.6	-	16.1	1.1	93
	C-II	93.9	-	6.1	-	82
女	C-I	32.9	23.5	41.2	-	85
	C-II	22.1	61.6	15.1	1.2	86

持ち家率

表3-11にみられるように、対象者のほぼ全員が持ち家の居住者である。

表3-11　持ち家率

		持ち家	借家	N (100%)
男	C-I	96.8	3.2	93
	C-II	97.6	2.4	82
女	C-I	96.5	3.5	85
	C-II	95.3	4.7	86

農業の有無

対象地である 3 町村がいずれも以前は純農村であったという背景を考慮して、現在の世帯における農業の有無、定位家族の農業の有無をみておこう。対象者の世帯が現在農家である割合は、どのグループも 3 割前後であった。男性よりも、女性に、C-IとC-IIとの差が大きい（表3-12）。

表3-12　現在の農業有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-I	34.4	65.6	93
	C-II	39.0	61.0	82
女	C-I	25.9	74.1	85
	C-II	33.7	66.3	86

表3-13　定位家族での農業有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-I	86.0	14.0	86
	C-II	77.6	22.4	76
女	C-I	92.4	7.6	79
	C-II	71.1	28.9	83

これに関連して、対象者の生家の家業が農業であったかどうかをみておこう。C-Iでは男女ともに約 9 割、C-IIでは男女共に 7 割以上と、高率を示した（表3-13）。

3. 2. 3. 対象者個人の社会的属性

親からみた続柄

表3-14で、対象者の、親からみた続柄をみると、長男・長女である割合は、C-Ⅰの女性は5割弱で、その他は4割前後である。きょうだい人数（本人を含む）の平均は、C-Ⅰ男性が5.8人、C-Ⅱ男性が6.0人、C-Ⅰ女性が5.8人、C-Ⅱ女性が6.4人となっており、各コーホートともそれほど差はみられなかった。

表3-14　親からみた続柄

		長男・長女	長男・長女以外	N (100%)
男	C-Ⅰ	41.9	58.1	93
	C-Ⅱ	41.5	58.5	82
女	C-Ⅰ	48.2	51.8	85
	C-Ⅱ	37.2	62.8	86

現在の結婚上の地位

表3-15にみられるように、男性の配偶者（妻）は健在なばあいが多いが、女性の配偶者（夫）は、C-ⅠがC-Ⅱよりも離死別の割合が高い。具体的な数値をあげると、男性についてはC-Ⅰ、C-Ⅱどちらのコーホートも既婚が多く、両者とも約9割を占めた。なお男性の未婚者はいなかった。一方、女性のばあいは、C-Ⅰにおいて離死別の割合が70.6パーセントと半数を超えているのが特徴的である。逆に、C-Ⅱにおいては既婚が75.3.パーセントである。しかし同じコーホートの男性と比べると離死別の割合が高い。なお、女性ではC-Ⅰに2人、C-Ⅱに1人未婚の人がいた。

表3-15　結婚上の地位

		既婚	離死別	未婚	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	90.3	9.7	-	-	93
	C-Ⅱ	91.5	8.5	-	-	82
女	C-Ⅰ	27.1	70.6	2.4	-	85
	C-Ⅱ	75.3	23.5	1.2	1.7	85

教育程度

対象者のほとんど全員が、学校教育を受けた経験がある。C-Ⅰについては、男女ともに旧制の教育制度のもとで教育経歴を終えている。C-Ⅱも男女ともにほとんどが旧制の教育を受けた人だが、中には新制の教育を受けた人もいる。男性は4人、女性は1人が新制の

学卒者であった。

表3-16　最終学歴

		初等	中等	準高等	高等	なし	N (100%)
男	C-I	89.1	7.6	2.2	1.1	0.0	92
	C-II	78.0	18.3	2.4	1.2	0.0	82
女	C-I	92.9	3.5	-	-	3.5	85
	C-II	86.0	11.6	-	-	2.3	86

対象者の最終学歴は、表3-16にみられるように、初等教育終了者が対象者の大多数をしめた。どのグループも大多数の人が初等教育の終了者である。ただし、C-Iに比べC-IIではその割合は若干減少し、中等以上の教育終了者がわずかながら増加する。また、総じて男性に比べ女性の学歴が低いといえる(1)。

現在の仕事の有無と内容

現在職業についているか、すなわち現職の有無をみると、有職者の率が高かったのは、コーホート別ではC-II、男女別では男性であった。とくにC-IIの男性のばあい半数が現在職業についている。60代後半の男性にとって、まだ仕事から引退するのは早いということだろう。また、今回の対象者には農家も多く、それも関連があると考えられる(表3-17)。

表3-17　現職の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-I	31.2	68.8	93
	C-II	50.0	50.0	82
女	C-I	16.3	83.7	49
	C-II	33.9	66.1	56

表3-18　現職の内容

		ホワイト1	ホワイト2	ブルー	自営1	自営2	農業	その他	N (100%)
男	C-I	3.4	-	3.4	6.9	17.2	65.5	3.4	29
	C-II	4.9	-	17.1	2.4	7.3	63.4	4.9	41
女	C-I	-	-	-	-	50.0	50.0	-	10
	C-II	4.2	4.2	12.5	-	16.7	54.2	8.3	24

現職の内容をみてみると、農業を含めた自営業が全体の70パーセント以上を占め、そのうち、C-Ⅰの女性以外は半数以上が農業に従事し、C-Ⅱの男性だけがブルーカラーの割合が高くなっている。自営業が多いのは、被雇用職と異なり、定年がないため、高齢になっても働けるからであろう（表3-18）。

3. 2. 4. その他

大病・けが、生まれつきの障害有無

大病・けがの経験があるかという質問に対しては、全体的に女性よりも男性のほうに経験率が高かった。男性が40～50パーセント台であるのに対し、女性は30パーセント～40パーセント台であった。男性についてみるとC-Ⅰの経験率が若干高く、C-Ⅰで50.5パーセント、C-Ⅱで49.5パーセントの経験率であった。女性についてみるとC-Ⅱの経験率が若干高く、C-Ⅰ 32.9パーセント、C-Ⅱ 43.0パーセントとなった（表3-19）。回数については全コーホートを通じて1回というのが最も多かった。

表3-19　大病・けがの経験

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	50.5	49.5	93
	C-Ⅱ	48.7	57.3	82
女	C-Ⅰ	32.9	67.1	85
	C-Ⅱ	43.0	57.0	86

表3-20　大病・けがの経験年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	46	31.0	52.5	70.3	39.3
	C-Ⅱ	35	18.9	51.0	62.1	43.2
女	C-Ⅰ	27	32.3	58.0	67.8	35.5
	C-Ⅱ	37	39.6	51.3	60.3	20.7

大病・けがの経験年齢（初回の経験）についてはいずれのコーホートも中央値は50歳代であった（表3-20）。

大病・けがの影響については、結婚・職業生活・人生観など、影響なしも含めて13のカテゴリーから影響があったと思われる事柄をすべて選んでもらった。その結果、男女・コーホート間を通じて「影響なし」と回答した人の割合が最も多かった。ただし男性では職業生活に「影響あり」と回答した人がC-Ⅰで21.7パーセント、C-Ⅱで31.4パーセントいた（表3-21）。

なお、生まれつきの障害があるかという問に対して、男性はC-Ⅰで2人、C-Ⅱで3人、

女性はC-Iでは0人、C-IIで2人があると回答したがいずれのケースも影響なしと回答している。

表3-21　大病・けがの影響の有無と種別

		なし	職業生活	生活習慣	結婚
男	C-I	52.2	21.7	13.0	-
	C-II	48.6	31.4	8.6	2.9
女	C-I	57.1	10.7	10.7	-
	C-II	70.3	10.8	5.4	-

（続き）

		出産	親子関係	人生観	その他	複数	N (100%)
男	C-I	-	-	2.2	10.9	-	46
	C-II	-	-	-	-	8.6	35
女	C-I	3.6	3.6	3.6	-	10.7	28
	C-II	2.7	-	5.4	2.7	2.7	37

兵役経験

兵役は、男性の両方のコーホートにおいて半数以上の人が経験していた。C-Iは 69.9 パーセントと、3人に2人の割合で兵役を経験している（表3-22）。経験回数は、ほとんどが1回であるが、C-Iの約4分の1は、2度以上経験していた。C-IIでは全員が1回である（表3-23）。なお、ここでの兵役には、徴兵制度に基づく正規の兵隊だけでなく、沖縄戦末期に徴用として大量動員されて正規軍と一緒に行動した経験も含まれていると思われる。

表3-22　兵役経験有無

	あり	なし	N (100%)
C-I	69.9	30.1	93
C-II	57.3	42.7	82

表3-23　兵役回数

	1回	2回	3回	N (100%)
C-I	69.2	24.6	6.2	65
C-II	100.0	-	-	47

兵役の経験時機については、開始は初回の経験を、終了は最後の経験をみておく。いうまでもなく、経験回数が1回の場合は、終了は初回のそれと重なる。まず年齢をみると、C-Iの開始と終了の年齢は、それぞれ 21.8 歳と 29.0 歳であった。一方、C-IIでは、それぞれ 18.8 歳、19.5 歳であった。こんどは、経験の年次をみると、兵役を最終的に終わったのは、どちらのコーホートも終戦の年である 1945（昭和 20）年であるが、開始年は、C

-Ⅰは 1938（昭和 13）年であり、一方、C-Ⅱは 1944（昭和 19）年であった。ちなみに、兵役の通算期間（実際についていた期間の合計）の平均は、C-Ⅰは 4.3 年、C-Ⅱは 1.1 年であった。2つのコーホートを比較して明らかなように、C-Ⅰの人が兵役にかかわった期間は、もちろんこの間連続していたわけではないが、非常に長い。

表3-24　兵役開始年齢（初回）

	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	65	20.6	21.8	26.4	5.8
C-Ⅱ	47	17.5	18.8	19.6	2.1

表3-25　兵役終了年齢（最後）

	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	65	26.8	29.0	30.3	3.5
C-Ⅱ	47	18.3	19.5	21.0	2.7

表3-26　兵役開始年（初回）

	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	65	1937.4	1938.4	1942.8	5.4
C-Ⅱ	47	1943.9	1944.4	1945.0	1.1

表3-27　兵役終了年（最後）

	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	65	1944.5	1945.1	1945.7	1.2
C-Ⅱ	47	1944.9	1945.2	1945.8	0.9

出征した地域にもコーホート間で違いがみられる。C-Ⅰは約7割の人が国外で兵役を経験しているのに対し、C-Ⅱでは逆に約7割の人が国内で兵役を経験している。初回の兵役にかんする限り、前者については日中戦争・太平洋戦争への参加、後者については沖縄戦への動員であろう（表3-28）。

表3-28　出征地域（初回の兵役）

		国内	国外	N (100%)
男	C-Ⅰ	32.3	67.7	65
	C-Ⅱ	72.3	27.7	47

手持ち資産の主観的評価

対象者の経済階層を間接的に知るために、現在の手持ち資産（預貯金・不動産など）だけでどの程度の期間生活できるかをたずねた。回答カテゴリーは、表3-29のような、「全く暮らせない」から「5,6年ぐらい」「それ以上」など7つのカテゴリーを用意した。手持ち資産だけで「1年」以上暮らせると回答した人は女性に比べ男性が多かった。男性は手持ち資産だけでは暮らせないもしくは「1,2ヶ月」と答えるか、「1年以上」暮らせると答えるか大きく答えが割れるのに対して、女性は「半年」から「1年」という中間派の数が男性よりも多かった。また、コーホート間では、総じて男女ともにC-ⅠはC-Ⅱに比べて手持ち資産を低く評価する傾向があると言える。

表3-29　手持ち資産の主観的評価

		暮らせぬ	1,2ヶ月	半年	1年
男	C-Ⅰ	37.2	9.3	3.5	4.7
	C-Ⅱ	14.1	8.5	6.1	7.3
女	C-Ⅰ	44.3	7.6	8.9	8.9
	C-Ⅱ	39.2	6.3	11.4	10.1

（続き）

		2,3年	5,6年	それ以上	N (100%)
男	C-Ⅰ	5.8	10.5	29.1	86
	C-Ⅱ	9.8	3.7	50.0	82
女	C-Ⅰ	7.6	5.1	17.7	79
	C-Ⅱ	13.9	5.1	13.9	79

階層帰属意識

表3-30　階層帰属意識

		上	中の上	中の下	下	N (100%)
男	C-Ⅰ	3.4	39.3	43.8	13.5	89
	C-Ⅱ	7.5	46.3	32.5	13.8	80
女	C-Ⅰ	8.4	44.6	37.3	9.6	83
	C-Ⅱ	5.9	35.3	51.8	7.1	85

階層帰属意識についてみると、中の上・中の下と回答した人が男女共に7割を超えてい

る。男性では約7割が中流意識をもっているのに対し、女性はC-Ⅰ・C-Ⅱ共に8割を超え、男性より女性に中流意識が強いことがうかがえる。また階層を上および中の上と、中の下および下という、2つのグループに分けてみたばあい、男性は、C-ⅠよりもC-Ⅱのほうが現在の階層を比較的高くみている。これとは反対に、女性のばあい、C-Ⅰに比べC-Ⅱは現在の階層を比較的低くみている（表3-30）。

人生観

対象者が現在もっている人生観について、「人生はなにによって決まるか」と質問し、「努力」（自律派）、「偶然」（他律派）、「生まれる前から決まっている」（運命派）という3つのカテゴリーから選んでもらった（表3-31）。C-Ⅰでは自律派と運命派が同じ割合、男性のC-Ⅱ，女性のC-Ⅰでは運命派が多く、女性のC-Ⅱでは自律派が多かった。性別や年齢によってその数は大きく異なる。まず各コーホートごとに回答の多かった順に選択肢をならべてみる。男性は、C-Ⅰが自律派＝運命派・他律派の順、C-Ⅱが運命派・自律派・他律派、女性はC-Ⅰが運命派・自律派・他律派、C-Ⅱが自律派、運命派、他律派の順であった。

表3-31　人生観

		自律派	他律派	運命派	N (100%)
男	C-Ⅰ	44.4	11.1	44.4	90
	C-Ⅱ	29.3	12.2	58.5	82
女	C-Ⅰ	38.6	12.0	49.4	83
	C-Ⅱ	53.5	5.8	40.7	86

男女別にみたばあい、C-Ⅰで男性が44.4パーセント、女性が38.6パーセント、C-Ⅱでは男性が29.3パーセント、女性は53.5パーセントが人生は努力で決まると回答している。またC-Ⅰでは男性の44.4パーセント、女性の49.4パーセント、C-Ⅱでは男性の58.5パーセント、女性の40.7パーセントが運命派である。他律で人生が決まるいう他律派は各コーホートにおいて最も少なく、パーセンテージでも実数でも大きな差はない。年齢別にみたばあい、男性においては、C-ⅡよりC-Ⅰにおいて自律派の割合が多い。運命派は逆にC-Ⅱになると増加する。女性においては、C-ⅠよりC-Ⅱにおいて自律派の割合が増加する。運命派はC-Ⅰでは増加し、自律派と運命派がほぼ拮抗している。

以上、調査対象者のプロフィールについて、おもに現在（調査時点）の属性を中心にみた。次章以下では、ライフコース上の出来事経験をみていこう。

[注]

(1) 実査では28の学歴カテゴリー（学歴なしを含む）を用いたが、ここではそれらを下の表のように、初等・中等・準高等・高等の4カテゴリーに分類して用いた。なお、終戦後の米軍の軍

政下で設置されたいくつかの特殊な学校については、その学校の履修形態・性格などを考慮に入れた上で分類した。

表　学歴分類表

	旧制		新制	
初　等	1．尋常小	2．高等小	17．中学	
中　等	3．中学 5．高等女学校 （4年制5年制） 7．師範学校	4．実業学校 6．高等女学校 8．陸軍幼年学校	18．高校 20．沖縄外国語学校	19．沖縄文教学校 21．教員訓練所
準高等	9．高校 11．高等師範 13．海軍兵学校	10．専門学校 12．陸軍士官学校 14．陸海軍経理学校	22．高等専門学校 24．大学校 （2年制以下）	23．短大
高等	15．大学	16．大学院	25．大学 27．大学校 （3年制以上）	26．大学院
	28．学歴なし			

(2)　職種のカテゴリーは、次表を参照。

職業カテゴリー

分類1	分類2	分類3
ホワイトカラー	ホワイトカラー1	専門・技術的職業・管理的職業・職業軍人
	ホワイトカラー2	事務的職業・販売的職業
ブルーカラー	ブルーカラー	運輸・通信・保安的職業・技能的職業・サービス業
自営業	自営業1	専門・技術的職業
	自営業2	商業・工業・サービス業
	農業	農業

4 出来事経験のタイミングからみたライフコース

本章では、第一次調査の結果をもとに、大正初期、および大正末期から昭和初期という、2つの出生コーホートに属する対象者の人生出来事の経験の、定量的な側面を概観し、さらに、ライフコースの時代的な背景との関連を考察しておきたい。なお、本章はすでに公表されているこの調査の報告書『激動の沖縄を生きた人びと——ライフコースのコーホート分析——』（1998年）の要約である。

これまで述べてきたように、本研究では、ライフコースを主要な社会的役割の保有状態ないし、その取得・変容・離脱の目印となるような人生出来事(life event)の時機(timing)から再構成し、その構造・過程を主要な経歴間の相互連関として考察する。時機timingは、出来事が経験される時間的な位置関係をあらわす概念であり、たんに何歳で経験したかといった経験年齢、すなわち生涯時間軸上の位置だけでなく、歴史時間軸上の位置を表す経験年次、あるいは個人が所属する集団や組織の時間軸上の位置（所属年数や、ほかの出来事との順序・間隔）など、いくつかの次元を含む複合的な指標であるが、本書では、とくに、個人の生涯時間上の発達過程と、歴史的条件あるいは社会変動とのかかわりを記述するという目的に照らして、経験年齢と経験年次（年代）をとりあげた。たとえば、ある人は初婚を1945（昭和20）年に22歳で経験したといったような測定のしかたをした。

このようにして再構成されたライフコースは、ほんらい個人水準の経験であるが、本研究では、分析にあたって、それを集合（集団）の水準でとりあつかっている。具体的には、出生コーホート集合および性別を単位とし、経験の有無はこれらの集合における経験率、経験年齢や年次は中央値で表される平均的な年齢や年次が問題にされる。というのも、われわれは、個人の出来事経験は、条件を同じくする集合（集団）は似たようなものになり、それが異なる集合体どうしでは違ったものになる、いいかえれば規則性ないしパターンが存在すると仮定しており、その条件のなかでも重要なものとして、歴史時間への位置づけ、すなわち出生年を考えているからである。ライフコースの歴史的変化の記述・説明のために出生コーホートを用いたのはこのような理由による。これに加えて、このほかにも、本書では、性別をもうひとつの比較軸としてとりあげた。性別は、生物学的・心理学的に重要な意味をもつばかりでなく、文化に規定された社会的カテゴリーとして、ライフコースをパターン化するキー変数であると考えられる。

そして、ライフコースのパターンを発見するための手がかりとして、本研究では、出来事経験の「標準性(normativeness)」という概念を用いている。ある出来事が標準的(normative)であることの基準というものは単純ではなく、ここで詳しく述べる余裕はないが、本書では、操作的に、経験率が75%以上の出来事を標準的な経験とし、また、経験時機については、後から述べるように、中央値を中心として全体の半数が経験する時機を標準的な経験幅としている。

以上のような枠組にもとづいて、本章ではまず、出来事の普及度（経験率）、そして時機（経験年齢・年次）の中央値とばらつきをコーホート間およびその下位集団間で比較し、さらに、複数の出来事を取り上げて、それらの順序と間隔、役割保有状態の持続時間、異なる役割の保有状態の複合度の諸点を記述していく。

ここで、本書における年齢・年次のあつかい方および尺度について説明しておこう。経験年齢は、誕生日の前後によって年次の値との齟齬が生じないように、各個人が経験した年の 12 月末日時点での年齢を用いた。これをもとに、コーホートの代表値として中央値 Median（Med.と表記。以下同じ）を、各出来事のコーホート全体としての経験速度またはばらつき（個人差）の指標として四分位数（Q1・Q3）・四分位範囲（QR）を、それぞれ用いた。通常用いられる平均値や標準偏差のかわりに、これらの統計的指標を用いる理由は、未経験者を母数に含められるという利点があるからである。それぞれの数値の意味としては、中央値は男女各コーホートの半数の人が経験し終えた年齢・年次を、第１四分位数（Q1）は同じく早いほうから４分の１の人、第３四分位数（Q3）は４分の３の人が経験し終えた年齢または年次を表している。また、四分位範囲（QR）は、Q3 と Q1 の差をとったもので、中央値を中心に半数の人が経験するゾーンを表している。

4．1．ライフコースにおける主要な移行

本節では、ライフコース上の出来事経験の全体像をとらえてみたい。その際、人生の節目を形づくると思われる構成する主要な人生段階への移行に着目する。取り上げるのは、成人期への移行、中年期への移行、そして高年期への移行である。

表4-1は人生出来事の経験年齢の中央値を一覧にしたものである。また、経験率が本研究の標準性の基準である 75 パーセントに満たない出来事は、数値を括弧に入れて表記してある。これによって、２つの出生コーホート別および男女別のライフコースの輪郭を知ることができよう。

成人期への移行

学卒、初就職、初離家、経済的独立、初婚、第一子出生の６つを成人期への移行出来事として観察する。男女とも、また２つのコーホートとも、これらの出来事の経験年齢にさほど大きな差異は認められない。学歴はほぼ全員が初等教育なので、学卒年齢は、男性が女性より若干高いほかは、違いがない。どのグループも、学卒後まもなく初就職をし、20 歳になる前に初離家を経験している。ただ、C-II男性の初離家年齢は 17.1 歳で、C-Ⅰ男性とは約３年早い。このあたりは、すでにみたように、C-IIの初離家が太平洋戦争中であったことと、しかもその多くが戦争末期にかかっていたことが関係しているかもしれない。

経済的独立は、初離家後まもなく経験されている。C-Ⅰ男性はほかの３つのグループよりも約 2 歳高い。これについては、女性の場合は結婚が親の家計からの独立である可能性が高いことを別にすれば、男性のC-Ⅰの経済的独立を遅くする要因があったのか、あるい

はC-IIのそれを早める要因があったのか、それともその両方かということはにわかに判定できない。ただ、C-I男性の年齢のばらつきが大きく、遅いほうは戦後に持ち越されていること、一方、C-II男性は戦争の時機と重なったことなどを考慮すると、2つのコーホートそれぞれに異なった要因が働いたと推察される。

表4-1　主要な出来事の経験年齢（中央値）

生活（役割）領域				男性		女性	
定位家族	生殖家族	教育・職業	その他	C-I	C-II	C-I	C-II
学卒				14.0	14.9	13.2	13.6
初就職				14.1	15.1	14.1	14.7
初離家				19.9	17.1	19.3	18.6
			兵役開始	(21.8)	(18.8)	-	-
経済的独立				22.1	19.4	19.8	19.6
初婚				24.3	23.3	20.3	21.2
第一子誕生				25.6	24.5	21.8	23.7
安定職開始				28.5	22.8	21.0	22.0
父死亡				28.6	20.6	29.2	24.0
親との同居				(26.8)	(24.2)	(20.3)	(21.9)
			兵役終了	(29.0)	(19.5)	-	-
母死亡				30.9	45.4	31.4	43.3
最長職開始				31.1	27.7	23.5	23.6
末子誕生				40.3	34.5	34.8	33.0
子の卒業開始				44.5	45.3	40.6	41.4
子の結婚開始				53.4	49.4	47.8	48.1
初孫誕生				55.7	50.9	51.0	50.5
			自宅取得	56.8	46.0	51.0	46.0
子の卒業終了				59.6	54.3	54.1	52.8
既婚子との同居				(60.0)	(54.5)	(52.5)	(54.5)
子の結婚終了				68.5	-	64.0	65.8
職業引退				72.3	-	63.5	59.8
配偶者死亡				-	-	54.5	-

注：1）出来事の並び順はC-I男性に準拠させてある
　　2）経験率が75パーセントに満たない場合は括弧に入れてある

初婚年齢は、コーホート差よりも男女差が目立つ。女性は20～21歳までに半数が経験しているのに対し、男性は23～24歳となっている。そして、この違いが、続く第一子出生年

齢にも差異をもたらしていると考えられる。

ところで、C-Ⅰ男性は、経済的独立、初婚あたりから、その後の出来事の経験年齢はおしなべてほかのグループよりも遅くなっていく。ここで、初めて10年間継続した就業としての安定職の開始（当事者に必ずしも意識される出来事ではないが）まで含めて成人期への移行過程をみるならば、C-Ⅰ男性の特異性がさらに目立ってくる。そして、そのことに、このグループの約7割を占める兵役経験が影響していると考えられる。

以上のような成人期への移行過程についてまとめると、学卒、初就職といった移行過程初期では、男女差・コーホート差がさほどみられず、これは農村の人びとに共通の出来事経験の仕方であると言えよう。また、結婚、第一子出生の年齢は、男女差が顕著であり、これはライフコースの男女差という文化的要因に属することだと思われる。女性の経済的独立と安定職開始も、結婚との結びつきが強いという点で、ここに含めてよいだろう。一方、男性にとっての初離家、経済的独立、そして安定職開始の年齢は、2つのコーホートがそれぞれ異なる時代的脈絡ではあるが、戦争によって影響されたものであることが推測される。こうした時代の影響については、またこの後でふれたい。

ちなみに、ここで取り上げたそれぞれの出来事が経験される順序もライフコース研究の重要な関心事項であるが、今回、学卒、初就職、初婚の3つについて集計したところ、8～9割が学卒、初就職、初婚の順で経験されるパターンであったので、それ以上詳しいクロス分析はおこなわなかった。

中年期への移行

そもそも中年期がいかなる特徴をもった時期であって、そしてそれはいつから始まるかといった問題は別途論じられなければならないが、そのことも含めてここでは基本的に、早稲田大学による東京調査に依拠しておきたい。具体的には、末子誕生、末子入学、安定職開始、安定職10年目、自宅取得の4つが「中年移行期」を特徴づける出来事として取り上げる。前の2つは子育て役割の大きな変容、安定職10年目は職業生活の安定を、自宅の取得は地域生活への定着と関連すると考えられる。ただし、末子入学と安定職10年目は、独立した出来事として調査されたものではなく、前者は末子入学に7年（遅生まれの子どもが入学するのは、生後7年目である）を、後者は述べるまでもなく安定職開始年齢に10年を足した数値である。また、東京調査報告書では、これに安定職開始を含めて5つが扱われていたが、ここではすでに成人期への移行に含めてみたので外しておく。

まず、末子誕生は、C-Ⅰ男性をのぞくと30歳台半ばまでに半数が経験していた。C-Ⅰ男性は40歳とほかの3つのグループに比べて高い。おそらく、このグループは、初婚がやはりほかのグループよりも遅く、また、子どもの数が多いことが理由になっているだろうと思われる。ただ、C-Ⅰ女性がなぜ同じコーホートの男性よりも子ども数が少なく、産み終わりも早かったかについては、すでに3章でみたように、戦争の時期に夫と死別し、その後子どもを産まなかった女性が含まれていることが理由である。

このような末子誕生年齢の違いは、当然、末子が小学校に入学する年齢に違いをもたらしてくる。C-Ⅰ男性が47歳でようやく半数の人が末子入学を迎えるのに対し、そのほか

のグループは40歳前後ということになる。

一方、職業経歴をみると、安定職について10年目にあたる年齢は、安定職開始年齢に単純に10を加算すると、男性では、C-Iが38.5歳、C-IIが32.8歳、女性では、C-Iが31.0歳、C-IIが32.0歳ということになる。これを生殖家族経歴との関連でみると、末子誕生よりも若干早くなっている。ということは、どのグループも、子どもを作り終えるまでには職業生活の安定を達成していると言ってよいだろう。

ところが、自宅の取得はこれまでにみたどの出来事よりも遅く、C-Iは男女とも50歳台、C-IIは40歳台半ばまでに半数の人が経験していた。C-I男性にいたっては50歳台半ばに中央値がある。中年期への移行を象徴する出来事の一つとして自宅取得をあげるとするならば、C-Iの、とりわけ男性は、移行完了がきわめて遅く、中年期そのものを長く経験することなく、続く高年期に入っていったということになる。すでにみたように、自宅取得年齢には特定の時代的要因が作用していることが示唆された。もし、C-Iの男性が50歳台半ばにいたってまだ半数の人しか自宅を取得していないような時代的状況があったとすれば、この人びとのライフコース、とくに中年期への移行局面で被った影響は甚大と言わなければならないだろう。

以上の中年期への移行局面の特徴をまとめると、成人期の達成を経て中年期への移行はだいたい30歳台に入ってから始まると言えるが、その移行にかかる期間は、自宅取得を別にすれば、40歳初めまでのおおよそ10年であると言ってよいだろう。ただ、C-I男性は、子どもを戦後も作り続けたために、移行の完了が遅くなっている。すでにみたように、夫を戦争がらみで失った人が半数近くにのぼるC-I女性も、もしそうした死別経験がなければ、コーホート全体としては男性と同じようなパターンになっていただろう。

高年期への移行

さきの中年期への移行と比べると、高年期への移行を形づくる社会的役割の変更として、家族経歴においては子育ての終了を、職業経歴については仕事からの引退を想定することに無理はないであろう。さらに、初孫の誕生を加えてもよいだろう。こうした観点から、子どもの卒業（開始と終了）、子どもの結婚（同）、初孫誕生、仕事からの引退の合計6つについてみていこう。

まず、子どもが初めての学校卒業と同じく結婚の開始が、高年期への移行の前奏曲であるとすれば、それはすでに40歳台から始まっている。ただ、実際には、子どもが結婚し始め、やがて初めての孫が生まれたときに、いよいよ高年期にさしかかったと実感する人が多いと思われる。そうすると、われわれの対象者の場合、おおよそ50歳というのが1つの節目になっている。ただし、繰り返し述べているように、C-I男性はこれが50歳台半ばに位置する。

子どもがすべて卒業するのは、C-I男性が約60歳、そのほかのグループが50歳台前半であり、既婚子との同居経験のある人は、おおよそ同じ時期に同居を開始している。子どもの結婚が終了するのは、それからかなり後になり、いずれのグループも60歳台半ば以降である。C-II男性では、経験者は半数に満たない。

職業からの引退もこれとほぼ同様の数値を示している。ここでもC-II男性の半数以上は現在も仕事をもっている。

こうした高年期への移行を特徴づける出来事の経験をみてくると、おおよそ50歳以降、家族経歴において次々と子どもの巣立ちが生じて来、これが70歳台半ばまで続く。とくに60歳台は、子どもの結婚や孫の誕生であれこれと行事が重なり、忙しい時期だとも言えよう。

以上、人生の出来事経験の継起を、成人期、中年期、高年期の3つの時期への移行に着目してみてきた。本書では、まだ中央値のみを用いた観察であるので、個人ベースでどのような時機や順序で経験しているかはわからないが、おおよそのライフコースの展開については知ることができたと言えよう。その特徴の一つとして、C-Iの人びとの人生が、戦争期以降、その影響によって形づくられてきたことである。しかし、その痕跡は男性と女性では異なる。男性の場合、職業経歴と生殖家族経歴の展開過程の遅れが目立った。一方、女性では、戦争による夫との死別の有無が、その後の生殖家族経歴の展開を分けた。今回は十分調べられていないが、職業経歴への影響もおそらく少なからぬものがあるだろう。そこで、次節では、これまでに観察してきたわれわれの対象者のライフコースの出来事経験を、歴史時間の流れに位置づけて考察してみたい。

4. 2. ライフコースの出来事タイミングと時代背景

本研究の対象者のライフコースには、かれらが生きてきた時代の影響の痕跡が大きく認められた。とくに、沖縄戦を含む戦争の影響は絶大であり、これが2つの出生コーホートに属する沖縄の人びとのライフコースの展開を特異なものにしているといえる。そこで、ここでは、そういったライフコースへの時代の影響を、とくに戦争にウエイトをおきながら一括して提示しておきたい。ほんらいならば、戦争のみならず、歴史的な背景を広範に視野に入れつつ、対象者のライフコースの全体像を総括するべきところであるが、ここではとくに沖縄戦による家族との死別に焦点を合わせた考察を行っておきたい。

まず対象者が生きてきた時代背景全体を見渡しておく意味で、これまでにあつかってきた出来事の平均的な経験時機（年齢の中央値）から代表的パターンをコーホート別・男女別に構成し、それを歴史年表のなかに位置づけておこう。図4-1および図4-2中、網かけがほどこされた斜めの帯は、調査対象者のライフコースが、年齢を重ねつつ歴史時間のなかを通過してきたようすを、男女別・コーホート別に表している。それぞれの帯の上に記された横線は、本報告書でとりあげたライフコース上の出来事の経験年齢の中央値の位置を表している。年齢の尺度は図の右端の縦軸に示されている。また、この横線の位置から下に垂線をおろせば、その出来事が経験されたおおよその歴史的年代がわかるようになっている。

大正3～7年に生まれたC-Iは、ほとんどの人が義務教育を終えて、元号が昭和に変わったころに職業経歴を開始したが、その大多数は実家での農業に従事した。そのため、初離家は、男性のばあいは兵役、女性は結婚をむかえる20歳前後で経験された。それ以外に

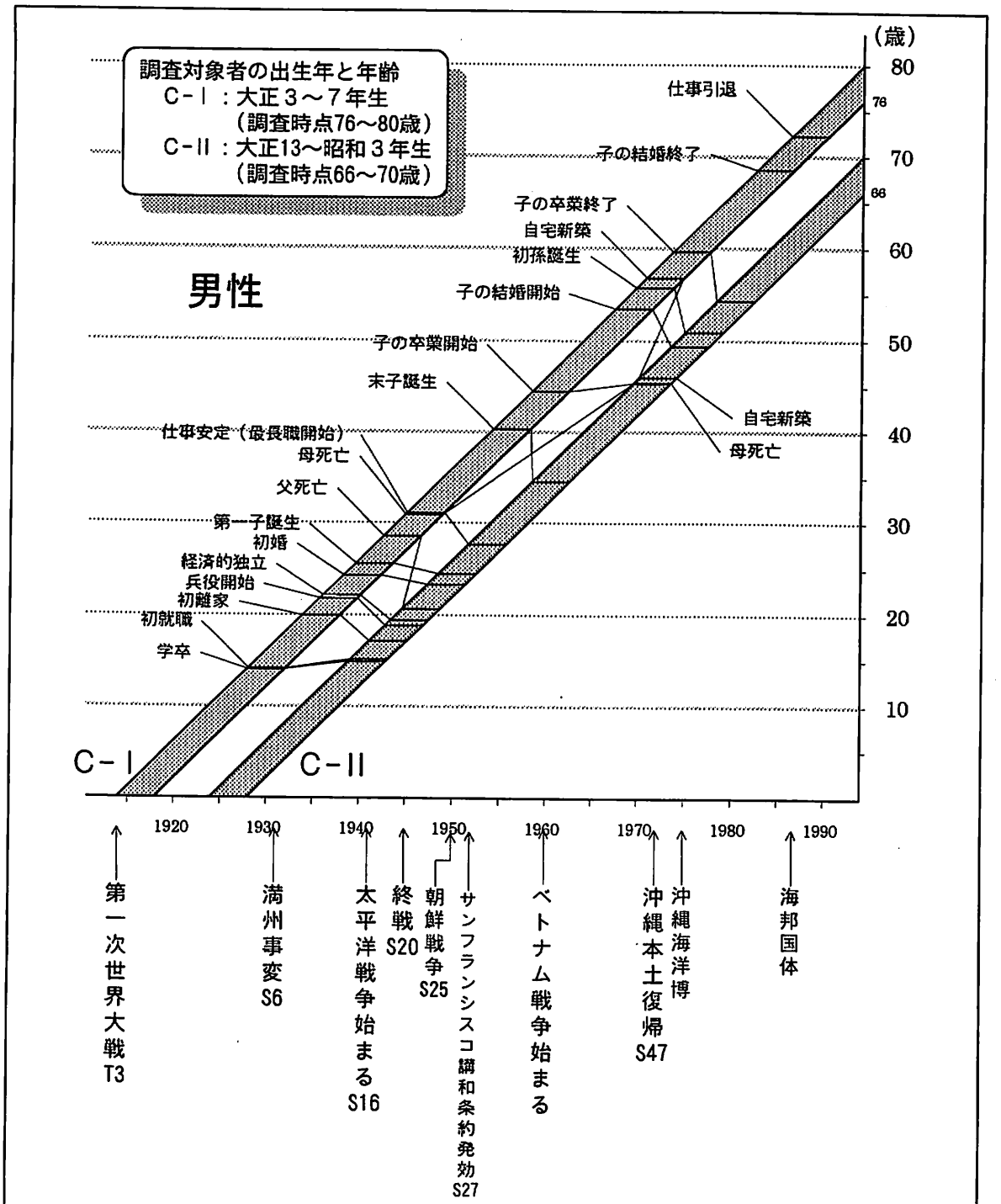

図4-1　男性のライフコースと時代背景

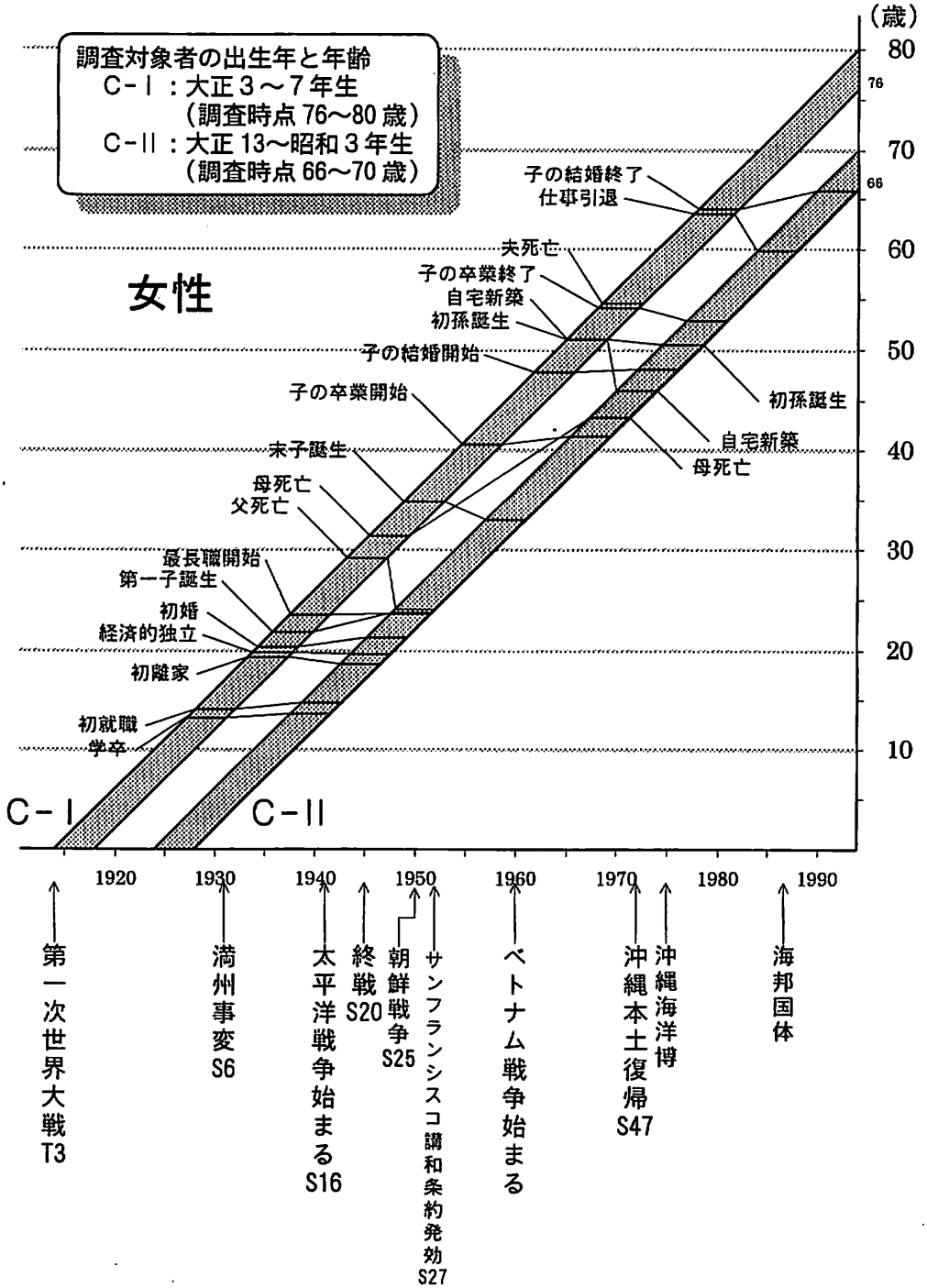

図4-2　女性のライフコースと時代背景

も、軍需産業の興隆とともに、本土（多くは関西）に働きに行った人もいた。そして、男性も女性も、日中戦争が起こり、第二次世界大戦の勃発の危機がせまるなかで、結婚し、子づくりを始めた。男性は、たび重なる召集の合間に妻をめとり、また女性は、乳飲み児を抱きかかえながら、夫の出征を見送ったのである。そして、それが夫との最後の別れとなった女性も少なくなかった。一方、男性は、親きょうだいや、妻子を残して、出征しなければならなかった。われわれの男性対象者は、そのなかでも運よく生きて帰ってきた人びとなのであり、大半は異国の地で死んだのである。しかし、どうにか帰っては来たものの、故郷は戦場と化し、一家全員が沖縄戦で亡くなっていたという人もいた。これに対して、夫が出征していた女性のほうは、幼い子どもを連れて、砲弾の飛び交うなかを逃げ回り、そのなかで、一緒に逃げていた舅や姑を亡くした人もいたのである。ところで、C-Ⅰの男性のなかには、いわゆる15年戦争のあいだ、戦地を転々としていたため、戦後に復員した後に結婚した人もいた。かれらは、同じコーホート仲間よりも遅く、自分の家族（生殖家族）をもったのである。

このコーホートは、職業経歴の面で遅れを経験していた。さきに述べたように、職業生活は昭和の初めにすでに始まっていたにもかかわらず、仕事の安定（最長職の開始）は戦後にまでもちこされたのであった。このことは、とりわけ男性に顕著であった。もっとも、かれらの仕事の内容は、大半が農業であったので、１つの仕事に落ち着くかどうかといったことをとりたてて問題にすることもないかもしれない。このコーホートの人びとに、後述するC-Ⅱとの比べて農業者が多い理由の一つとして、戦後の米軍占領下における、第2次および第3次産業の労働市場に参入し、そこで継続的に働くには、年齢が高すぎたということがあるのかもしれない。

C-Ⅰの人びとにとって、戦後になって家族生活をやり直したというのがふさわしいだろう。子どもはすでに戦前から生まれていたが、戦後かなりたってまで、とくに男性は1960年頃まで子どもをつくりつづけた。そして、子どもが成人して、結婚し、初孫が生まれたのは、1972（昭和47）年の沖縄の本土復帰のころであった。自宅の新築もこのころ行った人も多かった。

C-Ⅰよりも10年若い、大正13～昭和3年生まれのC-Ⅱが義務教育を終えたのは、第二次世界大戦が始まった前後である。このコーホートのなかでも出生年が若く、また小学校の高等科まで行った人のばあいは、卒業時にすでに太平洋戦争に入っていた。したがって、このコーホートの人びとは、学校卒業から初就職、初離家、経済的独立、初婚といった、成人期への移行をかたちづくる出来事を、戦争のまっただ中で経験した。多くの人は、小学校を終えて働き始めたが、その仕事の内容は、C-Ⅰとは異なり、農業よりも工場労働が多かった。なかには、本土の軍需工場に就職した人もいた。このため、初離家の経験年齢は、C-Ⅰよりも若かった。もっとも、農業が少ないのは、このコーホートには、義務教育を終えてさらに進学した人の数が、C-Ⅰよりも多いことにもよる。ともかく、やがて太平洋戦争末期になると、男性の多くは、兵役についた。C-Ⅱ男性のうちの6割に兵役経験があり、その任地はほとんどが国内であり、おそらくそのうちの大多数は沖縄戦への動員で

あった。ところで、われわれの対象者のなかでは少数ではあるけれども、このコーホートで中等教育レベル以上の学校に進学した人の戦争体験についてふれないわけにはいかない。かれらは、米軍の沖縄上陸前までは、飛行場建設や壕掘りなどに動員され、沖縄戦では、「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり学徒隊」などとして、正規軍と行動をともにし、その多くが死んでいったのである。われわれの対象者のなかにもこれらの経験者がいたが、かれらは、その数少ない生き残りといってよいだろう。

このように、戦争のなかで大人の仲間入りをしたC-IIは、戦後になって、結婚し、自分の家族をもった。職業経歴では、男女にかかわりなく、多くの人が米軍占領下での、基地関係の労働や、沖縄の復興事業に従事したと思われる。このため、大半が農家出身者ではあったが、農業に従事した人は少なかった。ただ、男性に比べると、女性は、婚家での農業に落ち着いた人が多かった。ともかく、そうした被雇用職で得た現金所得で潤ったおかげか、このコーホートは、自宅の新築を、C-Iと同じ年代、すなわち本土復帰のころに経験した。つまり、経験年齢からいえば、10歳ほど若くして、自分の家を建てた（あるいは、建てなおした）ことになる。

C-Iに比べて、このコーホートは、子どもの数が少ない。結果的に、末子の誕生年がC-Iとほぼ同じとなっている。この傾向は女性よりも男性に顕著である。ところが、子どもの学歴は、C-Iに比べて高い。その結果、子どもの学業終了は、C-Iよりも遅い年代で始まり（本土復帰のころ）、比較的短期間で終わった。一方、子どもの結婚は、C-Iよりも若い年齢で始まり、初孫の誕生も、50歳までに半数の人が経験していた。しかし、現時点では、すべての子どもが結婚した人は、まだ半数に満たない。子どもの産み終わりの年齢が前のコーホートよりも若いことを考慮に入れると、そこには子どもたち自身の晩婚化あるいは非婚化がうかがわれる。

以上、われわれの対象者のライフコースの平均的な特徴を、かれらが生きてきた時代背景と照らし合わせながら述べてきたが、そうした時代背景のなかでも、とりわけ戦争がいかにかれらのライフコースを特異なものにしたかをうかがい知ることができた。そこで、つぎに、そうした戦争の影響のなかでも、とくに、家族との死別体験についてふれておきたい。というのも、家族員との死別という、家族経歴上の出来事に、戦争の痕跡がもっとも如実に認められたからである。

表4-2は、戦争による家族員との死別経験を、死別した相手別に、その経験内容をまとめたものである。まず、親については、なんらかのかたちで親を沖縄戦で亡くした人が多かったが、その経験内容は、コーホートによっていくぶん異なっていた。C-Iは、父親は大半が沖縄戦以前に亡くなっていたが、沖縄戦のときまでに生存していた父親の多くを、このときに亡くした。一方、母親は大半が沖縄戦のときまで生存しており、このときに母親を亡くした人が多かった。このように、父母の寿命の違いが、沖縄戦とあいまって、親の死亡の経験時機に違いをもたらしていた。C-IIは、両親とも大半が戦後まで生存したが、しかし、沖縄戦で親を亡くした人は、本人がまだ10歳代後半と、C-Iに比べて年齢が若かった。その意味で、親を亡くしたことの痛手は、よりいっそう大きかったことだろう。

そして、どちらのコーホートも、昭和20年に、両親を同時になくした人が1〜2割はいた。

祖父母の死亡については、半数以上が、自分の生まれる前に亡くなったか、あるいは、自分が生まれた後に亡くなっていても、いつ亡くなったかを知らない。すなわち、認知度が低い。しかし、それ以外のケースでは、戦争で祖父母を亡くした人も少なくなかった。ところで、対象者のなかには、戦前、祖父母にあずけられて、親が海外に出稼ぎに行ったケースが1〜2割、とりわけC-IIの男性では4分の1あったが、このなかには、親はそのまま出稼ぎ先で死亡あるいは行方不明になり、事実上の保護者であった祖父母を沖縄戦で亡くした人も、正確な人数はまだ算出していないが、含まれている。その意味でも、戦争による祖父母の死亡は、よりいっそう危機的な出来事であったと思われる。

表4-2　戦争による家族との死別経験

死別者	経験の内容
父親	C-I：父親の半数は、戦争が激しくなる前に死亡していたが、残りの多くは、沖縄戦に巻き込まれて死亡。このため、父親死亡の経験年齢のばらつきは小さい。 C-II：少なくとも4分の1が、沖縄戦で父親を亡くす（10歳代後半）。
母親	C-I：半数は、終戦までに母親を亡くしているが、そのうちの半数は、沖縄戦で亡くなったと思われる。経験年齢が集中。 C-II：経験時機が早いほうから4分の1は戦争で亡くなったが、大半は戦後まで生き延びた。しかし、戦争で母親を亡くした人の経験年齢は、父親の場合と同様、若かった。
祖父母	C-Iの祖父の大半は戦争が激しくなる前に死亡していたが、このコーホートの祖母、およびC-IIの祖父母の多くは、戦争末期あるいは終戦直後に亡くなった。結果的に、祖父母を亡くした年齢は、C-IIがC-Iよりも若かった。
きょうだい	どちらのコーホートも、少なくとも4分の1以上は、戦争できょうだいを亡くす。コーホート間の違いとしては、C-Iよりも10歳若いC-IIは、それだけ初めてきょうだいを亡くした年齢が若かった
配偶者	C-I女性の4人に1人は、戦争が原因で夫と死別
子ども	C-Iの少なくとも半数は、沖縄戦から終戦直後にかけて子どもを亡くした。

きょうだいの死亡については、今回の調査では、調査デザイン上の事情で、初めて経験した時機のみに限定せざるをえなかったが、どちらのコーホートも、戦争できょうだいを亡くした人は、その初めての経験だけをみても、少なくとも4分の1以上はいた。そのせ

いか、男性では、対象者本人があととり予定者ではなかったが、結果的に兄が亡くなったために、自分があとをとったケースが、C-IIよりもC-Iに多かった。

つぎに、配偶者との死別であるが、それを述べる前に、結婚の時機についてふれておくと、今回われわれが調査対象とした出生コーホートの人びとは、戦争によって結婚の時機が大きく狂わされた人は、戦後に結婚したC-I男性の4分の1をのぞいて、それほど多くなかった。C-I男性の半数、同じく女性の4分の3以上は、戦争が始まる前にすでに結婚していた。また、C-IIは戦後になって適齢期を迎えたからである。

ところが、戦争が激しくなる前に結婚したC-Iの人びとは、戦争の激化によって結婚生活がなんらかのかたちで中断あるいは終了させられてしまう。まず、結婚後に夫と1年以上別々に暮らした女性は、このコーホートでは半数にのぼった。さらに、このコーホートの女性の4人に1人は、戦争が原因で夫と死別したのである。もちろん、男性のなかにも、妻を沖縄戦で亡くした人もいた。そうして戦争で配偶者を亡くした後、戦後に再婚した人は、女性は男性に比べてはるかに少なかった。

C-Iには、配偶者のみならず、沖縄戦から終戦直後にかけて、子どもを亡くした人も多かった。その比率は、すくなくとも半数は超えていた。

このように、われわれの調査対象者の多くは、親、きょうだい、祖父母、そして結婚していた人は、配偶者、子どもといった、だれかしら近親者を戦争で亡くしていた。とりわけ、C-Iの女性にいたっては、8割近い人がこれに該当していた。読者諸氏にとって、こうした死別経験の数値は、あるいは予想していたよりも控えめかもしれないが、しかし、われわれの対象者はあくまでも、こうした戦争の壊滅的な状況をどうにかくぐり抜けて生き残った人びとなのであって、生存していれば対象者になるべきであったこれらのコーホート経験の大部分は、もはや数字に表れてくるすべもないものなのである。

以上、単純集計結果の分析からも、対象者のライフコースの展開のしかたに、いくつかのパターンが存在することが示唆されたが、今後はさらに分析を進めて、そうしたパターンを析出していくとともに、それらをかたちづくった種々の要因について考察する必要がある。また、家族員との死別経験を始めとする戦争の痕跡が、後のライフコースの展開にどのように作用したかが、今後解明されなければならないだろう。

5 生活史資料からみたライフコース経験—戦争の影響を中心に

この章では、前章の量的な分析から明らかになったライフコース経験の詳細を、第二次調査で得られた生活史資料で肉付けしてみよう。ただし、本研究の現段階では、まだ分析の途上であるので、ここでは、主として戦争によるライフコースの変形に焦点を当てて、いくつか代表的な事例を紹介するにとどめたい。

すでにみたように、C-Ⅰの人びとの学校（尋常小学校）修了～仕事の開始の状況は、多かれ少なかれ類似している。自分の家ないし奉公先で農業をやった人が多かった。ここでは、男性の事例をいくつかあげよう。

> 農家に５人きょうだいの３男として生まれた。尋常小学校を卒業後、大正１３年に兵役で入隊するまで、実家で農業をした。O.S(11543)

> 昭和２年に尋常小学校を卒業。当時は学校が嫌いで、キビづくりに興味もあったので進学希望はなかった。卒業後はキビづくりを手伝い始めた。N.H(11550)

> 父親の借金の返済のため農家に奉公した。父親に行けと言われ、なかば強制的に奉公を始めたのだが、父の決めた奉公先で３年程働いてようやく親の借金を返し、他の条件のいい農家を探し奉公した。A.N(11508)

なかには、戦前の沖縄の特徴のひとつである海外移住をした人もいる。さきほどのA.N(11508)さんの事例はその典型であろう。

> 合計で８年間農家に奉公し続けていたが、「このままの状況ではだめだ」といつも考えていた。父親自身も小作人であるため土地がなく、このままでは自分もジリ貧におちいるだけだからである。農家に奉公していた８年間である程度まとまったお金がたまり、．．．（昭和 12 年、）農協に預けてあった 200 円と借金して作った 100 円とで、フィリピンのミンダナオ島へ自由移民として渡った。A.N(11508)

C-Ⅰの人びとは、日中戦争が始まり、太平洋戦勃発の危機がせまるなかで、結婚し、子づくりを始めた。そして、男性で兵役経験者は、だいたい結婚後、妻子を残して入隊している。また、このコーホートの出生年代からして、最初の兵役の多くは日中戦争への出征である。結婚の翌年、妻と生まれたばかりの長女を残して、北支に出征した O.S さんのケースをあげよう。

> 昭和 12 年（19 歳）に結婚し、翌 13 年、長女が出生。同年 12 月入隊のために、家族を残して家を離れた。長崎で入隊し、翌年で５月に北支に行く。17 年の７月か８月に満期除隊した。中国での兵隊生活は、話にならないくらいつらかった。作

琉球大学附属図書館

戦中は、絶対洗濯もできないので、シラミが湧いて大変だった。自分がいたところは、山の上で、水のないところだったので、泥水とクレオソート丸（今の正露丸）を飲んでしのぐしかなく、腹をこわして死んだ兵隊もいた。戦闘もあって、90名で出征した部隊のうち、生きて帰ってきたのが36名しかいなかった。自分は幸いなことに無傷だった。だから、つくづく自分は幸運児だと思う。軍隊では、毎日、何十キロと背負って歩く。そして、いつも戦闘は、せっぱ詰まって、疲れてからある。その点、自分は行軍に強かった。自分は学歴はないけど、働くだけは人一倍働いた。O.S(11543)

太平洋戦争が始まり、戦時色が濃くなると、徴用などにも駆り出される。

太平洋戦争が激しくなると自分も徴用に取られ、陸軍の軍作業にかり出された。昭和18年のことである。日本軍の飛行場建設であった。徴用での軍作業はとてもつらく、二カ月で音をあげた。そこで軍属になれば軍作業から解放されるだろうと考え、海軍に入隊した。．．．海軍での仕事は非常に楽だった。しかし収入は少なく、食べるものにも事欠く有様となり、妻が農業（米作）をすることでなんとか生活することができた。A.N(11508)

昭和17年（26歳）に設営隊として海南島にむかった。同19年まで海南島に駐屯した。その後、部落に戻っては来たが、すぐ読谷の飛行場建設に徴用された。飛行場では主に滑走路の修復作業をしていたが、手作業かつ人手不足で作業が全然はかどらなかった。N.H(11550)

このコーホートの人たちの戦争による影響の最たるものは、家族生活の離散とその後の再会であった。

戦争の敗色が濃厚になってくると、軍の仕事どころではなくなり、フィリピン各地を逃げ回った。このとき自分は海軍といっしょに逃げたため、妻子とはぐれてしまった。終戦後、移住先のフィリピンから強制的に引き揚げさせられた後、福岡の捕虜収容所に入れられた。そこで妻と息子に再会した。妻と子は始め広島に引き揚げていて、そこから自分と同じ福岡の収容所に移されたのだという。このとき、フィリピンで生まれた娘（長女）が戦争で逃げ回っているうちに亡くなっていたことを知らされた。さらに妻は引き揚げ中に知り合った男性と恋仲になっており、自分とは分かれたいとのことだった。ショックではあったが、そうなってしまったことは仕方がないと割り切って考え、離婚届に判を押した。収容所を出て、息子をつれて沖縄に戻ったのは昭和21年のことである。．．．昭和22年に現在の妻と結婚した。その当時、前妻の子がいたこともあって、気持ちの優しい女性を探していた。親戚からの紹介があって、その女性なら大丈夫だと思った。A.N(11508)

昭和20年、米軍が上陸したのを聞いて、（沖縄本島北部の）国頭村に避難をすることにした。国頭にいるあいだは、昼間は米兵に見つからないように隠れ、夜になってから出歩いて米や芋をわけてもらうという生活をしていた。戦争が終わり、昭和22年になって別々になっていた家族と再開することができた。が、しかし19年には長男である兄がマーシャル諸島で死亡し、20年の沖縄戦で四男の弟を亡くした。N.H(11550)

長兄は、体が弱くて農業ができない人だったので、独立して雑貨店をやった。だから、兵役から帰ってきてから、自分が実家の農業を任された。長兄はひねくれ者で、「おうちはあんたのもんだよ」と言って逃げていた。一年間家にいたけれど、まったくおもしろくなかった。それで、大阪に出稼ぎに出ることにした。

昭和１８年（２５歳）、自分で直接、大阪の軍需工場に行き、働くことを願い出たところ、すぐ採用された。当時そこは徴用でも人が足りないので、軍人上がりは優先的に採用された。自分が満期した昭和１７年当時は、戦況がひどくなっていたから、すぐまた召集が来ると思った。自分の先輩たちはみんな、満期してからふたたび召集されていたから。この会社を選んだのは、召集を避けるためでもあった。おそらく沖縄にいたら、（また招集されて）助からなかっただろう。その点で、自分は恵まれていたと思う。

はじめは、大阪で落ち着いたら妻子を呼び寄せるつもりで、いろいろな所帯道具を買いそろえて準備していた。ところが、だんだん戦争がひどくなって呼び寄せるには状況が難しくなっていった。そして、ついに大阪の空襲で工場が全部やられてしまい、仕事がなくなってしまった。

自分が大阪にいる間、妻と２人の子どもと一緒に、両親（舅姑）と暮らしていた。戦争が終わるまで、妻はとても苦労したらしい。昭和１９年に父親が亡くなった後、米軍の沖縄上陸後は、妻は姑と子どもたちを連れて国頭（くにがみ：沖縄本島北部）に疎開した。　昭和20年（27歳）の７月頃、自分も熊本に疎開し、農業の手伝いをした。天皇陛下のラジオ放送はそこで聞いて、終戦を迎えた。翌21年（28歳）、沖縄に引き揚げ船が出るというので、それに乗って、ようやく沖縄に帰ってきて、妻子と再会した。O.S(11543)

つぎに、C-Ｉの女性の経験をみていこう。戦争が始まる前に結婚し、子どもをもうけていたのは、男性と同様である。

昭和11年に結婚。嫁ぎ先で家事をしながらさとうきび、芋、野菜作りを手伝った。昭和11年に長男が生まれ、昭和13年に次男、16年に三男、そして19年に長女が生まれた。家事の忙しさに追われ、子育てまで手がまわらなかったので義父に見てもらった。夫はのんびり屋な性格であるのに対して、自分はせっかちな性格で、

夫との相性は良く、1度も喧嘩したことがなかった。A.F(21013)

18歳で結婚した。夫は小学校の同級生で、お互い良く知った仲だったが、結婚は親同士が話し合って決めた。当時箪笥は金持ちの家にしかなく、自分は行李のようなものに着物を詰め、普段着に糊をつけて嫁入衣装にした。結婚後は義父と義母、嫁ぎ先から実家に戻っていた義姉とその娘・息子、そして自分夫婦の共同生活であった。夫はおとなしい、優しい人であった。だから一切喧嘩はしなかった。ただ、結婚してすぐに夫は兵役で家を空け、あんまり長いつきあいではなかった。夫は子どもを作るときだけしかいなかった。夫婦らしく暮らしたのは、除隊後のわずか3年だった。O.M(21019)

昭和10年に結婚。夫の家とは隣りどうしであり、お互い顔は知っていたが、話したことも遊んだこともなかった。だから結婚は親どうしが認めて決まった。式は、ゆかたを着て友達を呼んで挙げた。最初、夫の両親と一緒に同居し、毎日農業の生活だった。昭和13年に長女が生まれた。K.A(21051)

不安な時代状況のなかで、かのじょたちは夫の出征を見送った。

昭和20年、戦争が激しくなるにつれて、夫への白札召集も多くなり、ついには赤札で召集され、夫はそのまま行方不明になってしまった。自分は役所の人に説得されて次男、三男、長女を連れて（本島北部の）国頭村に疎開することにした。7歳以下 60 歳以上という制限があったので9歳の長男を連れていくことはできなかった。また、義父母は疎開を拒み村に残ったが、手榴弾を投げ込まれて即死した。長男も亡くなった。父母は疎開先で栄養失調で亡くなった。生まれたばかりの長女は病死してしまい、次男、三男を連れ、生きることのみ考えていた。が、自分もマラリアにかかってしまい、髪が抜けたり、40度以上の高熱にうなされた。昭和21年に収容所に移されたが、マラリアも治っておらず、生活環境もひどかった。マラリアは2、3カ月で治りはしたものの、暗算力と記憶力が悪くなった。家に戻ってきたのは、昭和22年になってからだった。昭和20年の沖縄戦で夫を失ってからは、女手一人で那覇の市場に出かけて生計を立てた。A.F(21013)

長女が生まれてすぐに夫は支那事変で出征した。24歳になった時、夫が除隊になり、これから約3年の間、騒がしい世相ではあったが、夫婦らしい生活を送る。25歳で長男を産み、このときは夫が名前をつけた。27歳の時には次男を出産した。しかし、次男を妊娠して7ヶ月目に夫はふたたび招集され、二度と戻らなかった。夫は沖縄本島中部で中隊長をしていたらしい。夫と一緒だったという別の部落の人の話では、二人で逃げようと話を持ちかけたが、兵役で軍隊生活を経験していた夫は逃げてはいけないと言って、それっきりになったということだった。夫が

見ることのなかった次男とも、沖縄戦で別れ別れになってしまった。二人ともおそらく生きてはいない。夫が兵役で出征してからは、男に混じってユイマール（共同作業）に参加してあちこちの農作業を手伝い、働いた。O.M(21019)

昭和17年に夫がソロモンにて戦死した。が、この時はその知らせを聞くことはなく、知り得たのは死亡から4年たってのことであった。昭和20年、沖縄戦で、実父、父方祖父、きょうだい（次男、三男、三女）が死亡した。G.H(21060)

沖縄が戦場になってからは、かのじょたちは、幼い子どもを連れて、砲弾・銃弾のなかを逃げ回り、その途中で子どもを亡くした。

那覇が大空襲があった時、家の裏の丘から那覇市内が焼ける様を見ていた。この時次男を身ごもって妊娠9カ月目だった。このままでは家も何もかも焼かれると思い、墓を開けて避難場所にしてそこで出産しようと思っていたが、その後しばらく空襲がなかったので、翌11月に家で次男を産んだ。出産後1ヶ月もたつとまた空襲が激しくなり、あらかじめ掘ってあった防空壕へ避難した。昭和20年4月に沖縄戦が始まった。防空壕を日本軍に取り上げられたので、一家は島尻（＝沖縄本島南部）の喜屋武・真壁（現在の糸満市）あたりまで逃げた。逃げる際、長男と義姉の子を連れ、長女は次男をおんぶしていた。しかし、当時9歳と、まだ幼かった長女にとって次男をおぶって逃げるのは大変なことだった。疲れてしまった長女は、一緒に逃げていた義姉に次男を預けた。それが次男との別れになった。O.M(21019)

一方、C-IIの人びとは、成人期への移行を戦争のまっただ中で経験したが、男性の場合は、ここに兵役や徴用経験がからんでいる。

昭和20年3月に海軍に入隊。整備兵になり機械の技術を学ぼうとした。千葉の方に行っていたが、終戦になったため沖縄に帰ることになった。しかし、沖縄はもう全滅状態であると聞き、鹿児島に1年くらいいて、結局沖縄には昭和22年に戻ってきた。A.Kさん（12022）

昭和19年に入隊し、鹿児島の飛行場に航空整備兵として配属される。沖縄戦が激化したときは、鹿児島からも戦闘機を応援に出した。が、当時の状況では燃料が足りなくて、出撃した戦闘機は沖縄につく前に墜落したと聞いている。また、鹿児島の飛行場にもアメリカの戦闘機がやってきて、空襲を受けたこともあった。自分は幸いにも助かったが、やられた人もたくさんいた。飛行場にたくさんの死体がならんでいた光景は今でもはっきりと覚えている。A.G(12048)

19歳（昭和18年）に徴用となった。長崎県の佐世保にある造船所で、軍艦の原図

を書かされた。船の原図は大きかったし、難しかった。佐世保の冬はとても寒く、造船所はとても広いし、仕事はきつくて食事も少なかったので、始終凍えていて、よくボイラー室へ逃げ込んでいた。このころは食べることばかり考えていた。

昭和19年の9月に徴兵となり、兵役検査があった。ちょうどそのころ、そけいヘルニアという病気になっていたため、兵役検査では丙種となった。病気が治ってから出征となって、長崎の海軍病院で手術をしたのだが、化膿して病状が悪化してしまい、宮崎の病院で入院することになった。その間に本当の自分の部隊は出発しており、別の部隊に配属された。軍事訓練を受けて初めての検閲はとてもきつかった。一晩中歩かされた。訓練を終えると、門司港から釜山行きの船に乗ったのだが、それがまたひどかった。畳二畳ぐらいの広さに10人も詰めて座らなければならなかった。小便をするのも大変だった。部隊は、釜山から中国へ移動したのだが、南京で発熱して入院したため、またもや部隊を離れることになった。そのため、南方へは行かなくて済んだ。退院すると今度は上海旅団に配属された。上海旅団では炊事班で、料理の講習を受けて旅団長の食事を作っていた。おかげで食料には困らずおいしいものを食べられた。それから旅団は満州へ向かったのだが、その途中、南京にいるときに終戦となった。その時は日本が負けたとは信じられなくて、軍旗が焼かれるのを見て実感した。南京から上海に集結して昭和22年の3月に博多港へ帰ってきた。それからは鹿児島の戦友の所や、義妹のいる佐賀県で暮らし、沖縄に帰ってきたのは昭和26年になってからだった。N.K(12050)

昭和18年、徴用で長崎へ行く。長崎では軍の工場で働くことになるが、そこでの生活は朝早くから夜遅くまで働くという、厳しい環境だった。また、そこでの給金は銭湯代と散髪代と少々の小遣いを残しては、他はすべて沖縄の実家へ送っていた。そういうことをするのが当たり前とされていた時代だった。以降、終戦まで長崎で働いていたのだが、原子爆弾により被爆者となってしまう。昭和21年に兄である長男が沖縄にて死亡。自分は当時まだ長崎にいたために兄の詳しい死亡理由を知らなかった。T.S(12060)

昭和14年に尋常小学校を卒業し、同年、12歳で大阪の化学工場に就職。当時は戦争中であったために、自分の希望などは言ってられなかった。H.J (12079)

17歳の時（昭和20年）に防衛隊に配属された。まだ17歳だったので防衛隊という身分ではあったが、事実上の徴兵だった。一間ぐらいの長さの竹槍を持たされたが、本当にこんなもので勝てるのだろうかと思った。防衛隊では船舶特攻隊に配属されて与那原の兵舎へ行った。そこでは毎日日没後、特攻船を芋の葉などで隠す作業をしていた。特攻船に乗り込むのは海沿いに住んでいる人など海に慣れている人たちだったので、自分は乗らずにすんだ。A.S(12138)

その後米軍の進攻とともに部隊は南に移動していき、その移動中に迫撃砲の攻撃にあって自分の部隊はちりぢりになった。当時は死ぬのならばひと思いに死にたいと思った。部隊の仲間と二人で農家の馬小屋に身を隠して数日を過ごしていたのだが、飢えてきたので昼間食料を探しに行って帰ってくるとその馬小屋は爆破された後だった。いつも昼間は身を潜めていて行動しないようにしていたのだが、たまたまその日だけは馬小屋を離れていて難を逃れられた。．．．アメリカ軍の前線基地に着いたとき、ひどく飢えていて、朝日に光っているアメリカ軍の缶詰を見て危険を承知で盗んで食べた。食べると今度はひどくのどが渇いてしまい、とうとう我慢できなくなって、小川へ降りていって水を飲み、側の木陰で休んでいる時に、背後の丘からアメリカ人がやってきた。見つかっているのはわかっていたし、逃げられそうにもなく、捕虜になった。捕虜となってからは、ハワイにつれて行かれてそこで働かされた。A.S(12138)

軍国少年がけががもとで軍人になれずに意気消沈したケースもある。

海軍に志願したが、本州にすぐ船で出かけては敵の軍隊にやられるということで、半年間（本島の北部の）ヤンバルへ避難してから行くことにした。ところが、その山道をはだしで歩き回ったのが原因で、足にできたかすり傷から菌がしのびこみ、菌炎にかかってしまう。足を数カ所切ってばい菌を出さなければならないほどだった。

その後、病気の回復を待って改めて海軍に志願し、大阪へ行って徴兵検査を受ける。しかし、病気を煩ったことが原因で試験に落ちてしまった。当時、老人・女子どもしか戦わないことを許されなかった時代において、この不合格は大変なショックであり、痛手であった。すっかり意気消沈してしまい、何をする気も起きなかったが、家族や部落の人に会わせる顔もなく、沖縄に帰ることもできなかったため、しばらく大阪に身を寄せ、農家の手伝い等をしていた。

昭和20年に大阪で再び徴兵検査を受け、やっとのことで合格、防衛隊として宮崎県に派遣される。その後すぐに終戦を迎える。その後すぐに沖縄に帰る気にもなれなくて、本土での永住も本気で考えたりしていた。姉が自分と同様に本土に疎開してきて、疎開先で知り合った男性と結婚していたので、その姉の所に身を寄せ、姉の家族と各地を点々とし、農地開墾を手伝う代わりに寝る場所や食料を提供してもらったりしていた。K.N(12505)

このコーホートのばあい、戦争の家族への影響は、C-Ⅰとは異なり、定位家族への打撃が中心だった。ここでは、女性のケースも含めて紹介しよう。

昭和19年（16歳）、空襲が激しくなってきたので祖母の保護者として本島北部へ疎開した。昭和20年（17歳）、米軍の捕虜となり真夏の中収容所のテント小屋で一週間くらい過ごしたが、その時に自分の母代わりであった祖母が亡くなった。

U.K(12101)

昭和14年（15歳）に高等小学校を卒業した。勉強が得意だったので進学希望はあったのだが、母親が病気だったため父親が反対した。農業の手伝いをしながら青年学校には通った。これはとても役にたった。機織りや養蚕、道徳、礼儀作法など色々なことを学んだ。しかし、この青年学校も母の病気に都合で2カ年の所を1カ年しか通えなかった。．．．昭和20年（21歳）、壕の穴を掘り土を固める作業をさせられた。沖縄戦で父親と妹、弟2人を亡くした。これで母親と2人きりになってしまった。Y.K(22003)

昭和3年に次女として生まれる。．．．昭和7年に父親は南洋のほうが暮らし向きがいいという話を聞いて、南洋へ移住する決心をする。4年後の昭和11年になってやっと父親から呼び寄せがあったので、残されていた家族3人そろってフィリピンへ渡った。．．．南洋での生活は本当に裕福だった。お金の心配などしたことはなかった。その頃の夢は産婆になることだった。そのために小学校を卒業した後は女学校へ行くことを考えていたし、試験を受ける準備をし、親も賛成してくれていた。

ところが戦争が始まりかけており、島にいた若い人はみんな飛行場を作るのに回された。進学どころの話ではなくなった。そのとき本島より仕事を求めてやってきていた男性と恋に落ち、その人の子どもを身籠もったため、昭和18年に結婚する。15歳の時のことである。同年長男を出産する。それと同時期、父親が防衛隊として本島へ行き、そこで戦死する。それに続くように生まれたばかりの長男が病気で亡くなった。H.Y(22106)

本節の始めにもことわったように、現段階では、生活史データはもとより、量的データとの関連づけもまだ未着手である。今後、これらの作業を行い、激動の昭和期沖縄を生きてきた人びとのライフコース過程と、その歴史的変化の様相を、全体社会の歴史的・社会的要因と関連づけて研究することが課題である。

6 まとめと今後の課題

本報告書を締めくくるにあたって、本研究で明らかになった知見を要約しておくとともに、今後の課題について述べておきたい。

本研究の対象者たちは、大正および昭和期に沖縄の農村に生まれ、戦争の状況下で成人期初期あるいは青年期後期をむかえ、戦後の長い米軍統治下で沖縄の復興とともに成人中期を過ごし、そして、沖縄の本土復帰以後急速に都市化が進む地域社会のなかで高齢期をむかえて現在に至っている。そうした人びとのライフコースの特徴を簡潔にまとめるならば、次のようになるだろう。

人びとのライフコースの初期の段階には、戦前の沖縄農村の社会構造や文化的規範の影響が色濃くみられた。具体的には、かれら／かのじょらのほとんどは、農家に生まれ、自身も初等教育を終えて家業である農業に従事した。女性は結婚するまで実家で農業をやり、婚家に嫁いで農業を続けた。男性のうち、あととり長男は結婚後親と同居した。職業は多くの人が農業であった。

しかし、その一方で、明治維新国家が昭和期に入って急速に軍事体制に基づいて国内外での統制を強めていった歴史的過程に、明治以後に琉球処分を経て日本の政治体制に組み入れられた沖縄の、われわれの対象者も否応なく巻き込まれていった。そもそも就学率がほぼ 100 パーセントというのもそれを表す大きな指標であるが、加えて、大正期に生まれて昭和の初めに青年期を迎えたC-Ⅰの男性の多くは、兵役への召集を受けて国外に出征した。やがて、戦争末期に沖縄が戦場となったとき、戦闘員でもない人たちも戦火にまかれて親や配偶者や子どもを失った。すでに詳しくみたように、われわれの対象者のライフコースへの戦争の影響は甚大であった。

戦後の復興期のなかで、われわれの対象者は、部分的には米軍統治下で新しい社会経済状況に適応しながら、またある部分は、沖縄の昔ながらの慣行を維持しながらライフコースを歩んできたようにみえる。年長のC-Ⅰの多くは農業にとどまったのに対し、若いほうのC-Ⅱの過半数が雇用職業に進出した。とくに、那覇の郊外で急速に都市化が進むなかで、農業者は昔ながらの生業を守ってきたと言える。しかし、そうした経済的な側面の変化にかかわらず、家族生活においては、結婚したあととり長男との同居慣行は崩していない。これは沖縄における家の統合が家業経営の側面よりもむしろ、長男による位牌の継承・祭祀に代表される民俗宗教的な契機にあることを反映していると言ってよいだろう。子ども世代の教育程度が中等教育にシフトし、おそらく農業を継いでいる子どもたちが少ないと思われるなかで、このことは特筆に値するだろう。

本研究の今後の展開としては、前章の終わりにも述べたが、今後の本調査の対象者の多くが成人期への移行のあたりで経験した戦争によるさまざまな剥奪の、その後のライフコー

スの展開に及ぼした影響を解明する必要がある。また、本書で明らかになった、沖縄の人びとのライフコースの特徴を東京および福島のそれと比較考察するという、本研究の当初の課題に着手したい。その作業のなかには、今回の２次にわたる統計的調査に引き続いて行った、詳細な生活史インタビュー調査の分析も含まれる。さらには、将来的には、条件さえ整えば、今回の調査で標本に含めることができなかった、若いコーホートの人びとに対してもあらたに調査を実施したいと考えている。ところで、本調査研究は、一応確率標本の抽出手続きに従ってはいるが、統計的な有意性を確保できるだけの標本規模とは言えない。その意味では、これは１つの事例調査でもあり、またパイロットスタディでもある。従って、筆者としては、そう遠くない将来に、十分な標本規模を確保しての調査が行われることを願う次第である。

最後になったが、本研究のきっかけを与えて下さり、また実際の研究過程においてもいろいろと便宜を図ってくださった、早稲田大学人間総合研究センターの「社会変動と人間発達」研究プロジェクトの代表者である正岡寛司早大教授ならびに同プロジェクトの研究メンバーに対し、この場をかりて謝意を表したい。また、本研究の学術上ならびに教育上の趣旨を理解くださり、対象者の選定にあたって全面的にご協力をいただいた、豊見城村、西原町、南風原町の３町村に対して、深く感謝している。そして、なによりもまして、お忙しいなか調査に快く応じてくださった対象者のみなさまのご協力に対して、心よりお礼申し上げる次第である。

平成12年３月

琉球大学助教授
安 藤 由 美

＜巻末資料1＞

面接調査ガイド

Ⅰ　定位家族

1　定位家族員の異動

(1)　家族員（親、兄弟、祖父母）の異動の経緯（世帯構成の変化を含む）について

①　いつ、誰が、事由

②　あととり予定者（長男）があとを継がなかった理由（その場合のあととりの決定者、争いの有無）

2　家族員との関係

(1)　独立あるいは最終的離家以前の定位家族員との関係

	親	きょうだい	祖父母
①自分に接する態度・しつけ（厳しい、優しい、自分への理解） ②親密度・信頼度 ③影響（性格・慣習・信条など）			

3　成人期への移行出来事の経験

(1)　離家について

①　初離家から最終的離家までの過程

②　家族との関係の変化

③　離家後の生活の変化

④　問題の有無と対処

(2)　進学、就職について

①　進学、就職の経緯

②　希望（本人、親）

③　親との話し合いの有無

④　問題の有無と対処

⑤　親との接しかたの変化

(3)　親からの経済的独立について

①　いつ、きっかけ、経緯

②　親子間の援助の有無と程度　（いつ、どんなとき）

③　それにたいする自分の感想、評価

4　援助について（経済的援助および非経済援助）

(1)　定位家族員からの援助の経験

①　誰から、どのようなとき、どの程度、期間

②　内容（経済的援助、生活面での援助）

③　（援助がない期間があった場合）いつ、理由、期間

(2)　定位家族員への援助の経験

①　誰に、どのようなとき、どの程度、期間、きっかけ

②　内容（経済的援助・生活面での援助）

5　本人結婚後の定位家族員との同居（親以外の定位家族員、配偶者の親を含む）について

(1)　同居した期間

①　誰と、いつ、期間、きっかけ

②　影響（家族・親族との関係の変化）と、それに対する自分の感想

③　世帯移譲（家長役割の移譲・主婦役割の移譲）いつ、きっかけ、それに対する自分の感想・評価

④　（同居解消がある場合　＊死亡も含む）時期、きっかけ、理由、それに対する自分の感想・評価（その時点・現在）

(2)　同居していない期間

①　接触の度合い（会う頻度、電話、手紙など）

6　定位家族員の世話・介護について

(1)　定位家族員の世話・介護をした経験

①　誰が、いつ、期間、きっかけ

②　役割分担（家族および親族間）

③　影響（費用の負担、精神的影響、トラブルの有無）

④　それに対する自分の感想・評価（その時点・現在）

II　生殖家族

1　結婚

(1)　配偶者選択

①　結婚までの過程

（きっかけ，時機，紹介の有無、親・親族の助言・反対の有無）

②　配偶者を亡くした人の場合

（再婚した人の場合）

再婚までのいきさつ（相手との出会い、親・親族の援助・介入）

（再婚しなかった人の場合）

・何故再婚しなかったのか

(2)　結婚

①　新婚生活の開始

時期・いきさつ・住居

②　結婚儀礼

披露宴・式の形式・場所

③　新婚当初の家族構成・生活態度

④　結婚後の親・その他の定位家族員との関係の変化

⑤　結婚観

・結婚時期についての感想（早い・遅い・適齢）

・結婚前後における意識変化

⑥　配偶者との離死別

・経緯／影響／感想

2　夫婦関係

(1)　性格・人柄の共通点・相違点、相性

(2)　以下のことに大きな変化を生じさせる出来事はあったか

①　配偶者に対する印象

②　夫婦間の勢力関係

③　コミュニケーションの度合い
④　接し方
⑤　信頼度
⑥　相互理解
　立場・性格・評価
⑦　配偶者に対する尊敬・愛情・精神的依存

3　親なり（養子・継子を含む）
(1)　事実の確認
　人数・性別・間隔・出生時期・順番とそれに関する感想
(2)　名付け親
　その人との間柄
(3)　夫婦間・親族間の希望，期待，意見の相違
(4)　夫婦間の勢力関係の変化
　勢力関係・役割分担
(5)　こどもが生まれたことによる生活や人生観の変化
(6)　流産や死産経験の有無・影響
※再婚したことにより、継父や継母になったことのある人に対しては（1）、（3）、（4）についても聞く

4　生殖家族員の異動（配偶者の喪失・再婚等）
　家族員の異動の経緯（配偶者・子供・孫等世帯構成の変化を含む）
　いつ・誰が・事由

5　子供の独立・最終的離家以前のことの関係
(1)　しつけ・子育て
①　誰が・いつ・どんな子育てをしたか（放任・過保護）
②　しつけ・子育ての信条
③　反抗期における対処
④　しつけ・子育てに関する感想・評価
(2)　子との関係の評価
①　親密度・信頼度・理解度
②　影響（子⇔親）
　性格・習慣・信条
③　不満・要望
　（再婚・養子・連れ子だった場合，親子関係もみる）

6　子の成人期への移行出来事の経験
(1)　子の離家
①　離家の過程
　親子間・夫婦間での意見の相違の有無
②　家族との関係の変化
③　離家後の家族役割の変化
④　問題の有無・対処
⑤　それに対する自分の感想・評価
(2)　子の進学・就職
①　子の進学・就職の経緯
②　希望（子・親）

③　子との話し合いの有無
④　教育方針
　夫婦間の意見の相違
⑤　問題の有無・対処
⑥　子との接し方の変化

(3)　子の経済的独立
①　いつ・きっかけ・経緯
②　親子間での援助の有無と程度
　いつ・どんなとき
③　それに対する自分の感想・評価
④　子が経済的独立をしていない場合
　援助の程度・それに対する感想・評価

7　子の結婚

(1)　子の結婚の経緯
①　期待・要望・相談の有無
②　親子間・夫婦間での意見の相違
③　子の配偶者への印象の変化
④　問題の有無・対処・影響
⑤　それに対する自分の感想・評価

(2)　結婚後の子との関係の変化

8　既婚子との同居（以下配偶者を含む）
※子が未婚，あるいは配偶者と離死別している場合、子の独立後から以下準じて聞く

(1)　同居期間がある場合
①　どの子供夫婦と，いつ・期間・きっかけ
②　役割分担（収入源・家事分担）
③　影響（家族・親族との関係の変化）
④　それに関する自分の感想・評価
⑤　世帯移譲（家長役割の移譲・主婦役割の移譲・いつ・きっかけ・評価）
⑥　（同居解消がある場合）時期・きっかけ・理由・影響・それに対する感想・評価

(2)　同居期間がない場合
①　接触の度合い
②　今後の同居予定

9　既婚子との援助関係（以下配偶者も含む）

(1)　既婚子からの援助の経験
①　誰から・どのようなとき・どの程度・期間
②　内容（経済的援助・生活面での援助）
③　援助がない期間（いつ・理由）

(2)　既婚子への援助の経験
①　だれに・どのようなとき・どの程度・期間・きっかけ
②　内容（経済的援助・生活面での援助）
③　現在援助をしていない場合はその理由
　※援助の経験がない場合はその理由を聞く

10　既婚子との関係の変化（以下配偶者も含む）

(1)　印象に残る出来事

(2)　相互理解

立場・性格・評価

(3) 精神的依存の関係の方向の変化

いつ・きっかけ・それに対する自分の評価

(4) 意志決定（だれが大事な事柄を決定するかの変化）

いつ・きっかけ・それに対する自分の評価

(5) 尊敬度・親密度・信頼度

(6) 自分が受けた影響

(7) 不満・要望

11 世話・介護

(1) 生殖家族家族員の世話・介護のやりとり（したこと・されたこと）の経験

＊相手・方向も明らかにする

① 誰・いつ・期間・きっかけ

② 役割分担（家族及び親族間）

③ 影響（費用の負担・精神的影響・トラブル）

④ それに対する自分の評価

(2) やりとりをしたことのない人へ

① それに対する自分の感想・評価

② 将来、世話・介護のやりとりをする必要が生じた場合の準備・心構え

12 孫

(1) 初孫を持った時期・孫の人数（曾孫も含む）

(2) 印象に残る出来事

(3) 孫や曾孫をもったことによる影響

① 自己イメージの変化

② 生活パターンの変化

(4) 親密度・接触度

① 同居経験の有無

② 会う頻度

③ しつけへの関与

III 教育

(1) 義務教育終了以後の進学について

① 進学希望の有無とその事由

② 進学希望があったにもかかわらず断念した人に対して

その事由と感想

(2) 義務教育以上の教育を受けた人に対して

① 進学した事由

② 進学した事による自分の人生への影響（意識面・行動面）

(3) 学生時代の非日常的出来事（１．休学　２．中退　３．留年　４．浪人　５．転校　６．飛び級　７．疎開　８．勤労動員　９．応召よる繰り上げ卒業　１０．出征など）を経験した人に対して

① いつ経験したか

② その事を経験した事由

③ その事を経験した事による人生への影響（意識面・行動面）

Ⅳ　職業

1　職業経歴

(1)　これまでに就いた職業について（臨時就業・家業手伝い・副業も含む）

①　仕事の名称

②　仕事の内容（就業形態・職種が分かるように）

参考：就業形態・職種は次のように分類できるように聞く

就業形態

1．団体・会社役員　2．奉公・住み込み奉公

3．常雇・被雇用　4．臨時・日雇い・ﾊﾟｰﾄ

（自営業なら）

1．自営業主　2．家族従業員　3．内職

職種

1．専門的職業　2．管理的職業　3．事務　4．販売

5．運輸・通信　6．技能・生産工程　7．単純労働

8．保安職業　9．ｻｰﾋﾞｽ業　10．職業軍人

（自営業なら）

1．専門的・技術的（医院・法律などの事務所・芸術家・寺社）

2．商業　3．工業　4．ｻｰﾋﾞｽ業　5．農業　6．その他

③　就業先

④　就業期間

⑤　仕事就いた経路・事由

⑥　収入

⑦　職場に対する評価

⑧　充実度・満足度

⑨　その仕事に就いたことによる自分の人生にたいする影響

（心理面・行動面）

⑩　その仕事を辞めた理由

(2)　昇進・降格・転勤・転属・出向・単身赴任・独立・自営業の創業・商売がえ・失業・解雇・倒産などの経験者に対して

①　いつ経験したか

②　どのように対処したか

③　その事を経験した当時どのように感じたか

④　現在、それについてどのような評価をしているか

(3)　家業について

①　その有無

②　（有るなら）その職種　　注：農業ならその規模も

③　継いだ理由・継がなかった理由

2　職業生活からの引退

(1)　引退について

①　引退の時期を考えていたか

②　引退への準備や心構えについて

③　引退の影響（意識面・行動面）

(2) 定年退職について
① 定年前の準備や心構えについて
② 定年退職の影響（意識面・行動面）
③ 定年退職後の就業の有無とその内容

3 職業経歴上の出来事の時期の評価 （早い・人並み・遅い）
＊初就職・昇進・自営業の創業・独立・引退などについてきく

4 配偶者の職業経歴について
＊その人の人生に影響があったと思われる場合にきく
(1) 配偶者の職業経歴
(2) 感想・評価
＊昇進・降格・転勤・転属・出向・単身赴任・独立・自営業の創業・
失業・解雇・倒産などがあればくわしく聞く

V 集団所属

1 少年期、青年期のこと
子ども会、青年会、自治会、部活動などへの参加

2 成人期以降
PTA や自治会（町内会）、消防団、婦人会、老人会、模合、郷友会などへの参加⇒役職の有無
趣味の団体・サークル、宗教関係の集まり

1、2とも参加した経験はあるかなどを簡単に聞きその人の人生に影響があるのなら話を聞く
今まで参加したものを全部入れる必要はない

VI 地域移動・居住・家の来歴

1 地域移動
(1) 地域移動の有無
(2) 地域移動の経験がある人は、その経緯と理由、エピソード
(3) それぞれの土地での人々の暮らし、風土、住み心地
(4) 親族はどこに住んでいるか

2 住居
(1) 持家の取得（現在も含む）
① 初めての持家の取得はいつか
② その時の経緯、エピソード、感想
③ 新築購入、大規模な増改築の有無、時機
その事由（事由＝ことの理由、原因） 資金の調達方法
(2) 住まいに関しての将来の希望

3 家の来歴
(1) 家の性格（出身階層、由来）
(2) 位牌の継承（簡単に聞く）

VII　健康

1　大病や大怪我の経験

(1)　どのような病気、怪我だったか（状況、原因）

(2)　その時困ったこと

(3)　困難の克服の方法

(4)　自分やまわりの人にどのような影響があったか

行動面（生活習慣の変化、障害がのこったか）

意識面（健康に対する意識の変化など）

2　生まれつきの障害の有無

(1)　どのような障害だった

(2)　その障害による影響があったか

3　現在の健康状態

4　健康維持のためになにかしているか

5　これからの健康になにか不安はあるか

VIII 転機　・解決困難な出来事

1　解決困難な出来事

これまでの人生で、解決するのに一番苦労した出来事

(1)　その出来事は何歳の時でその状態がどのくらい続いたか

(2)　その出来事の内容とその時点での出来事に対する評価

(3)　その出来事をどのような状態で経験し、どう受容し、対処し解決したのか

(4)　その出来事は、現在の生活にどのような影響を残しているか、また現在その出来事をどのように評価しているか

(5)　その出来事は直接当人に発生した出来事だったのか、それとも重要な他者（配偶者、等）に生じた出来事が結果として当人にとっての解決困難な出来事となった出来事なのか

2　人生の転機となった出来事

今まで経験してきた出来事のうち、人生についての考え方や生き方が変わる
きっかけ、すなわち転機になった出来事は何であったか

(1)　その出来事は何歳の時で、その状態がどのくらい続いたか

(2)　その出来事の内容とその時点での出来事に対する評価

(3)　その出来事をどのような状態で経験し、どう受容し、対処し達成（解決）したか

(4)　その出来事は生活のどの面から感じ始めたのか、またそれは予期することができたのか

(5)　その出来事は当人に直接発生したことなのか、それとも重要な他者（配偶者、等）に生じた出来事が結果として当人にとっての転機となった出来事なのか

(6)　その出来事によって人生上でどのような変化があったか（生活面、生き方、考え方）また、現在その出来事をどう評価しているか

IX　歴史的出来事の経験

金融恐慌、日支事変、開戦、敗戦、応召、徴用、食糧難、占領、本土復帰、バブル景気とその崩壊、海外移住経験、

※　占領（捕虜収容所、女性解放、軍作業、軍工事、B 円とドル、コザ騒動、島ぐるみ・土地闘争、朝鮮・ベトナム戦争）

※　本土復帰（標準語励行、ナナサンマル、海洋博）

※　質問の際の留意点

基本的に次のような点については丁寧に尋ねる

when	それはいつ起きたことであるか。時点の確認。
what	それはどのような内容の出来事ないし経験であるか。
why	なぜそのようなことを経験することになったのか。
where	どこに住んでいるとき、どこで起きたことであるのか。
whom	誰に起きたことであるのか。そしてそのことに巻き込まれたのは誰か。影響を受けたのは誰か。
which	その出来事や経験に対してどのように対処したか。
while	その出来事ないし経験はどれぐらいの期間続いたのか。
how	その出来事ないし経験について、その当時いかなる気持ちを抱いていたか。また、現在どのように評価しているか。

X　主観的ライフコース

●人生曲線

1　尋ね方

7つの項目について、いつ頃（年齢、年次）どのような理由で、どのような変化が起こったかを尋ね、それを別紙の図に表にしてもらう

2　手順　（準備作業として、既知の情報｛重要な出来事など｝は記入しておくこと。）

(1)　もっともよかったときを「5」、もっとも悪かったときを「1」とし、その時点（年齢、年次）を確定してもらう「最も」というときが複数あっても良い。

(2)　「5」および「1」の時機の理由（出来事や原因）を尋ねる。

(3)　上で尋ねた複数の時転間の変化を線でつなぐ

(4)　変化（上昇または下降）の事由（出来事や原因）を尋ねる

《変化がないと答えた場合》

自分の人生の中で相対的に良かった、悪かったという評価であって、他者との比較や世間からの比較ではないという質問の趣旨をもう一度説明した上で、もう一度質問する。それでも変化がないと答えた場合には、対象者がこれまでの人生を自分なりに良かったと思っているのか、悪かったと思っているのかを確認して図に表してもらう（1から5までのうちいずれかの段階での直線になる）。

3　項目

(1)　職業生活：職業に就いている期間が対象。職業に就いていない期間は空白となる。

(2)　暮らし向き：経済面（自動車など耐久消費財の所有も含む）

(3)　親との関係：親の生存期間が対象となる。両親とも亡くなるまで線は続く。育ての親も含む。

(4)　配偶者との関係：配偶者がいる期間が対象。結婚未経験者には質問しない。

(5) 子どもとの関係：子供のいる期間が対象。子供が離家したり結婚してからの期間も含む。子供のいない人には質問しない。
(6) 健康状態
(7) これまでの人生一般

4 人生段階区分
(1) 人生段階を区切ってそれぞれ名称を付けてもらう（時期区分の数や名称は対象者の自由）
(2) 各段階について区分と名称の理由
(3) 各段階での生活の中心は何であったか
(4) 各段階での人生に影響を与えた事柄の有無とその内容
(5) 各段階についての当時と現在での評価（満足度）

5 主観的経歴
(1) 親の人生と自分の人生を比べて共通点は何か、相違点は何か
(2) 子供の人生との共通点、相違点
(3) 人生でやり残したと思うこと、やり直したいと思うこと
(4) 年齢を重ねるにつれてどのような内面的変化があったか
(5) 自分の人生評価

6 人生観及び自己イメージ
(1) 生きがいはあるか
(2) 人生で大切なことは何か
(3) 自分自身をどんな人間だと思うか
(4) 何をしているときの自分が好きか

<巻末資料2>

生活史資料

口述生活史の収集を行った第二次調査結果のうち、主として本文５章で用いたケースの生活史資料をここに掲載する。なお、各ケースは、コーホート・性別順、ケース番号順に配列してある。

C-Ⅰ　男性

A.N(11508)さん

●生い立ち、定位家族のこと

大正５年、６人兄弟の長男として生まれる。父は優しい人であったが、怒ると怖い人だった。母は自分を産んで二十日後に死亡したと聞いておりその記憶がない。父親は自分の母親が亡くなった後に再婚し、一人の弟と二人の妹ができた。しかし自分にとって母はあくまで義理の母であり多少の遠慮があった。そこで祖母（母方）のところに頻繁に出入りしよく面倒をみてもらった。父方の祖父や祖母については自分が生まれたときにはすでに亡くなっていたと聞いている。兄弟の中では特に三女である妹と仲がよかった。しかしこの妹は昭和８年に亡くなってしまう。おそらく盲腸が原因だったのではないかと思う。

●学校時代

学校は嫌いではなかった。しかし家が貧しかったため、文具はおろかノートにつかう紙にも事欠くありさまだった。習字の時間などには、他人が用いた紙を使って練習をしたこともあった。テストのときは書くための紙が配られたのでうれしかったことを覚えている。尋常小学校を卒業後すぐに農家に奉公に出されることになったのだが、成績は悪くなかったので、小学校の先生がもう少し上の学校に行かせるよう親に説得するため家に訪ねてきたこともあった。

●奉公していた頃

父親の借金の返済のため農家に奉公したのは昭和５年のことである。父親に行けと言われ、なかば強制的に奉公を始めたのだが、父の決めた奉公先での給料は１年目で 15 円、２年目に 20 円、３年目に 20 円という低い金額だった。３年程働いてようやく親の借金を返し、他の条件のいい農家を探し奉公することになる。次に奉公することになった農家では、１年間で 50 円という給料で２年程働いた。その後、さらに条件の良い農家に奉公し、１年間で 80 円という給料で３年程働いた。

合計で８年間農家に奉公し続けていたが、「このままの状況ではだめだ」といつも考えていた。父親自身も小作人であるため土地がなく、このままでは自分もジリ貧におちいるだけだからである。農家に奉公していた８年間である程度まとまったお金がたまり、移民としてフィリピンに渡ることを考えるようになる。フィリピンはお金のレートが安く、日本でのお金である「円」はフィリピンのお金である「ペソ」に替えると増えたからである。

農協に預けてあった200円と借金して作った100円とで、フィリピンのミンダナオ島へ自由移民として渡ることになったのは昭和12年のことである。

●フィリピンでの生活

フィリピンでも最初は農家に住み込んで働いた。フィリピンは食料が豊富で、沖縄での暮らしよりずっと良かった。住み込み先の農家では主人に気に入られ、娘をもらわないかと勧められる。その住み込み先の娘と結婚したのは昭和14年のことだった。

しばらくは結婚後もその農家で働いていた。が、結婚の翌年には子ども（長男）が生まれたこともあって、このままの給料ではやっていけないと考えるようになる。そこで貯めていたお金を使い土地を購入して、フィリピン麻の栽培を事業として始めることになる。始めた事業は非常にうまくいっていた。収入もふえたし、なによりも人をつかって仕事ができたのがうれしかった。今まではずっと奉公として人の下で働いていたからである。

●戦争

太平洋戦争が激しくなると自分も徴用に取られ、陸軍の軍作業にかり出された。昭和18年のことである。日本軍の飛行場建設であった。徴用での軍作業はとてもつらく、二ヶ月で音をあげた。そこで軍属になれば軍作業から解放されるだろうと考え、海軍に入隊することになる。そのため、軌道に乗っていたフィリピン麻の事業からは手を引かなければならなかった。

海軍での仕事は非常に楽だった。しかし収入は少なく、食べるものにも事欠く有様となり、妻が農業（米作）をすることでなんとか生活することができた。戦争の敗色が濃厚になってくると、軍の仕事どころではなくなり、フィリピン各地を逃げ回った。このとき自分は海軍といっしょに逃げたため、妻子とはぐれてしまった。

●終戦後

終戦後の昭和20年に日本に戻った。強制的に引き揚げさせられたのである。その際、フィリピンで得た土地は没収された。引き揚げ先は福岡だった。捕虜収容所に入れられ、買い出し係をさせられた。鹿児島などに買い出しにいったものの、駅では警察官が見張っており、ヤミ市で買ったものはいつも没収されそうになった。列車に乗るときは便所に隠れたりして、警察の目から逃れた。当時は配給制でご飯2杯とたくあん2きれというのが1日の量だった。また、フィリピンという暖かい土地から引き上げてきたため冬服がなく、餓死したり凍死したりする人もいた。

福岡の収容所で妻と息子に再会した。妻と子は始め広島に引き揚げていて、そこから自分と同じ福岡の収容所に移されたのだという。このとき、フィリピンで生まれた娘（長女）が戦争で逃げ回っているうちに亡くなっていたことを知らされた。さらに妻は引き揚げ中に知り合った男性と恋仲になっており、自分とは分かれたいとのことだった。ショックではあったが、そうなってしまったことは仕方がないと割り切って考え、離婚届に判を押した。収容所を出て、息子をつれて沖縄に戻ったのは昭和21年のことである。

●沖縄に戻ってからの生活

沖縄に戻ると家は焼き払われていた。さいわい父親は元気で、自分の妹の嫁ぎ先に身を寄せていた。そこで米軍の飛行場から資材を盗んでテント小屋を作り、父親を引き取って暮らし始めた。父親は自分や次男である弟（満州に兵隊としてとられていた）が沖縄に引き揚げてきているということを聞いて、たくさんのイモを作って用意していた。そのため食料にはあまり困らなかった。自分も荒れ地を見つけて開墾し、野菜などを作ることによって生計を立てた。

●再婚・子育て

昭和22年に現在の妻と結婚した。その当時、前妻の子がいたこともあって、気持ちの優しい女性を探していた。親戚からの紹介があって、その女性なら大丈夫だと思った。結婚式は行ったが敗戦直後ということもあり、身内だけのささやかな式だった。結婚の翌年には息子（次男）が生まれた。子育ては主に妻が行ったが、自分もしつけにはかかわった。厳しくしつけた方だと思う。現在の配偶者との間には2人の男の子と4人の女の子ができている。

●胃潰瘍にかかる

昭和27年に胃潰瘍にかかった。手術をしたが直らず、その後も4年ほど寝たきりで仕事ができない状態が続いた。この時期が自分の人生のなかで一番つらい時期だった。父親も歳のせいもあって働くことができず、子どももまだ小さかったため経済的に困窮した。救済を受けてかろうじて生活が出来るような状態だった。3人の医者にかかり、合計4回の手術をうけ、ようやく胃潰瘍が直ったのは昭和31年頃のことである。このときはいろんな人に世話になり、みんなに助けられたという思いが強い。

●土地の購入と農業の拡大

昭和33年に長男が結婚し、その翌年に孫が生まれる。昭和37年には台風に遭い、茅葺きの家がとばされた。そこで農協から資金を借り、自分の家を立て直した。また、土地を買うために農協から借金をするようになったのはこのころからである。借金して土地を買い、その土地で作物を作って借金を返済すると言う形で、どんどん土地を購入していった。借金をしてまで土地を購入したのは、将来土地が高くなるだろうという読みもあった。周りはそんなに借金をして大丈夫かと心配していたが、自分は病気も直ったこともあって、返済は可能だと思っていた。購入した土地は合計で800坪に及んだ。

昭和の46年に父親が亡くなった。尿道がつまり、尿がでなくなったため手術を行ったのだがそれでも直らず、病院で亡くなったのである。90歳代まで生きたので長生したほうだと思う。

子どもたちは大きくなり、結婚を機にそれぞれ独立している。子どもたちが結婚すると購入した土地を分けた。子どものうち数人はその土地に家を建て、現在も住んでいる。孫の数は20人以上になる。

●現在

購入した土地は売ったり子どもの譲ったりして少なくなったが、それでも300坪ほど残

り、現在はその残った土地で野菜を作って収入を得ている。本当は年金で十分食っていけるのだが、仕事が楽しいので続けている。購入した土地は自分の家に近く、その土地を譲った子どもたちの家と自分の家との距離は 100 メートルもない。長男とは別居しているものの、頻繁に会いに来るので寂しさは感じない。これまでの人生をふりかえって、そうとう苦労したけれども、今は思い残すことはなくおおむね満足している。

N.H(11550)さん

●小さい頃の家族環境

大正４年、８人すべて男のきょうだいの三男として生まれる。アルゼンチンに行っていた叔父から呼びだされた次男が、18 歳になってからアルゼンチンに渡った。両親のしつけは厳しく、父親は頑固だったが、反抗することもなく親との仲も良かった。父方祖父母と同居しており、しつけはあまり厳しくなかったが、悪いことをしたときにはひどく怒られた。が、それでもまわりの家庭と比べればいい方だった。家業は農家でキビづくりをしており、40～50 トンは収穫していた。

●学校時代

昭和２年に尋常小学校を卒業。当時は学校が嫌いで、キビづくりに興味もあったので進学希望はなかった。卒業後はキビづくりを手伝い始めた。

●結婚

昭和 13 年（22 歳）、同じ部落の現在の妻と見合いをし、結婚した。親類の大きな家を借り、50～60 名を招待して簡単な料理をだして、自分は三味線をひいて祝った。結婚当初の家族構成は、妻と自分の親で、昭和 15 年からは同じ部落内ではあるが、親元を離れ、経済的にも独立をした。自分はのんびり屋で、妻は働き者。相性はまあまあ良かった。

●就職

昭和 14 年には友達の誘いをうけ、内地に興味もあったので大阪の真鍮工場で働いた。ここでは大砲の弾に真鍮を巻いたりしていた。が、本業であるキビづくりが忙しくなってきたので、３カ月で食べ物のよい大阪をあとにし、沖縄に戻ってきた。昭和 15 年には親からキビ畑を譲ってもらった。親元を離れてから、親の接し方が優しくなった。

●戦争時代

昭和 17 年（26 歳）に設営隊として海南島にむかった。同 19 年まで海南島に駐屯し、その間、親に月々115 円くらい送金していた。その後、部落に戻っては来たが、すぐ読谷の飛行場建設に徴用された。飛行場では主に滑走路の修復作業をしていたが、手作業かつ人手不足で作業が全然はかどらなかった。昭和 20 年、米軍が上陸したのを聞いて、（沖縄本島北部の）国頭村に避難をすることにした。国頭にいるあいだは、昼間は米兵に見つからないように隠れ、夜になってから出歩いて米や芋をわけてもらうという生活をしていた。戦

争が終わり、昭和22年になって別々になっていた家族と再開することができた。が、しかし19年には長男である兄がマーシャル諸島で死亡し、20年の沖縄戦で四男の弟を亡くした。

●子どもの成長、独立

昭和13年に長女が誕生、次女、長男、三女、四女、五女の順で誕生し、女5人、男1人の計6人。しかし、妻に1度流産の経験があり、流産後は妻を気遣い、仕事はあまり手伝わせないようにした。子どもたちの名前は妻と相談して決めた。しつけは人間にとって第一に大切なことなので、子どもが小さい頃には厳しくしつけ、世間の人に迷惑がかからないようにした。ときどき反抗したが、理由をいって納得させて、言い聞かせた。

昭和29年に長女が中学校を卒業するが、翌年に心臓病を患って亡くなってしまった。長男、三女は高校を、次女、四女、五女は短大を卒業した。長男は学校卒業後、キビ畑が広くて人手不足の理由から手伝うかたちで農業を始めた。娘達は学業を終了後就職をした。現在、次女、三女、四女が結婚しており、別居している。娘達が結婚したときは費用をだすなどの援助もした。娘夫婦の生活が苦しくなったときに援助はするが、今までそんなことはなかった。孫は全部で11名、初孫は昭和46年に誕生した。孫の方が自分の子どもよりもかわいいので、毎週土、日にやってきたときはお菓子やアイスクリームをあげている。

●持ち家取得

昭和42年（51歳）に銀行からお金を借りて、自宅を新築した。この頃、ドルから円になったので安くなり、得をした。戦前には台風の影響で家が倒れ、その下敷きになって死ぬこともあったので、新しい家を建てて安心した。

●大病経験

平成3年に熱病にかかり、3ヶ月のあいだ入院していた。この入院で仕事の収入が大幅に減るのではと気がかりではあったが、このときには畑仕事の方を長男に任せてはいたので、それほどひどいものにはならなかった。入院中は子ども達が交代で見舞いに来てくれた。入院費の方も生命保険からお金がおりたので助かった。退院してからは健康維持のために体操などで毎日からだを動かしたり、食べ物も程々に、お酒もひかえて、薬用酒を飲んでいる。

●現在

現在は畑仕事も午前中に出かけていき手伝うものの、あとは一人前になった長男に任せている。自分の人生を振り返って、良いときもあったし、もちろん悪いときもあった。せめて高等小学校までいって勉強すればよかったとも思う。三線を引くのを趣味にしている。

C-Ⅱ男性

A.Kさん(12022)

●子どもの頃

大正15年生まれ。小さい頃は父が厳しく、左利きだったためにそれを直すようによくしかられた。特にごはんを食べる時には厳しくされたらしく、その後はごはんを食べる時と鉛筆を持つ時は右利きに直した。

●海軍入隊

昭和20年3月に海軍に入隊。整備兵になり機械の技術を学ぼうとした。その時困ったのが、一人が悪いことをすると、みんなも一緒に罰をされるという「総員罰則」があり、野球バットでお尻を叩かれたこともあった。また朝の掃除などもあった。しかし当時は陸軍よりも海軍の方がいろいろな面で待遇が良かったらしい。それというのも、海軍は海外に行く機会が多いので、人とのつきあいもあるし、あまり貧相な身なりをしてはいけないということなのだそうだ。終戦後沖縄へ帰ることになったが、結局兵隊として生活したのは約半年ぐらいだった。

●結婚

妻とは同じ部落の人の紹介により、昭和25年（24歳）に結婚。当時の妻の印象は、「小さくてかわいい人」だった。披露宴は今のように大々的なものではなく、食事もなかったが、その当時ハワイにいたおじさんに反物を送ってワイシャツを縫ってもらい、それを着た。結婚して10年くらいは親元で暮らしていたし、姉の家族とも一緒に住んでいたが、仲良く暮らしていた。

●家族円満

妻とはとても仲が良く、互いに信頼しあっている。たまには口げんかをする時もあるが、でもあまりけんかをしないように気をつけている。なぜかというと、病気をしたときに面倒を見てもらえず困るからである。また妻には今まで一度も手をあげたこともなく、非常に大切にしている。家族についても、誰も反発する人もいないので、家庭の雰囲気はとても良い。

●子育て

子どもは男3人、女2人の計5人で、生まれたときは、みんな素直世の中の役に立つ人になって欲しいという願いがあった。子どもが一人ずつ増えていくうちに、どんどん忙しくなり、畑に行くときはおじいさんに頼んで面倒を見てもらっていた。その当時は保育園などの子どもをあずける施設がないので、子どもを見てくれる人がいない家は、そのままおんぶして畑に連れていった。

しつけはあまり厳しくなく、子どもたちも自然に育ったという感じである。しかし自分があまり勉強したくてもできなかったので、子どもたちにはせめて勉強だけは一人前になって欲しいという願いがあり、学問に対しては積極的に応援した。その甲斐もあって、経済的理由で本土には行かせられなかったが、4人が県内の大学を卒業した。

●二世帯住宅

平成8年に家を新築し、それを機に長男の家族と同居。最初は長男だからということで一緒に住んだ方が良いのではないかと思ったが、長男の仕事の関係でお客さんが来たとき

など、一緒にいると具合が悪いこともあるのではないかと思い二世帯住宅にした。家長はA.Kさん本人であり、沖縄のいろいろな行事に関することは取り仕切っているが、それ以外は何事も長男がやるようになった。たまにご飯を持ってきてくれたりというようなこともあり、お互い仲良く生活していて不満もあまりないが、家の庭がまだ未完成であり、長男に早く完成させて欲しいと思っている。

●農業

兄が兵隊に行ったため、10代の頃から父と一緒に農業の仕事をした。最初はサトウキビやごぼうを作っていたが、その当時はあまり売れなくて、収入もやっと生活ができるぐらいだった。それから戦後になって野菜を主体とした農業に変更。収入の方も以前よりも多くなり、充実度も増すようになった。現在は1100坪の畑を所有し、また県から補助をもらって大型ビニールハウスを建てて引き続き野菜を作っている。そのおかげで台風が来ても被害にあうこともなくなり、収入もまたさらに良くなった。

●整備兵への思い

戦争の時に海軍に志願したが、それは機械の修理などの技術を習得するためだった。しかしすぐに日本が戦争に負けてしまい、軍艦や飛行機もなく、結局火薬を積んだりする仕事だけで機械にたずさわることができなかった。だからその時もし整備兵として技術を身に付けていたら、今ごろは農業をしないでも食べていけたのではないかと思っている。

●家について

今の家の建っている土地には神様がいるのでちゃんと拝みをしないといけない。沖縄のしきたりでは、土地によっていいところと悪いところがあるという観念があるので、それを見極めたうえで家を建てないと病気になったりすることもあるのである。だから家は神様がいる神聖な場所として受け止めている。

●三線を始める

50歳になった頃から三線を始めるようになった。そのきっかけとしては神からの霊感があったからで、何かをやった方がいいのではないかと思って始めることにした。現在は教室にも通っており、いろんな発表会にこれまで出たし、また努力の甲斐あって新人賞もとった。お酒を飲んだりもしないので、趣味としてはちょうどいいものであり、また人生の生きがいにもなる。

●戦争について思うこと

兵隊で千葉の方に行っていたが、終戦になったため沖縄に帰ることになった。しかし、沖縄はもう全滅状態であると聞き、鹿児島に1年くらいいて、結局沖縄には昭和22年に戻ってきた。戦争時の大部分は本土にいたため、そんなに戦争体験があるというわけではないが、恐らく日本が戦争に勝っていたなら、まだまだ被害が増えていたのではないかと思う。それに終戦直後は食糧難であり、生活もゆとりがなく非常に大変だった。それは沖縄の人みんながそうであり、そのような状態から徐々に切り開いていった。また現在でも戦争で亡くなった人の遺骨が出てきたりするが、実際に自分の兄弟の骨もまだ拾っていない

ので、どうしようもないと思いながらも非常に心残りである。

●人生で大切なこと

沖縄では祖先崇拝というのが非常に大事であり、よって子や孫はあとを継ぐためにも大切な存在である。それに子や孫たちと一緒に暮らしているととても楽しいし、人生も朗らかになると思う。このような家族の団らんというのは決してお金に代えられるものではないし、そういう意味でも子や孫は宝だと思っている。

A.G(12048)さん

●生い立ち、定位家族のこと

大正13年に6人兄弟の次男として生まれる。父は優しい人で、自分は父の性格に似ていると思う。母も優しい人であった。祖父については小さかったこともあって、あまり覚えていない。祖母は堅い性格の人だったが、孫には優しかった。自分はよく「おばあちゃん、おばあちゃん」と慕っていたから、そのせいもあったと思う。兄弟の中では長女である姉と仲がよかった。自分の子守を姉がしていたからだと思う。昭和5年には叔父（父の兄）の養子となった。叔父の家庭に男の子が生まれず跡取りがいないというのがその理由だった。昭和7年にはかぜをこじらせた妹が亡くなっている。

●就職

尋常小学校を卒業した昭和16年に、航空会社の技術養成学校に入学するため満州に渡る。自分自身、航空関係の仕事にあこがれがあった。また両親も勧めもあって、入学を決意した。この学校は航空整備の技術を学ぶ学校で、給料も一応出ていたため、一応就職という形になる。当時の初就職の時期としては遅かったほうだと思う。満州は暮らしやすいところではあったが、2年ほどでこの学校を中退し地元に引き揚げた。進学をやり直したいというのがその理由だった。

沖縄に戻った後、現在の沖縄水産高校に入学する。通常3年で卒業するのだが、専修だったので2年で修了した。それ以上の学校にも進学したかったのだが、兵隊にとられたので断念することになった。

●戦争

昭和19年に入隊し、鹿児島の飛行場に航空整備兵として配属される。沖縄戦が激化したときは、鹿児島からも戦闘機を応援に出した。が、当時の状況では燃料が足りなくて、出撃した戦闘機は沖縄につく前に墜落したと聞いている。また、鹿児島の飛行場にもアメリカの戦闘機がやってきて、空襲を受けたこともあった。自分は幸いにも助かったが、やられた人もたくさんいた。飛行場にたくさんの死体がならんでいた光景は今でもはっきりと覚えている。

●終戦後

鹿児島で終戦をむかえたが、沖縄がアメリカ領になっていたこともあって、すぐに戻ることは出来なかった。そこで大分に行き、船員として働くことになる。その当時、船員は第1級配給資格であったため、食料に困らなかったからである。船員として1年半ほど働いた後、ようやく沖縄に戻ることが出来た。

沖縄に戻った後の昭和22年には軍作業として米軍の修理部で働き始める。当時は生活が苦しく、とにかく職が欲しいという状況であったため、募集をみて飛びついた。輸送部隊の本部に属していた修理部では、主に乗用車やトラックの修理を行っていた。収入は当時としては悪くなかったのだが、自分の専門技術を生かしていないこともあって仕事に不満があった。

●結婚、新婚生活、子どもの誕生

昭和24（26歳）年に見合いで結婚する。結婚式には親戚や友人が集まった。結婚にしたことで、自分はもっとしっかりしなければだめだと感じるようになった。新婚生活は実家で始めた。いうのも、長男夫婦がそのとき実家にいなかったからである。しかし実際のところ、自分は次男だったこともあって、もともと独立するつもりであった。そのため、長男夫婦が戻ってきたときには、すぐさま母親に相談し、家を出た。結婚した1年後には子どもが生まれた。そのことで家庭での生活に幸せを感じるようになった。子育ては厳しくしたほうだと思う。が、子育てに費やした時間は少なく、今になってみるともう少し子どもに接する時間をとればよかったと思う。

●転職

米軍の修理部に2年ほど勤めた後、船舶の機関士となる。自分の専門技術を生かせる仕事であった。また、その当時に近海沿岸の船舶機関士の免許を取ったことも転職を決断した理由の1つであった。修理部にいたころに比べ、働いた分だけ収入になったのでありがたかった。昭和28年にはアメリカの石油公団に入社する。給料がとても高かった点に魅力を感じたからである。この会社では消防班の機械（主に消防ポンプ）の修理や、石油の積み卸しのための重機の操縦などを仕事として行っていた。

●ブラジルへ

石油公団での仕事は順調だった。給料もよく、なんの不満もなかった。ところが兄が事業を失敗したことで状況が変わってしまった。兄の借金の連帯保証人になっていたからである。手元のお金だけでは借金の返済はできず、財産を手放さなければならなかった。借金返済後に手元に残ったお金は非常に少なく、このままの仕事を続けても元の状態に戻るには時間がかかりそうだった。その当時、ブラジルへの移民が盛んだった。ブラジルの為替相場は沖縄より良く、お金をもうけやすい環境にあった。また自分の知り合いも移民をしていた。そこで石油公団の仕事を辞め、知り合いのつてをたよってブラジルに家族全員で移民した。

ブラジルでは土地を借りてナスやウリなどの野菜を作っていた。収入は良かったり悪かったりで、思ったほど楽ではなかった。母親は自分がブラジルに渡っていた時期に亡くな

っている。昭和 47 年には長女が結婚。翌年に初孫が生まれる。また昭和 55 年に次女が結婚し、62 年には長男が結婚している。

ブラジルは住み良いところではあったが、収入が思うようにならず、いつも沖縄に戻りたいと思っていた。沖縄が日本に復帰した年には沖縄に戻ろうとして準備を始めたこともあった。

●沖縄に戻る

おじの位牌を継ぐためもあって、沖縄の戻ってきたのは平成元年のことである。戻ってきたといっても落ち着ける場所がすぐにさがせた訳ではなく、2年ほどは妻の実家に身を寄せていた。子どもたちの資金援助を受け、平成3年、現在の場所に家を建てた。土地は妻の父に譲ってもらった。そのときはひとの情けが身にしみてありがたかった。沖縄に戻ってきた後、子どもたちはさまざまな道を歩んでいる。長男の嫁とその子ども、三女、四女とは沖縄に戻ってきてから現在まで一緒に暮らしている。長男、次男、三男は本土で働いている。長女夫婦は自分らと一緒に日本へ引き揚げてきた後、やはり本土で暮らしている。次女夫婦はまだブラジルに残っているが、将来的には日本に来る予定である。三女と四女はまだ未婚で家にいる。

沖縄に戻ってからは姉の土地を借りて農業をやっている。キビなどをつくっていて、収入はまあまあである。養子先については外面的には継いだ形になっている。が、位牌などは手続きが面倒なこともあって、まだ継いでいない。

●現在

仕事に生き甲斐を見いだし、健やかに生活している。自分は少々、譲りすぎ、人を信用し過ぎと思う。そのせいで兄の借金を背負い込み苦労したと思う。現在の気がかりは、未だに結婚していない2人の娘のことだけである。

N.K(12050)さん

●生い立ち

大正 13 年に3人きょうだいの長男として生まれた。生まれは沖縄本島北部だが、4歳(昭和3年）の時に家族の先発隊として祖父母の住んでいる那覇市へ一人移った。祖父母は雑貨店（マチヤグワー）を経営しており、おやつに困ったこともなく、当時のお菓子の値段も覚えている。祖父母、特に祖母は優しく、おばあちゃん子だった。那覇に来て4、5年で家族と合流した。父は農業を辞め、木炭を売る仕事を始めた。家族と合流しても生活に変化はなく、相変わらず祖父母に甘えていた。それには、自分が長男だったことも関係があったと思うし、弟よりもかわいがられていたので、長男で良かったと思う。祖父は大酒呑みだったが、酒でからだが弱ってきてからも呑みつづけ、結局、昭和 12 年に亡くなった。祖父を亡くしてから 10 ヶ月後ぐらいに、今度は母を亡くした。当時は、火葬ではなかった

ので、祖母が、墓の中の祖父がちゃんと骨になっているかどうかを心配していて、それをよく覚えている。母は病気がもとでなくなったが、今考えれば、ガンだったのではないかと思う。

●学校、青年時代

高等小に上がったときには、なんだか大人になった気分で嬉しかった。高等小を卒業したらすぐに働こうと思っていた。いまにしてみれば、もっと上の学校へ行っておけば良かったと思う。高等小を卒業するとすぐ（昭和14年）にデパートに就職した。給料は、3年間は見習いだが、その後は月給30円、ボーナス150円と当時にしては良かった。見習い期間中は、日給65銭だったと思うが、それも決して悪くはなかった。試験を受けて入社したのだが、その時は10人中2人採用で、しかも、当時は地方からの採用が多かった。那覇など町の人間は、遊び慣れているから敬遠されがちで、まじめな、地方の人が好まれた。それでも試験に受かったのは、運が良かったとしか思えない。この会社は寮制だったので、就職とともに実家を出た。寮生活は、規則も厳しかったが、仲間も多く楽しかった。詩吟が特に楽しかった。朝は6時に起こされて掃除をさせられた。この寮生活と後の軍隊の影響で、規則や時間にたいして厳しい人間になったと思う。入社してからは、経済的にも独立して実家と金銭のやりとりはなかった。実家も金銭に不自由はしていなかったし、無心をしたこともなかった。18歳（昭和１７年）からは、戦争の影響で夕方から青年学校に通った。そのため勤務時間が短縮された。自分のいたデパートは大手だったので、軍には協力を惜しまなかったのだと思う。青年学校に通うことは、当たり前のことで、誇りにさえ思えた。

●戦争

19歳（昭和18年）に徴用となった。長崎県の佐世保にある造船所で、軍艦の原図を書かされた。船の原図は大きかったし、難しかった。佐世保の冬はとても寒く、造船所はとても広いし、仕事はきつくて食事も少なかったので、始終凍えていて、よくボイラー室へ逃げ込んでいた。このころは食べることばかり考えていた。それまで食べ物に不自由をしたことがなかったので、本当に食べ物のありがたさがよくわかった。

昭和19年の9月に徴兵となり、兵役検査があった。ちょうどそのころ、そけいヘルニアという病気になっていたため、兵役検査では丙種となった。病気が治ってから出征となって、長崎の海軍病院で手術をしたのだが、化膿して病状が悪化してしまい、宮崎の病院で入院することになった。その間に本当の自分の部隊は出発しており、別の部隊に配属された。軍事訓練を受けて初めての検閲はとてもきつかった。一晩中歩かされた。訓練を終えると、門司港から釜山行きの船に乗ったのだが、それがまたひどかった。畳二畳ぐらいの広さに10人も詰めて座らなければならなかった。小便をするのも大変だった。部隊は、釜山から中国へ移動したのだが、南京で発熱して入院したため、またもや部隊を離れることになった。そのため、南方へは行かなくて済んだ。南方へ行った部隊はほとんど全滅だったと思う。

宮崎での入院といい、運命を感じる。退院すると今度は上海旅団に配属された。上海旅団では炊事班で、料理の講習を受けて旅団長の食事を作っていた。おかげで食料には困らずおいしいものを食べられた。それから旅団は満州へ向かったのだが、その途中、南京にいるときに終戦となった。その時は日本が負けたとは信じられなくて、軍旗が焼かれるのを見て実感した。

●終戦・帰沖

日本が負けてからは中国人に馬鹿にされて大変だった。列車に乗っても日本人は客車には乗れなくなったりした。だが、蒋介石側の中国人は日本人に優しかった。当時中国にいた日本人は皆、蒋介石を恩人のように思っていると思う。中国語も少しは話せるようになって中国人と話したりしたが、かれらのなかに日本人女性を妻にしたいという人が多かったことには驚いた。その後は、南京から上海に集結して昭和22年の3月に博多港へ帰ってきた。それからは鹿児島の戦友の所や、義妹のいる佐賀県で暮らし、沖縄に帰ってきたのは昭和26年になってからだった。

沖縄では弟が働いており、祖母と父と継母の面倒をみていた。妹は嫁に行った後だった。帰沖して祖母に会えたかとが一番嬉しかった。妹と再会したときは、なんだか話しにくくて、お互いにただ薄ら笑いをしているだけだった。肉親の再会というのは不思議な感じだった。帰沖してからは家族と那覇で暮らした。企画住宅という茅葺きの家で政府にもらったものだった。帰沖してからしばらくすると弟が結婚して家を出た。帰沖するまでの間家族の面倒をみてくれていたので結婚してくれて安心した。仕事は弟と同じ軍作業員の炊事の仕事に就いた。軍作業では、戦果といっては食料やタバコなどの物資を持ち帰った。給料も月に180 B円と悪くはなかったし、戦果もあったので食べ物には困らなかった。戦果ではケチャップや卵の粉等が人気があり、ジュースは人気がなくいつも捨てていた。

軍作業員は1年半ぐらいで辞めて質屋を始めた。当時は内地から、間組などの大手の建設会社が進出してきて土木作業員も大勢おり、そうした人を相手にした質屋がたくさん出来始めていた。儲かりそうに思えて始めたのだが、やってみるとなかなか大変でぼろぼろの着物を質草に持ってくる人もいたし、なによりも盗品に困らされた。時々、警察が盗品リストを持って現れ、店に盗品があれば有無を言わさずに没収していった。質屋ばかりが損をした。このままでは困ると言うことで質屋組合が作られた。そうやってどうにか警察権力に対抗したのだった。

●結婚・子育て

質屋を初めて1年ぐらいたった頃に叔母に紹介された人と結婚した。初めてあったときはお互いに気張っていたと思う。特にいやでもなかった。30歳での結婚は遅いほうだと思う。その年（昭和28年）の7月に長男が生まれた。妻は小学校の教員をしていたが、子どもができたときは仕事を辞めさせた。だが、結婚前の約束で仕事は続けさせることになっていたのですぐに復職した。その時には向こう（妻側）の親族が介入してきた。妻の仕事はよく勤務地がかっわったので送り迎えが大変だった。その後は、昭和30年と31年にそ

れぞれ長女と次男が生まれた。父方の祖母が亡くなったのもこのころ（昭和30年）だった。一番親しくしていただけにショックも大きく寂しくかった。

子どもたちのしつけは、高校までは厳しかったと思う。仲はそんなに悪くなったこともなく、反抗期に少し口げんかをしたぐらいだった。長男の大学進学のとき、長男と本人は本土の大学を希望していたのだが、妻が反対してもめた。結局は、妻側の親族の介入で、決着して沖縄大学へ進学した。この時は長男と２人で涙した。その後は問題もなく、長女は東京の専門学校へいき、次男は本土の予備校で大学をめざした。その時長女は月に５万円で生活していた、今考えれば大変だったと思う。子どもたちが高校を出るまでの間は家計を支えるのが大変だった。その頃が人生で一番苦しかったと思う。仕事のほうも沖縄の本土復帰後から本土系の消費者金融会社が進出してきて客足が徐々に遠のいていたころだった。

長男が学業を終える頃には（昭和48～50年頃）、沖縄タイムスの取次店も始めた。生活のためだった。600軒ぐらいの新聞を取り次いでいた。沖縄タイムスでは月に一回ぐらい部数拡張のための講習会が開かれていて、食事が出るので参加していた。その頃は企業は大変なんだなあと思っていたが、やがてその部数拡張に嫌気がさしてきて取次店を辞めた。

その頃（昭和50年）父親が十二指腸の潰瘍がもとで亡くなった。83歳だった。継母も昭和57年に亡くなった。祖母のときは一人で、父のときは配偶者と２～３ヶ月、継母のときも一人で、すべて介護をした。特に祖母のときは下の世話が大変だった。「なぜ自分だけ」という気持ちだったが、長男だったので仕方がないとも思った。今の若い人たちには下の世話などの介護はできないと思う。介護などの法律をしっかり決めて欲しいと思う。

父親が亡くなってからは、なんだか自分の責任が重くなった気がした。親がいるときは何か安心感があったと思う。父親が亡くなってからしばらくして（昭和54年）に長女が結婚した。結婚相手をみたときには年齢のわりにしっかりしていると思った。長女が結婚するのは嬉しかったが、少し年を感じた。自分が55歳のときだった。翌年には孫が生まれた。孫はとてもかわいい、今は大きくなっているが（16歳）やはりかわいい。月に一度くらいの頻度で会う。長女には「愛情で包み込みなさい」と言ってある。修復のできる範囲で厳しくしつけをして欲しい。

●転職・引退・現在

59歳（昭和58年）に質屋を閉めて、タクシーの乗務員になった。質屋では儲けがなかったからだ。その当時は免許を取得して三年でタクシードライバーになれた。タクシードライバーはとてもきつく、最初の一週間は、車から降りると目が回った。給料は水揚げの半分だったが、出勤時間を工夫して朝の四時から昼の三時半にしたので一日に９千円ぐらいはあった。会社内でもいい方だった。朝の４時頃は那覇へ行って、飲んで帰るお客を乗せ、夜が明けてからは那覇へ出勤する人を乗せていたので効率は良かった。タクシーではいろんな人に出会った。満63歳まで続けた。63歳になってそろそろ潮時だと感じたからだ。62歳の時には尿管結石になって手術もしていた。仕事を辞めて遊んでもいいかな、と思って

辞めた。

仕事を辞めてから2週間は楽だったが、その後は暇になってまた働きたくなった。タクシー会社に勤めて2年後（昭和60年）に現在の自宅を取得した。那覇に持っていた土地を売って得たお金に少し足して買った。那覇は狭くていやだったので現住所にしたのだが、当初はずいぶんと寂しいところだと思った。今では静かでいいところだと思うようになった。

現在は妻と息子二人で暮らしており、とても安定している。毎日の晩酌でつまみを食べ過ぎて太ったのでつまみを野菜中心にして減らし、健康のために朝4時に起きて散歩をしている。朝散歩をすると朝御飯がとてもおいしい。80 キロまで増えていた体重も今は 65 キロになった。人生で大切なのは、夫婦の間でも何でも「忍耐」と「辛抱」だと思う。現在の一番の楽しみは、やはり孫と会うことだ。孫というのは本当にかわいい。

T.S(12060)さん

●生い立ち

大正14年に4人兄弟の次男として生まれた。実家は農業を営んでいて、平均的な沖縄の家庭だった。幼少のころから親はしつけは厳しかった。しかしながら、その分理解はあったと思う。昭和6年に母方祖父、翌年には父方祖父が亡くなっている。祖父は厳しい両親とは反対に、彼らに対して優しく、甘やかしてくれる存在だった。

●仕事

昭和14年に尋常小学校を卒業した後、那覇の商店に勤める。進学する考えはなく、義務教育が修了した後はすぐに働いて家計を助けるのが普通だった。また、仕事の月給は月3円というものではあったが、結構満足だった。仕事内容は港で仕入れる品物を荷車をひいて、店まで運ぶという単純作業だった。仕事へは実家から通っていた。昭和17年になって、父親が病気で倒れて入院した。父親は20年まで病院生活をしていた。昭和18年、徴用で長崎へ行く。長崎では軍の工場で働くことになるが、そこでの生活は朝早くから夜遅くまで働くという、厳しい環境だった。また、そこでの給金は銭湯代と散髪代と少々の小遣いを残しては、他はすべて沖縄の実家へ送っていた。そういうことをするのが当たり前とされていた時代だった。以降、終戦まで長崎で働いていたのだが、原子爆弾により被爆者となってしまう。このことにより現在でも被爆者手帳をもっており、定期的な健康診断をしている。昭和21年に兄である長男が沖縄にて死亡。自分は当時まだ長崎にいたために兄の詳しい死亡理由を知らなかった。

昭和22年、長崎から沖縄へ戻ってきて、再び両親、妹二人と一緒に暮らす。最初についた仕事は米軍の基地でのガードマンであった。これは主にガードマンということで、他にもいろいろやらされた。当時は沖縄にはこれしか仕事がなかった。給料は月に3ドルから

4ドルというもので少し低い程度のものだった。昭和29年に米軍基地を辞め、農業を始めた（主にきびづくり）。収入は食べて行ける分程度のものだったが、農業に変わってよかったと思う。

●結婚、子どもの誕生

昭和25年、25歳のときに結婚・入籍をする。相手は首里の有数の土地持ちの娘で、親戚のおばさんからの紹介だった。いわゆるお見合いだったのだが、2人の間では何も問題なく結構すんなりとまとまった。また、相手は金持ちだったのだが、結婚に関しては2人の問題として生活環境の違いなどは問題にはならなかった。結婚の披露宴を親戚と友人とで行った。結婚後、両親とすぐに同居を開始した。彼の家は昔から間借りであったため、かなり狭かったという。また、同居した理由としては兄である長男が死亡したため、残った男子は自分だけであったからである。2年後の昭和27年、長女が生まれるが、生後一年後に死亡。当時は食料事情が最悪だったため、まともな食事があまりできなかった。翌年昭和28年に長男誕生。名前は彼の名前の一字をとってつけた。

昭和33年に次女が誕生、翌年34年には次男が誕生する。昭和37に三男誕生。すべての子に対してのしつけは厳しくもあり、また優しくもありといろいろ時を配っていた。また子どもに対する希望としては、他人に迷惑をかけなければそれでいい、そんな人に育ってほしいというものだった。また、反抗期における対処の方法としては聞き流していた。そんななかでも子どもとは互いに理解しあえていると思う。また、子どもの教育に関してはあまり気にしてはいなく、子どものしたいようにさせている。しかし、希望としては子どもには進学してもらいたかった。これは次男が高校中退をしたために強くそう思うようになったかもしれない。

●公務員に転職

昭和36年になって、県の農業試験場へ転職。募集があったときに応募し、また家から近かったのが転職をするきっかけだった。月給も職場環境もよかった。このため公務員がどれ程よいか考えた。このころから収入も良くなり、家庭的にも良い時期が訪れてきた。昭和43年、両親が死亡。死亡理由は老衰といえる。死亡する一年くらい前から病気に臥せっており、そのせいで体力が低下しそのまま死亡したという。二人とも同じような理由で時をおかず亡くなった。

●子どもの独立

昭和47年、長男が高校を卒業し、本土へ就職する。その2年後には長男から結婚したいとの相談があり、話をきくと相手の女性は妊娠していて、相談というよりかは報告に近い形であった。次男の場合も同じで、戸惑いはしたが子どもも一人前だから別に口出しすることはないと考え、反対などはしなかった。他の子どもたちの結婚についても、別に反対などはしなかった。昭和49年に長男が結婚、同じ年に初孫が生まれる。それからまた2年後に次女が高校を卒業とともに結婚をし、初離家をする。その翌年昭和52年には次男が高校を中退し内地で就職するために初離家をする。この次男とはなかなか連絡がつかないら

しく、現在何をしているのかよくわからない。その翌年にはその次男が結婚したが、連絡がつかないのは変わらない。

●家の新築・転居

昭和55年には家を新築する。このときには子どもから資金をいくらか援助してもらっている。が、子どもとの金銭関係の援助はこの時ぐらいだという。家を新築して現在の住所に移ってはいるが、昔から一家はこの辺りに住んでおり、引っ越しなどをしても同じ部落内を転々としてただけである。一戸建の家を持ったときの感想としては、これまではずっと間借りだったので、ようやく一人前になれたと満足した。自分の家を持った翌年には三男が高校を卒業して就職し、すぐ離家してしまったので、新築の家には夫婦2人になってしまった。昭和60年に農業試験場を定年退職した後は年金で暮らしている毎日である。今までがそうであったようにこれからも健康を大事にし、できるだけ多くの孫を見たいというのが望みである。頻繁にあえないせいで、孫にはついつい甘くなってしまう。

H.J(12079)さん

●小さい頃の家族環境

昭和2年に男3人、女4人の7人きょうだいの長男として生まれる。視力が生まれつき弱かった。親のしつけは厳しかったが、長男であったため両親からの信頼は大きかった。父親が昭和7年から昭和10年まで出稼ぎで海南島に行っており家を離れていた。昭和10年に引き揚げのため、家族で大阪に移り住んだ。

●仕事

昭和14年に尋常小学校を卒業し、同年、12歳で大阪の化学工場に就職。当時は戦争中であったために、自分の希望などは言ってられなかった。工場では気球爆弾の製造に携わっており、社長が沖縄出身の人に期待していたため、充実し良い職場だった。

昭和21年に大阪から沖縄（首里）に戻ってきたので、軍作業をして食べていくことにした。ここでは機械部品の整理などをしていたが、賃金が低かったので本島内で待遇の良い職場を探し回っていた。

昭和35年、軍作業に従事している頃、那覇市役所で守衛を臨時募集していたのを見て応募した。守衛の方が軍作業に比べ待遇が格段とよかったので、臨時で3年間働き、軍作業を辞めて定職として那覇市役所の守衛になった。市役所で働いていると、その職場の人間性が見えてきた。また、本土復帰後の昭和53年、交通法変更によって職場での対応に戸惑い、後ろから車に轢かれそうになったこともあった。

市役所守衛での収入は高く、職場としても充実しており、満足していたのだが、昭和60年になると定年退職で一旦辞めねばならなかった。このときはまだ60歳で、あと4、5年は現役で働くつもりだったので、また非常勤で働くことにした。ただ、非常勤に戻り収入

が減ってしまったので、無駄遣いをしないように心がけた。現在も那覇市役所で働いているが、引退したばあい、どうやって暮らしていくか心配している。

●結婚

昭和35年、いとこのおじさんが妻と同じ部落にいたことから紹介され、そこで知り合った。自宅で式を挙げた。結婚後、那覇の小禄に移り、ぜいたくをしないように心がけて生活を開始した。新婚当初は妻と2人で住んでいた。妻との相性は良く、結婚当初から変わることなくうまくやってきた。

●子どもの誕生

子どもは男2人、女5人の計7人。昭和35年に長女が誕生し、37年に次女、40年に長男、41年に三女、43年に四女、46年に次男、47年に五女が生まれた。子どもが生まれたことで責任感が湧いた。しつけに関しては自分が中心となって厳しすぎることもなく、また男女に問わず信条を持っておこなった。子ども達は皆おとなしかったので、反抗することもなく、しつけはうまくいった。ただし、若い人には若い人の考えがあるという点も尊重し、相手の考えを無理に押さえつけることもしなかった。子どもは7人全員が高校を卒業したあと就職したが、就職に関しては子ども達が自分で探して決めたので、話し合いなどはしなかった。昭和57、59、平成4年に長女、次女、三女が結婚して離家した。他の子ども達とは現在も同居している。結婚した子ども達は近所に住んでいるので、ちょくちょくとは会っている。

●孫の誕生

昭和58年に初孫が誕生。次女が男1人、女2人、長女が男2人を出産。孫は全部で5人。現在ひ孫はまだいない。孫と同居したことはないが、週に1、2回はあっている。

●母の入院

平成2年に母がアルツハイマーで入院し、母が他界した同6年までのあいだ病院を転々としていた。アルツハイマーの場合、1つの病院に3ヶ月から半年の間だけしか入院できないという規則があるらしく、きょうだいと交代で付き添っていたが家族、親族だけではどうすることもできなかった。このとき、自分がこういった立場になった場合、どうしようかとも考えた。病院側の充実を願うしかなかった。

●現在

現在の住まいは、自分の資金で昭和49年に建てて、平成3年に増改築したものである。この住まいには満足しているが、しいていえばより大きな家を希望している。長男であることから、先祖から続く位牌を受け継いでいる。今も現役で働くH.Jさんは、職場で体を動かすことにより健康を維持しており、元気に働く自分が好きなようだ。人生を振り返ってもらったとき、できればもっと勉強して世の中のためになるようなことをしたかったと語ってくれた。

U.K(12101)さん

●生い立ち

昭和3年、沖縄本島北部の村で長男として生まれた。昭和6年に母親が亡くなり、その時から祖母が母の代わりでしつけなどもきちんとしてくれた。父親は再婚をしたがその内縁の母の子どもとは仲良くしたかったのだが、仲が悪かった。こちらから寄っていっても受け付けてくれなかった。父親の私に対する態度は普通だったのだが、しつけはスパルタであった。

●卒業～就職

昭和18年（15歳）、高等小学校を卒業した。とても勉強が好きだったので進学したかったのだが貧乏であったため進学を断念し、家計を助けるために就職した。時期としては人並みであった。父親は製材所を勧めたが、私は自分の手で物を作ることが好きだったので大工になりたいと思い、大工見習いとして父親の知り合いの所に就職した。大工見習いの仕事はとても厳しく、朝から晩なで仕事でほとんど住み込みと同じだった。仕事が忙しく家族とは会えなかった。このころ家族は祖母が生まれた所へ帰りたいということから南部のY町へ転居していた。

●戦争

昭和19年（16歳）、空襲が激しくなってきたので祖母の保護者として本島北部へ疎開した。昭和20年（17歳）、米軍の捕虜となり真夏の中収容所のテント小屋で一週間くらい過ごしたが、その時に自分の母代わりであった祖母が亡くなった。とても忘れられない出来事である。北部にあった収容所からY町に戻ってきたのだが、もちろん家はなかったので家を建てたのだが、お金がかからないように自分で建てた。自分の家の他にユイマール（共同作業）で周りの200戸ぐらいの家も建てた。それぐらいから大工として働き始めた。見習いのときよりも収入がよくなり、普通の労働者と比べても良い方だった。職場もとても良く、社長にはいろいろなことを教えてもらった。いつも社長は建築現場に朝早く来て、地面に落ちているクギを見つけては、クギ一本も大切にしないといけないと言っていたことが思い出に残っている。この頃は、父親に妹が結婚したり何かがあるとお金を援助していた。お金の他に家を建ててあげたこともあった。

●結婚

昭和27年（24歳）で結婚した。自分と同じ出身部落の女性で、Y町に働きにきている時にここで再び出会ったことがきっかけであった。結婚の時期としては周りに比べれば遅い方であると感じた。同級生はほとんど子どもがいたからである。披露宴などはなく、長女が生まれたとき（昭和28年）に結婚祝いと誕生祝いの二つを一緒にやった。この年から昭和31年（28歳）まで父親と同居した。昭和30年には次女が生まれた。

●転職

昭和31年（28歳）、大工の仕事をやめて農工具の製作・販売の仕事を始めた。大工の仕事には満足していたのだが、必ず何かと酒が出てくるのでこれではいけないと思いやめる

ことにした。農工具の製作・販売の仕事は大工をしているときに父親に勧めて始めさせていたので、その会社を継ぐという形でスタートし、これを大きくしていった。頑張ろうという気持ち半分、不安も半分だった。このころは沖縄の農業が盛んな時で農工具を必要としていた時期であったため、農工具がたくさん売れて大工のころよりもかなり良い収入があった。いずれは親からも独立しないといけないと思っていたので自営業の創業と同時に親との同居も解消し、家も那覇市へ引っ越した。

●子育て

昭和34年、35年と相次いで子どもを早産で亡くした。とても惜しい事をしたと思う。あのころはまだ産婆さんが子どもを取り上げていた。今の医療技術があれば死なずにすんだのにと後悔している。昭和36年（33歳）には長男が生まれた。子どもの名前は3人とも夫婦で相談して決めた。しつけは厳しくしたり、やさしくしたりと、飴と鞭でしつけをした。長男や次女の時は生活が楽だったのでしつけはおだやかだったが、長女の時は貧乏だったのでしつけをきつくしてしまったので、3人の子育ての評価としては50点ぐらいだと思う。

●子どもの独立

昭和50年（47歳）、次女が結婚し、翌年には初孫が誕生した。昭和55年（49歳）には長女が結婚し、その年に孫を出産した。娘の結婚には別に要望はなかったのだが、長女には旦那さんが他県の人ということで、次女には結婚はまだ早いということで一応結婚には反対した。だが、結局は娘達に押し切られるという格好になってしまった。妻は娘達の味方をしていたようだった。でも二人の旦那さんともとても良い人であったので、今は結婚させて良かったと思っている。長男は昭和55年（52歳）に高校を卒業し翌年からは経済的独立を果たしている。

●転居

昭和51年（48歳）、しっかりとした家を作りたいと現住所に引っ越し、家を新築した。まだドルを使っていた時代に土地を買ってあったのでそこに家を建てた。家を建てる資金は銀行から復興資金として借りた。次の年には長女夫婦と同居を始めた。長女の旦那の給料がとても安く、これではとても生活できる状態ではなかったということと、家も新築後で2階が空いていたというのが理由である。この同居は昭和53年まで続いた。旦那の仕事が安定し、給料も良くなってきたので同居を解消したのだが、孫がとてもおじいちゃん子だったので離れるのがとても辛かった。

●現在まで

平成3年（63歳）、父親が肺気腫で入院した。介護の方は仕事が忙しかったので妻の方がほとんどやっていた。次の年に亡くなったのだが、後半の1年間は病院の器具をすべて家の方に持って来て家で介護をした。費用は町のほうが半分援助してくれた。平成4年（64歳）に、肝のうようで入院した。内蔵停止直前までなったが父親の葬式の日に大手術をして助かった。それから百日ちかく入院した。自分のことよりも仕事のお得意様に迷惑をかけることが気になった。退院してからも仕事をすることに子どもから反対されたので働け

るうちは働こうと思っていたのだが、会社を工場ごと売り職業生活から引退した。この仕事には後継者がいないことが心配である。現在は適度な運動（ゲートボール）と食事に気を付けながら、孫達が結婚するまで生きるということを生きがいとして悠々自適な生活を送っている。

A・M(12132)さん

●小さい頃の家族について

昭和３年生まれ。小さい頃に父親が満州事変で戦死し、母親と姉との３人暮らしだったが、小学校４年の時に今度は母親が病気のために亡くなったので、それからは母方の祖母に育てられた。しかしその祖母も戦争の時に亡くなり、その後はおじに引き取られた。その時はおじ夫婦と姉と自分の４人家族だったが、おじ夫婦に子どもがいなかったために、まるで自分の子どものように育てられた。

●高校時代の苦い思いで

高校の時、高等学校の相撲大会が開かれることになり、いつも夕飯を食べたあと寄宿舎の草むらで練習をしていた。その時は相撲大会の部長も引き受けていたし、もともと背は小さいが、中学の時に初段候補までなった腕前もあったので、自分より大きい人を取って投げるものだから女の子達がたくさん見に来るようになった。そこでかっこいいところを見せようと思い「逆投げ」という技をしかけたのだが失敗してしまい、右大腿部を脱臼してしまった。それからは記憶がなく、気付いた時には病院にいて、あれから３日も意識がなかったことがわかった。その時はレントゲンもない時代だし、医者の技術もいいとは言えなかったので、結局完治することができずに長い間ギブスを巻いた。

●通訳の仕事

昭和24年から東京に行くまでの間通訳の仕事をしていた。仕事の内容は、外国製のお菓子やフィルムなどで、期限切れになったものを本国の会社に送り返す際にサインをするが、その品物を持ってくるのは外国人であり受け取るのが沖縄の人なので、その間に入って通訳をするというものだった。

この仕事に就いたきっかけは、友人の紹介だったが、自分で英語はできると自負していたのですぐＯＫした。しかしいざ仕事を始めるとなかなか通訳することができなくて、外国人から「一体君が通訳なのか、それともぼくが通訳なのか」と言われて落ち込んだこともあった。通訳の給料は当時４千円でかなり高給だった。また仕事の中でも最高の仕事だったので優越感があったし、充実度、満足度も100％だった。

●東京で足の手術

通訳の仕事をしていた頃、車に乗ろうとした時に、鎖を閉めるための出っ張ったものに以前痛めた足を打ってしまい、出血してしまった。そしてすぐに病院に行って手当てをし

たが、すぐ入院することになった。その時に病院の医者がお父さんの葬式のために沖縄に来ていて、沖縄の病院を訪問した時にたまたま会ったが、その時はそれだけだった。しかし沖縄ではこのけがを治せる医者がいなくて、結局治療の希望の手紙を書いて東京在住の先生に送ったところ、すぐに返事が来て、「もしこちらに来る予定があれば責任を持って面倒をみてあげましょう」ということだったのですぐ東京に行った。

手術の日がちょうど皇太子（今の天皇）のご成婚の日だったが、このような日というのは二度とないから他の日にしようということで手術は後日行うことになった。いざ手術をするとあっというまに治り、１カ月もしないうちに帰りなさいと言われた。でも「今まで何年間（沖縄で）苦労したと思いますか、そんな１カ月もしないうちに追い出さないで下さい」と言ったら先生は笑って「気持ちはわかるがここにいれば金をとられるんだよ」と言って、それならあなたが気の済むまでということで４０日間は病院にいた。それで東京にたまたま知り合いがいたので、せっかく東京に来たのだから学校も出たいと思い、予備校に通って翌年大学に入った。

●妻との出会い

東京で入院している時に、そこで看護婦をしている妻と出会った。最初は同じ沖縄出身ということで奥さんの方から声をかけてくれたそうだが、話を聞いてみると教員をしていた姉の教え子だった。そのような共通点などもあり、そのうち親しくなって子どもができたので、籍を入れることになった。その時は大学２年であり、親たちの援助を受けながらだったので、生活のゆとりもなかったが、なんとかがんばっていくことができた。また一緒に住んでいるとお互いの美点も欠点も見えてくるが、いいところを尊重し、できるだけ若い思い出にしていこうというのが２人の共通したものだった。

●放送局入社

東京の大学を卒業して沖縄に帰ってきた時に、先輩に会ったので「あなたは今どうしているのですか」と聞いたら「放送局にいるよ」と言うので、採用があるときはぜひ連絡をしてくれるように頼んだところ、しばらくしてから採用試験の連絡があったので、受けたところ見事受かった。放送局では放送実施部にいたが、仕事の内容は、制作の人たちが取材をしてまとめたものを監査し、その番組をいつ放送するかというのをコンピューターに打ち込ませ、そして技術に送るというものだった。

放送は新聞と違い、話で人をひきつけないといけないし、そのテクニックもマスターしなければならないので、その分口数も多くなる。また放送局に携わる人は男性も女性も一癖持っている人が多く、非常に個性が強い。それに放送局というだけあって、言論の自由もあり、男性であろうと女性であろうと皆堂々としている。

●子育てについて

両親を小さい頃に失っているので家族は姉だけであり、男は自分だけだったので、結婚して子どもが生まれるにつれ、家族が増えていくのが素晴らしいと思った。子どもは男の子３人であり、特に長男には厳しくしつけをした。しかし次男からは長男を育てた経験か

ら、反抗期なども放っておいたりした。でも今考えると長男の時は初めての子だったのでどう教育していいかわからず、少し悪いことをしたなと思っている。

●かわいい孫

現在は三男の子どもで４名の孫がいるが、とてもかわいくてしょうがない。最初に「おじいちゃん」と言われた時は何かうれしいようなくすぐったいような気持ちがした。今では自分の子どもより孫の方に関心があり、孫だけでいいからうちに遊びに来て欲しい。三男の家族とは別に暮らしているので、孫たちは毎週日曜日に遊びに来るが、もう家中ごったがえして大変だが、でも家に来てくれることをとても楽しみにしている。

孫たちの成長を見守るのも楽しいが、あるとき出かけるときに一番上の孫が「おじいちゃん気をつけてよ」と言った時に、生意気を言うようになったなと思いながらもここまで大きくなったのかと思いうれしかった。いつも自分ではまだ若いと思っているが、でも孫たちの成長を見ていると「われ老いたな」と実感する。

●戦争の弊害

沖縄戦の時のことについて覚えているのは、その当時料理をする時に食用油がないので機械油を使っていたためにやがて人体にも悪影響が出てきたことや、戦火のなかを逃げる中、両足のない兵隊に出会ったことである。この時は沖縄の人全てがこのような状況の中で生活していくのに必死だったし、１分１秒をも争う状態であった。戦争での出来事というのは文字通りの阿修羅、生き地獄であり、今でも本当の現実は表現できないし、あの時の心境は伝えることができない。だから「命どぅ宝」という言葉があるが、そのことは決してオーバーに言っていることではない。

このような戦争の悲惨さを子や孫たちに二度と味あわせたくないために、一生懸命経済復興にいそしんできたが、そのために子どもたちに目を向けてやることができず、結局子どもたちは社会に出てどのように生きていけばいいかがわからなくなってしまった。だからいじめで死んだり、子どもの犯罪なども増えてきたと思う。でもそれは決して子どたちや学校の責任ではなく、みんなの責任なのであり、戦争というのはこのような表に見えない弊害も残してきたのだ。

●恵まれた人生

幼い頃父が満州事変で戦死し、母も小学校４年の時に亡くなったので、家族は姉と２人になってしまったが、その後母方の祖母の家に引き取られ、祖父がハワイで儲けてきた財産があったので不自由ない生活をした。また祖母が亡くなった後も母方のおじに引き取られたが、おじに子どもがいなかったために自分と姉を実の子どものようにかわいがってくれた。それに東京の大学に行った時も、おじの援助や教員をしていた姉の援助などもあり、そこでも苦労はあまりしなかった。そして英語が得意だったために通訳の仕事もできたし、東京から帰ってきたらすぐ放送局にも入ることができて充分な報酬も得ることができた。

このようなことを考えると身の上的には寂しかったが、でも周りの人に良くされたし恵まれたことも多かった。また性格もどちらかというと楽天的な方であり、なるようになる

という自然な考え方を持っていたので、そのような困難をものともしない性格も人生を順調に送ってきた理由かもしれない。

●定年後の生活

定年してからは老化防止や退屈をしないために家で野菜作りをしている。昔は暑い時も寒いときも1日中畑にいたが、今は少しすると疲れてくるので家に入り本を読んだり習字をしたりするけれど、また「こうしてる場合ではない」と思いまた畑に出かける。そのように昭和一けたの人たちは苦労性であり、じっとできない。

野菜は力を入れれば入れるほどちゃんと成長してくれるし、話をしながら育てると本当に思う通りに実をつけてくれるのでとても正直だと思う。野菜は農薬も使っていないので、自分や妻の友人が喜んでもらいに来るし、みんなのうれしそうな顔を見るのがうれしいのでこれからも野菜作りをしていきたい。

●人生で大切なこと

人生で大切なことは「真実」でありうそをつかないこと。特に夫婦においては非常に大事なことであり、若い頃にあったことも妻には全部話している。それはどんなことにおいても妻に不安を持たしたくないからであり、白紙のつきあいでやった方が信頼感も増すと思うから。そうすると妻の方も、今度は夫を安心させようという互いの心遣いが出てきてそれが円満につながる。結婚するまではお互い知らないけれど、それがやがて親以上の存在になり、夫婦は一つになる。そういうところを良く理解しないといけないと思う。

A.S(12138)さん

●出生～学校修了

昭和3年に5人兄弟の末っ子として生まれた。三男だった。出生地は現住所の隣の部落だった。上の三人兄弟とは9つ以上歳が離れていたし、末っ子だったので姉などにはとてもかわいがられた。小さい頃は父親の畑仕事を手伝ったり、祖母の機織り（芭蕉布）を手伝ったりしていた。小さい頃の思い出としては、畑仕事で苗を短く切りすぎて父親に叩かれたことがあったのを覚えている。また、祖母は機織りの名人だったらしく、12歳の時には祖母の作品が首里の博物館に展示されて、祖母と二人で見に行った。祖母を尊敬した。尋常を卒業して高等小にも進んだが、半年ぐらいで辞めた。次男の兄に「勉強はしておけ」と言われていたが勉強があまり好きではなかったので辞めてしまった。

●戦争

学校を辞めてから、父の元で農業をしていたが、15歳ぐらいの時に徴用があった。15日ぐらいの住み込みで城間や嘉手納へ行った。給料は15円くらいだったが、おなかをすかせてばかりいたので、すぐに芋や豆腐を買って食べた。家から出かけるときは弁当も持っていったりした。当時はご飯が糸を引くほどになっても食べた。ほかには油みそや砂糖、麦

粉などを持っていった。

17歳の時（昭和20年）に防衛隊に配属された。まだ17歳だったので防衛隊という身分ではあったが、事実上の徴兵だった。一間ぐらいの長さの竹槍を持たされたが、本当にこんなもので勝てるのだろうかと思った。防衛隊に配属される少し前から、家には5人の兵隊が本土からきて家の離れに住んでいて、防衛隊に出発するときには祝ってくれた。防衛隊では船舶特攻隊に配属されて与那原の兵舎へ行った。そこでは毎日日没後、特攻船を芋の葉などで隠す作業をしていた。特攻船に乗り込むのは海沿いに住んでいる人など海に慣れている人たちだったので、自分は乗らずにすんだ。

その後米軍の進攻とともに部隊は南に移動していき、その移動中に迫撃砲の攻撃にあって自分の部隊はちりぢりになった。当時は死ぬのならばひと思いに死にたいと思った。部隊の仲間と二人で農家の馬小屋に身を隠して数日を過ごしていたのだが、飢えてきたので昼間食料を探しに行って帰ってくるとその馬小屋は爆破された後だった。いつも昼間は身を潜めていて行動しないようにしていたのだが、たまたまその日だけは馬小屋を離れていて難を逃れられた。（本島南部の）具志頭でアメリカ軍の前線を突破できるという情報があったので具志頭に向かった。結局、具志頭でアメリカ軍に捕まったのだが、その直前の朝に偶然、家族に出会った。しかし、そのときはまだ自分の部隊は正式に解散しておらず、部隊に戻らなければならないと思い、家族と合流はしなかった。しかし、夕方になってから考え直して家族に遭遇した場所へ行ったがそこには既にいなかった。翌朝、アメリカ軍の前線基地に着いた。そのときもひどく飢えていて、朝日に光っているアメリカ軍の缶詰を見て危険を承知で盗んで食べた。食べると今度はひどくのどが渇いてしまい、とうとう我慢できなくなって、小川へ降りていって水を飲み、側の木陰で休んでいる時に、背後の丘からアメリカ人がやってきた。見つかっているのはわかっていたし、逃げられそうにもなく、捕虜になった。

捕虜となってからは、ハワイにつれて行かれてそこで働かされた。アメリカ人は捕虜のことをＰ．Ｗ．という略称で呼んでいた。切符で給料も渡されたのでたばこや石鹸、歯ブラシなどを買った。そのときハワイの店には商品がたくさんあったので驚いた。

●帰沖・新生活

18歳の時（昭和21年）に沖縄に帰ってきた。家族は仮小屋に住んでいたが、そこには父と次兄、次姉しかおらず、そのとき母親と長兄、祖母の死を聞かされた。戦争だから仕方ないとは思ったが、やはり悲しかった。姉も未亡人になっていて、やがて婚家へ帰っていった。自分たちも元の家に戻り、翌年には結婚することになった。19歳での結婚は早い方だと思う。結婚相手は、自分の消息を知った親が決めていて、同じ部落内の遠い親戚だった。結婚儀礼は実家で行った。ごちそうもなく服装もアメリカ軍のお下がりで、親兄弟との話し合いのようなかんじだった。新婚生活は実家の離れで始まった。結婚して父親に600坪の農地を分与されたが、鍋も一つしかないような暮らしだった。

●子の出生・分家

20歳の時（昭和23年）に長男が生まれた。その年に独立して現住所に移動した。それから31歳（昭和33年）までの間に長女、次女、三女、四女、次男の順で出生した。大した収入もないのに子どもばかり増えて生活は苦しかった。子どもが産まれてからは、妻が少し強くなったような気がする。生活に追われる毎日で、独身の人がうらやましかった。子どもたちのしつけについては、口には出せず、目でしつけてきた。これは父親譲りだと思う。次女の生まれた年（昭和28年）に長女は腸結核にかかり、入退院を繰り返して結局数え年で4歳で亡くなった。

子どもたちの進路についてはすべて本人次第だと思っていた。長男から三女までは中卒だが、今思えば家計の様子を見ていて進学をあきらめたのかもしれない。次男が生まれてから2，3年後（昭和37年頃）からは、建設現場にも働きに出始めた。四女と次男は高校を出た。次男は高校を出てから家を新築するまで（昭和52年まで）本土で暮らしていた。

●家の新築～子どもの独立

ハワイで捕虜として働いていた頃の給料が沖縄に帰ってきてから支払われ、そのお金で土地を買っておいたが、その土地が、高速道路を建設するために立ち退きになり、その補償金で現在の自宅を新築した。次男とは新築してから次男が結婚するまで同居した。子どもたちは皆結婚と同時に（経済的に）独立していった。長男は結婚後からしばらく同居した。長男の結婚は昭和46年の5月で、初孫もその年だった。そのときはこれが自分の孫かなあと思った。しつけはそれぞれで考えればいいと思う。子どもの結婚には出しゃばらないようにしていたが次男は結婚が遅く、早く自立させたくて心配だった。次男が家を出て世帯を持つときには金銭面での援助もした。結婚に関しては「自分で責任を持て」という気持ちだった。

三女は結婚が早かったが（17歳頃）、そのときは三女夫婦間で問題が起こり、その影響で自分も妻との関係が悪くなった。四女の結婚は昭和56年だった。その翌年に父が亡くなった。死因は老衰でとても穏やかだった。介護の必要もなかった。私も死ぬときは老衰で誰にも迷惑をかけないで死にたいと思う。

●妻の死

平成3年に妻を病気でなくした。「人間にはこんなことも起こるのか、人は結局一人なのだ」と感じた。「今のままではいけない、精神面でも変わらなければ」と思った。妻を亡くしてから建設現場で働くのは辞めた。57歳の時から心臓を患っていたので、建設現場で倒れることがあったらどうしようかと心配しながら現場に出ていたが、妻の死をきっかけに建設作業員は辞めた。次男が世帯を持って独立したのもひとつのきっかけである。心臓を悪くしたときは自覚はなく、ただ、なんだかぼーっとしていたら周りの人が心配してくれて、病院へ行ってみたら脈拍が減っていて、医者に大変なことになっていると言われ手術をしてペースメーカーを埋めた。

●現在

今も畑仕事は続けている。元気なうちは続けていきたいと思う。最近は父親の仕事ぶり

を思い出して参考にしているが、今考えると父は無学ではあったが父なりにずいぶんと工夫をしていたんだなあと思う。今でも人に雇われていた頃（建設作業員）を思い出して、時間を大切にしている。今では孫も13人になったし、妻の死後、子どもたちもずいぶんと気を使ってくれるようになった。食事につれていってくれたり小遣いをもらたっりもする。現在は長男と同居している。老後は長男が面倒を見てくれると思うが、心配がないわけでもない。やはり、死ぬときは誰にも迷惑をかけないで老衰で死にたいと思う。健康のためには早寝早起きと昼休みをとっている。心臓を患って以来、健康のことはいつも考えている。

K.N(12505)さん

●出生～学校修了

大正15年に7人兄弟の2番目・長男として生まれる。家は農家であり、長男である自分が家の農家を継ぐものとされていた。昭和8年に尋常小学校に入学。小学校卒業真近になると、学校の先生が家の畑までやってきて、親に中学校への進学をすすめによくやってきた。学校への費用は畑を売れば何とか賄えると言っていた。しかし、長男であったため、家の仕事を早く手伝わせなければらないということで親は頑として譲らなかった。その代わり次男は中学校へ通わせようと約束した。そのため高等小学校を卒業するとすぐ農業をし、次男は第2中学校へ進学することとなったのである。

●戦争時代

小学校を卒業した当時は日本が戦争へ突入していこうとする時期であり、みんなない中から各家庭、食料を一定量拠出しなければならなく、毎日芋と味噌汁の日々が続いた。昭和18年には村を代表して、全県でも50人の食料増産隊に選ばれ、茨城県に派遣されたりもした。

その後海軍に志願したが、本州にすぐ船で出かけては敵の軍隊にやられるということで、半年間（本島の北部の）ヤンバルへ避難してから行くことにした。ところが、その山道をはだしで歩き回ったのが原因で、足にできたかすり傷から菌がしのびこみ、菌炎にかかってしまう。足を数カ所切ってばい菌を出さなければならないほどだった。幸いにも治療費はすべて国が負担してくれた。

その後、病気の回復を待って改めて海軍に志願し、大阪へ行って徴兵検査を受ける。しかし、病気を煩ったことが原因で試験に落ちてしまった。当時、老人・女子どもしか戦わないことを許されなかった時代において、この不合格は大変なショックであり、痛手であった。すっかり意気消沈してしまい、何をする気も起きなかったが、家族や部落の人に会わせる顔もなく、沖縄に帰ることもできなかったため、しばらく大阪に身を寄せ、農家の手伝い等をしていた。

昭和20年に大阪で再び徴兵検査を受け、やっとのことで合格、防衛隊として宮崎県に派遣される。その後すぐに終戦を迎える。その後すぐに沖縄に帰る気にもなれなくて、本土での永住も本気で考えたりしていた。姉が自分と同様に本土に疎開してきて、疎開先で知り合った男性と結婚していたので、その姉の所に身を寄せ、姉の家族と各地を点々とし、農地開墾を手伝う代わりに寝る場所や食料を提供してもらったりしていた。

●帰沖

その頃、沖縄では父、弟、末の妹は沖縄戦で死亡しており、母親とまだ小さい弟妹しか残されていないという状況になっていた。母親から頼まれて帰らないわけにはいかなくなったので、昭和21年の12月に熊本経由で、帰国組としては最後の便で沖縄に帰ってきた。帰ってきて目に移るのは荒れ果てた原っぱばかり。もとあった農地はアメリカ軍が敷き慣らしてカチコチになってしまい使い物にならない。アメリカ軍が上陸をねらっているのは九州のはずだからと一生懸命九州を守っていたのはいったいなんだったのか。

だが、呆然としている暇はなかった。自分を頼りにしている母親と弟妹達がいた。とりあえずもとあった農地を開墾することから始めた。これからがんばらなくてはという気持ちでいっぱいであった。まずはその時人気のあったさとうきびや芋、野菜を作ることから始めた。

●結婚

昭和31年、31歳のとき、家の敷地内に間借りしていた人に紹介された女性と結婚した。結婚式は簡単に済ませた。妻となった人の実家も農家であり、家の仕事の手伝いもしていたので、農業をやることにはそれほど苦労はなかったようだ。同じ年には初めての子どもも生まれ、生活は苦しくても希望に満ちあふれた日々であった。

夫婦で一生懸命働き、砂糖きびで儲かったお金はすべて貯金に当てることにした。昭和34年には地域の人に推薦されて区長を勤める。その2年後の昭和36年にはさとうきびで貯金していたお金を頭金として、公庫からも借り入れをして家を新築する。瓦家である。

それから2年後の39年にも区長を再任、その間にもＰＴＡ活動を熱心に行ない会長・副会長を歴任するなど、公の活動にだんだん興味を持つようになる。区長の任期が終わって後の昭和47年にはＰＴＡをやっていた関係で、まわりの人に押されて保護司を任せられ、青少年の非行防止に尽力するようになる。しかしその時期にも、やはり本業は農業ということで決して仕事をおろそかにしていたわけではなかった。

●子どもの成長・自立と仕事

長男は工業高校に進学し、就職という目的はあったものの、卒業後に那覇市で知り合った女性と一緒に東京へ行き、同棲するようになる。その女性は東京へは美容師の免許をとることが目的で行ったのであった。昭和55年にはその同棲相手の女性が妊娠していることが発覚したので沖縄へ呼び戻し結婚させることにする。翌年には初孫の女の子が誕生する。長男夫婦は元家の畑があった場所に美容室を持たせることにして、店が建築中の間は実家で同居した。その間にも下の4人の子どもはみんな順調に学業を終了していった。

本業の傍らにも当校拒否の子と話をしたり、刑務所に入っている受刑者の身元引受人を探したりする保護司の仕事は継続しておこなっていた。そのほかにも村議会議員や文化財保護委員とう数々の公職にも身を置いた。こうした仕事が増えてくると夜外出が増え、酒を飲んで帰りが午前様ということも多くなる。それが普段家で姑と二人きり、後は仕事に精を出すだけの妻には不満で、時には夫の浮気を疑うこともあった。

平成3年になると、農業の将来に限界を感じ農業を引退する決意を固める。その頃はちょうど文化事業が忙しくなってきている時期でもあった。部落の一部を移動して大きな道路を通す計画がもちあがっていたのだが、その立ち退き交渉で県と部落民との間に立ち、どうみんなに一番良い方法で話をまとめられるかということで頭を痛めた。結局、話し合いはうまく決着し、道路は通ることとなったのだが、この一件は今まで生きてきたなかでも解決が大変困難だった出来事の一つとなっている。

●母親と妻、相次いでなくなる

平成4年になると、母親が発病し、もう長くないことが判明する。88歳のお祝いを終えてすぐのことであった。それからは兄弟、その家族、みんな集めての看病が始まる。結局半年後、平成5年の1月になくなる。それから息つく暇もなくその後すぐに妻が発病し、同年の6月になくなる。短い間に二人もの家族を失い、呆然とした。特に妻の場合には60歳でもらえる年金を人生80年と見越して65歳からもらうよう手続きをし、やっと年金をもらい始めた矢先の突然の死であった。これには本人もさぞや無念であったろうにと思う。

家のことはまだ35歳で家に残っている末の娘がみてくれるので、不自由はないものの、いつもとなりにいてくれた人のいない寂しさは何とも言いようのない重さでのしかかってきた。その後からはもっぱら公の仕事に専念する日々が続く。

●現在

現在は老人クラブの加入し、ゲートボールをやって月に一度は他の市町村との試合を行ない腕をふるったり、名誉職として名を連ねている会合に参加したり、保護司としての仕事をしたりと多忙な日々が続いている。家族との関係も良好で、年に一度ずつは長男家族が美容師の研修にいきついでに一緒に旅行に行ったりしている。長男の孫とも関係は良く、家は離れているものの、週末には泊まりに来て、みんなで川の字になって眠っている。

常日頃から家族とこういう触れ合いを持つことが青少年の非行を防ぐ上で最も有効な対策ではないかと最近つくづくそう思うようになった。その日の子どもたちもみんな順調に結婚してはいるが、一番気がかりなのは長男夫婦以外、子どもに恵まれていないことである。そのほかのことに関しては人生スムーズに進んできたと言えるのではないだろうか。この前はこれまでの保護司としての働きが認められ、法務省より表彰された。このことに関しては満足と言うより他にない。これからの人生の目標としては文化財のことに興味があるので、部落に残されている文化財の整理・統合、そういうものを可能な限りやっていけたらなあと思う。区や委員の仕事というのは徐々に若い人たちに世代交代していきたいと思う。健康にも恵まれているのでこれからは人と人との間に和を結ぶような働きをして

いけたらなあと思う毎日である。

T.Z(12513)さん

●出生～子ども時代

大正15年に農業を営む家庭の6人兄弟の三男として生まれた。しかし同じ年に父親は亡くなった。兄弟構成は兄が二人に姉が三人であった。父親が亡くなったため、一家の収入原は母親の双肩にかかってしまったが、母親はこの時から子どもの教育費と生活費の工面のために、農業のほかにカゴや鰹節を売る商売を始めた。この商売が結構繁盛していったために、父親が不在ながらも生活はそんなには苦しくはなかった。また兄弟総出で母親の仕事を助けるために農業を手伝ったりほかの仕事を手伝ったりと、いろいろと子どものころから労働に勤しんでいた。このころは子どもでも、家計の手助けのために働くというのは普通で、自分もそれに疑問を抱かなかった。

母親はしつけにはそれほど厳しくはなかった。しかし、長男と長女には厳しかったようであった。つまり母親は兄弟の一番上さえしっかりさせていれば、下の兄弟のめんどうは彼らが見るということを期待していたようであった。こういうふうに母親は子どもの教育に関しては、あまり関心があったとは思えない。そのせいか、自分は進学に関しての希望はなかったし、また母親とも話す余地はなかった。しかし小学校時代はいろいろな思い出があり、また大きなケガをした時期でもあった。昭和8年に、彼は友人と鬼ごっこをしていて他人とぶつかり足を骨折。その後、約一年間休校した。

その翌年、昭和9年に母方の祖母が死亡した。この祖父母からもどちらかというと少々甘やかされていた。しかもそれは母方の祖父母だけではなく父方のほうも同じようなものだった。昭和13年に小学校を卒業した。その次の年から働き始めたが、そこは親戚のおばさんの農地であり、どっちかというと手伝いみたいな感じだった。

●初離家

その翌年、昭和15年に兄（長男）が戦地に赴いて戦死。同年父方の祖母も死亡。昭和18年、17歳のとき、徴用で滋賀県の軍需工場へいった。これが初離家である。この工場では紡績関係を営んでおり、そこで工員として働いていた。そこで約一年間働いた後、大阪の造船会社に替わった。そこは前の職場の親方にあたる方からの紹介であった。半年ほどここで働いていたが、同年、兵役で和歌山に行き、そこで入隊することになる。昭和19年のことであった。その翌年、昭和20年に姉（長女）が沖縄戦で死んだ。

そのころ、宮崎県に壕を堀りに出かけた。壕を掘る理由というのが、聞かされた所によると本土決戦に向けての準備だったという。そのころ、壕を掘っている最中に落盤事故が発生し大きなケガをしたのだが、そのときに胸の中に不純物が入り込んだまま傷の手当をしたために現在も病院の検査などで引っ掛かることがよくある。そのために不利益が生じ

たことも何度かある。

●終戦後

終戦後、沖縄に帰るまでの間、農家に臨時で雇ってもらい、そこでしばらく働いた後、21年に沖縄に帰ってきた。その後、今の部落に戻り米軍基地で働いた。だが、収入が少なく（月100円程度）あまりよ好きな職場ではなかったが、当時はそこしか働く場所がなかった。

●結婚以後

翌昭和22年、昔から近所に住んでいた女性と結婚。結婚の儀礼は何もなく、結納さえもしなかった。結婚当初からトタン屋根の住居ではあったが、家はあった。母親は兄（次男）がめんどうをみていた。結婚2年目（昭和23年）に初子（長男）が生まれたが一カ月後に死亡してしまった。当時は食糧難の時代で、人生の中で一番生きていくのが困難だった。

翌昭和24年、23歳のころ今まで働いて来た基地の輸送部隊の仕事を辞め、近所に住んでいた人の紹介で、貿易会社に就職し住居も那覇に移した。そこでの仕事はリフトカーを運転し荷物の積載等であった。ここの職場は収入もよく環境もよかった。そして昭和25年、24歳のとき戸籍上ではあるが長男が生まれた。それから2年後、昭和27年には次男が生まれた。

●バス会社に転職

その年に貿易会社が解散して仕事を失ったので、また同じように近所の人からバス会社への就職口を見つけてもらった。そこでの仕事はバスの運転手であった。収入の方は以前と比べると悪いのだが、仕事は悪くなかった。しかし、社内の健康診断で、以前壕を掘っていてうけた傷が元で約2カ月ほど休職をするはめになってしまう。胸の中の不純物がレントゲンで撮影されるときに、影となってあらわれ結核と診断されたからである。しかしながら自分は至って健康であり、結核などではなかった。こういうことは現在になったもよくあることで、今では事前に医者に知らせている。とにかく、そう言った関係で休職するはめになった間、母親から少しばかり生活費の援助を受けた。離家後、親との経済的援助と言えるものは後にも先にもこの時だけである。このときの家族構成は、夫婦に子ども2人と典型的な核家族だった。このまま昭和39年までは何も大きな変化はなかった。

●自営業を始める

昭和39年、38歳のとき三男が生まれたが、家庭の経済はこのままの状態じゃやっていけなかったため、バス会社を辞めて、砂販売を始めた。翌年、長男が本土へ就職するため、離家した。長男は半年間、大阪で職探しをした後で沖縄に戻って来て銀行へ就職した。住まいはアパートを借りた。

●家族の変化～現在

2年後の昭和42年、母親が死亡した。老衰だった。母親が弱っている間は、兄（次男）がめんどうを主にみていた。母親は結構、長生きしていたので安らかに眠れて良かったのではないかと思う。同年、次男が自営業を始め、また四男が生まれた。この年は幸と不幸

がいっぺんにやって来たような年だった。家族構成は夫婦に次男、三男、四男になった。

昭和 46 年に長女が生まれた。その翌年、昭和 47 年に現在の住所に家を新築した。その翌年、昭和 48 年に次男が結婚。結婚するときに、事前に子どもからの相談はあったが、別に反対する理由もなく快く承諾した。また翌年次男夫婦は家を出た。同年初孫が生まれた。そのときの感想として、自分も年を取ったものだと、感慨にふけった。

昭和 53 年に三男が高校を卒業し、一年間調理師学校へ通い、就職した。昭和 57 年には四男が高校を卒業し、その後自営業を営んでいる。この三男と四男は卒業後も離家はせず、そのまま一緒に暮らした。平成２年に長女が高校を卒業して、そのまま事務関係に就職した。その翌平成３年には四男が結婚してアパートで新生活を始める。平成４年にこれまで営んできた砂販売業を廃業した。仕事がなくなってきたためというのが理由である。これ以降、彼は清掃員のアルバイトをしながら現在に至る。

孫の顔もほとんど毎日見ることができるので、今の生活に不満はない。自分のこれまでの生活レベルは高いほうだと評価できるものだと認識している。今の楽しみには、旅行と近所の友人と昔を語ることである。母親と同じく、自分も長生きするものだろうと考えている。

C-Ⅰ女性

A.F(21013)さん

●小さい頃の家族環境

大正５年に、５人きょうだいの４番目、次女として、農家に生まれる。当時は土地がなかったので小作で生活しており、貧乏だったという。家族との仲は良く、部落の協議などでまとめ役であった父に対する信頼はとても厚かった。母には女性の生き方を教わったりもした。仕事先で好評だったマッサージを両親にしたりと親孝行な子どもだった。祖母とは特に仲が良く、昭和５年に祖母が亡くなったときは涙が止まらなかった。祖父は自分が生まれる前に他界していた。きょうだいとの仲も良く、特に姉には産婆学校時代に授業料をだしてもらったりもした。

●学校時代

小学校時代、大正 15 年の天皇崩御のときは、全校生徒が腕に紋章をつけてうつむきながら歌った。昭和４年（13 歳）に高等小に進学し、昭和６年（15 歳）に卒業した。学校では読み方、算術、歴史、地理、修身教育を学んだ。当時は公民館がなかったので、大きなお屋敷で、年に１回学事奨励会が開かれていて、そこで読み方、算術の試験を行っていたが、平均点数 90 点以上を取る生徒は部落で自分１人だけという模範生だった。このことを母に知らせると涙を流して喜んでくれ、赤飯を炊いたり、砂糖天ぷらをつくって、仏壇にお供えし、家族で祝った。また、高等２年のときには、組で２人しかできなかった馬っ子跳び

12段を跳んだこともあった。学校では毎朝、先生が生徒を立たせ、「真実なき人生は罪悪なり、汗なき人生に光なし、いざ青空さしてすくすくと伸びん」と号令をかけさせたので暗記してしまうほどだった。

高等小を卒業後、産婆になりたかったので産婆学校への進学を希望したが、親にお金がないと反対された。が、親に黙って試験を受けたら合格し、養蚕の仕事をしていた姉に3カ月分の授業料をだしてもらった。産婆学校時代には、人体構造を学んだりしたが、年齢的に若かったので、出産などを見届けることが出来なかったり、試験の多さと先生の性格の悪さに嫌気がさし、学校を辞めることを考え始めていた。このとき、部落の役員に、授業料も出すから学校を辞めずに勉強するよう説得されたが、試験のために苦労するよりは、農業をして夜は公民館で部落の若者と遊びたかったので、3カ月で産婆学校を中退した。

●就職、結婚

産婆学校を中退し、昭和7年から家族がやっていたムシロ織りを始めることにした。翌昭和8年にキビしぼりを手伝ってくれと言われ、夏季はむしろ織り、冬季はキビしぼりに勤しんだ。が、キビしぼりよりもマッサージが好評だったので、マッサージで日当30銭を稼いでいるようなものだった。キビしぼりで稼いだお金を母に渡したら涙を流して喜んでくれた。この頃、母の知り合いでムシロ織りをしていた義母から夫となる男性を紹介され、皆の賛成のもと、昭和11年に結婚。披露宴は自宅の仏壇の前でおこなった。花嫁衣装はなかったが、嫁ぐときには着物をもたされ、ジーファー（かんざし）をして嫁いだ。結婚を機に、ムシロ織りとキビしぼりを辞め、嫁ぎ先で家事をしながらさとうきび、芋、野菜作りを手伝った。

●結婚生活、出産

嫁ぎ先は部落一の大家族で、家事、農業、家畜の世話などでとても忙しく、実家に帰ることもできなくなった。子どもは全部で4人、昭和11年に長男が生まれ、昭和13年に次男、16年に三男、そして19年に長女が生まれた。家事の忙しさに追われ、子育てまで手がまわらなかったので義父に見てもらった。夫はのんびり屋な性格であるのに対して、自分はせっかちな性格で、夫との相性は良く、1度も喧嘩したことがなかった。

●沖縄戦

昭和20年、戦争が激しくなるにつれて、夫への白札召集も多くなり、ついには赤札で召集され、夫はそのまま行方不明になってしまった。自分は役所の人に説得されて次男、三男、長女を連れて（本島北部の）国頭村に疎開することにした。7歳以下60歳以上という制限があったので9歳の長男を連れていくことはできなかった。また、義父母は疎開を拒み村に残ったが、手榴弾を投げ込まれて即死した。長男も亡くなった。父母は疎開先で栄養失調で亡くなった。生まれたばかりの長女は病死してしまい、次男、三男を連れ、生きることのみ考えていた。が、自分もマラリアにかかってしまい、髪が抜けたり、40度以上の高熱にうなされた。昭和21年に収容所に移されたが、マラリアも治っておらず、生活環境もひどかった。マラリアは2、3カ月で治りはしたものの、暗算力と記憶力が悪くなっ

た。家に戻ってきたのは、昭和22年になってからだった。

●戦後の生活

昭和20年の沖縄戦で夫を失ってからは、女手一人で那覇の市場に出かけて生計を立てた。子ども達の生活や将来のことを考えると、より多くの収入が必要だったため、昭和26年から、午前中は保育園で保母をして、午後には農業をした。この生活を昭和34年まで続けたが、三男が「自分が働くので辞めろ」と言ったので、保育園を辞めることにしたが、自分の仕事ぶりが良かったので引き留められもした。保母は辞めたものの、農業は昭和45年(54歳）の仕事先（市場）での事故で辞めることになるまで続けていた。長い間一生懸命働いてきたので、過労がたたり足腰を痛めてしまった。昭和61年から約3年に渡り、次男夫婦の豆腐屋を手伝ったこともあった。

●子どもの就職、結婚、孫の誕生

次男は昭和29年に中学を卒業して学業を終了し、翌30年に大工になった。昭和31年には夫の公務扶助金を受け取ることができたので、三男を高校まで進学させることができた。三男は昭和37年に高校を卒業すると、同年役場に就職した。昭和44年には三男に娘ができ、初孫の誕生に喜んだ。昭和45、46年と続けて次男、三男が結婚し、次男夫婦とは昭和45年から現在まで同居している。平成5年にはひ孫も生まれ、9人の孫と、4人のひ孫にかこまれている。

●現在

現在は、週3回のデイ・ケアでみんなと会って楽しむことを生きがいにし、また、ときどき訪ねてくるひ孫の相手をしたりと、長寿を楽しむA.Fさんが人生で大切なことと考えるのは、思いやり、感謝、反省であり、正直であって、また健康で楽しく長生きすることである。

O.M(21019)さん

●生い立ち

大正6年に、50代の父と43歳の母との間に、3人きょうだいの真ん中の長女として生まれた。父は優しい人だったが、母親は厳しかった。2歳年上の異母姉がいたが、母はこの異母姉には比較的優しかった。2歳くらいの時に、父方の祖母が亡くなったがあまり記憶はない。大正10年、4歳の時に弟が生まれ、幼少期は、父・母・兄・異母姉・本人・弟の6人家族であった。

生家は豆腐作りと農業をしていた。主に豆腐作りで現金収入を得、家族が食べる分の野菜などを畑で作っていた。両親は勉強しろとは言わず、親孝行と読み書きそろばんができればよいという考えで、豆腐のにがりとなる潮水を汲みに行ったり、水汲みをしたり、焚き付けを拾いに行かされたりした。そのため学校にあがっても机に座って勉強したことは

なかった。

●学校卒業後

13歳で尋常小学校を卒業してからはすぐ家の豆腐作りの仕事を手伝った。もっと勉強したいとも思ったが、あきらめるよりほかなかった。今のご時世のように、勉強しろ勉強しろと言われていたらもう少し良かったのにと思う。豆腐屋は学校に通っている間も手伝ってはいたが、学校を出てからは「大人並み」に働いた。昔はみんな手作業なので、豆を絞ったり、挽いたり、親の加勢を兄弟みんなでしていた。特に弟はおからを揉むのが上手だった。やがて異母姉が結婚して嫁に行き、兄が兵役で出征し、一家の働き手が少なくなった。兄が出征したとき自分は16歳、弟が13歳だった。そのころ家には馬車を引かせる馬があった。兄が出征したので引き手のいなくなったこの馬を父が売ろうとしたが、弟が学校をやめて馬車引きをすると言って、弟が馬車引きをして家計を助けるようになった。砂糖の取引所に弟が馬車を引いていくと、子どもの馬車持ちが来るといって、取引所にいる人たちが出てきて加勢してくれた。親への孝を積むためと、苦労はしたが上等だと思っている。

●結婚

18歳で結婚した。夫は小学校の同級生で、お互い良く知った仲だったが、結婚は親同士が話し合って決めた。当時箪笥は金持ちの家にしかなく、自分は行李のようなものに着物を詰め、普段着に糊をつけて嫁入衣装にした。婚家でも豆腐作りをしていた。そのほかにも砂糖作りや自給自足用の畑仕事もしていた。結婚後は義父と義母、嫁ぎ先から実家に戻っていた義姉とその娘・息子、そして自分夫婦の共同生活であった。義父母や義姉との仲は良く、一緒に家の仕事もしていた。ただ、5つ年上の義姉は実家にいる気安さで、自分の思うとおりに仕事をしていた。朝晩2回の豆腐作りの仕事を、朝は義姉が、晩は自分が、それぞれやっていた。そのころ豆腐の売り上げは日に14〜5円ほどあったが、それは義母が管理していた。

●夫との生き別れ

夫はおとなしい、優しい人であった。だから一切喧嘩はしなかった。ただ、結婚してすぐに夫は兵役で家を空け、あんまり長いつきあいではなかった。夫は子どもを作るときだけしかいなかった。夫婦らしく暮らしたのは、除隊後のわずか3年だった。そのせいか、夫は優しかった。19歳で長女を産んだ。そのときには夫も年が若いので、長女の名前は義父がつけた。長女が生まれてすぐに夫は支那事変で出征した。24歳になった時、夫が除隊になり、これから約3年の間、騒がしい世相ではあったが、夫婦らしい生活を送る。25歳で長男を産み、このときは夫が名前をつけた。27歳の時には次男を出産した。しかし、次男を妊娠して7ヶ月目に夫はふたたび招集され、二度と戻らなかった。夫は沖縄本島中部で中隊長をしていたらしい。夫と一緒だったという別の部落の人の話では、二人で逃げようと話を持ちかけたが、兵役で軍隊生活を経験していた夫は逃げてはいけないと言って、それっきりになったということだった。夫が見ることのなかった次男とも、沖縄戦で別れ

別れになってしまった。二人ともおそらく生きてはいない。夫が兵役で出征してからは、男に混じってユイマール（共同作業）に参加してあちこちの農作業を手伝い、働いた。

●沖縄戦

昭和19年10月10日に那覇を中心に大空襲があった。このころから砂糖や豆腐が売れなくなってきた。空襲後は砂糖の買い手もつかず、一樽に100斤（約60キロ）ずつ詰めた砂糖が家の中に溢れるようになった。軍の勤労動員にかり出され、豆腐作りもあまりやらなくなった。壕堀りにも参加させられたが、子どもがいるので加勢程度だったという。家の裏側の丘には軍の壕があった。24坪の瓦家のうち、陣地に近い山手側は軍の竹部隊が借りて、一家は残り半分で生活していた。売れなくなった砂糖で餅を作って兵隊に振る舞ったりもした。「日本の兵隊の世話はたくさんした」と思っている。

那覇が大空襲があった時、家の裏の丘から那覇市内が焼ける様を見ていた。この時次男を身ごもって妊娠9カ月目だった。このままでは家も何もかも焼かれると思い、墓を開けて避難場所にしてそこで出産しようと思っていたが、その後しばらく空襲がなかったので、翌11月に家で次男を産んだ。出産後1ヶ月もたつとまた空襲が激しくなり、あらかじめ掘ってあった防空壕へ避難した。昭和20年4月に沖縄戦が始まった。防空壕を日本軍に取り上げられたので、一家は島尻（＝沖縄本島南部）の喜屋武・真壁（現在の糸満市）あたりまで逃げた。逃げる際、長男と義姉の子を連れ、長女は次男をおんぶしていた。しかし、当時9歳と、まだ幼かった長女にとって次男をおぶって逃げるのは大変なことだった。疲れてしまった長女は、一緒に逃げていた義姉に次男を預けた。それが次男との別れになった。艦砲射撃が激しくて、最初は一家で一緒に逃げていたつもりが、いつのまにか、ちりぢりばらばらになってしまったのである。そうして逃げていった島尻も戦場になっており、どうせ死ぬなら自分の壕でと思い、自分の部落の近くまで戻ってきたところで米軍の捕虜になった。捕虜になった時、迫撃砲でやけどを負い、髪の毛は砲火に焼けて無くなっていた。その日は6月20日頃だったと記憶している。南部の日本軍が全滅する3日ほど前のことである。一歩歩いたら死ぬかもしれない、生きのびられるとは思わない、どこで倒れて死ぬか、戦争はそんなものだ、逃げている最中はそういう心持ちだった。今になって見ると、戦争でけがをしても生きて良かったなあと思う、こんなにたくさんの孫達も見られたのだから。

●終戦後

米軍の捕虜になり、沖縄本島北部にある捕虜収容所に連れて行かれた。収容所では、住まいは仮小屋とテント、食事は大豆や小さなおにぎり程度だった。肩にやけどをしていたので、半年間そこの野戦病院で治療を受けた。なかなか傷は良くならなかったが、医者が腰から肉を切り取って肩にくっつけたら1週間で治った。そして昭和20年の暮れ、自分の村へ帰ることができ、昭和21年の正月は自宅から3キロほど離れた部落で迎えた。正月と言っても何にもなかったが、アメリカ軍からの配給の缶詰や、自分の村だからお芋も自由にたくさん食べられてほんとうに嬉しかった。しばらくの間はその部落から自分の部落に

通って復興作業をしたが、治安も悪かったのか、それは大変だった。特に「黒ンボ」（黒人兵）が来ると男達は道具を放り投げて、女達を守った。

自分の部落に帰ってくると、字の住民は公民館の近くに固まって住んだ。離れたら黒人兵に襲われるという恐怖感があったからだ。それから各戸順繰りに若者がユイマールで家を建て直していった。とにかく戦後は座っている暇もなかった。畑に芋を植え、その時にスコップで体のあちこちにけがをした。戦後一年ほどして、戦争中の傷が悪化したこともあったが、何とか健康を回復した。だが、自分の体をどうこう言っている余裕はなかった。夫は還らず、義父母の他に、再婚して出ていった義姉の娘と息子、自分の長男長女を養うことになった。実家の方も、戦争で兄が、昭和22年に父、27年には母が死んだので帰る家もない。もっとも、「嫁ぎどころは死に所」と親に言われていたので帰るつもりもなかった。夫もいないのに自分が家族の面倒を見ないでどうする、そんな気概もあった。再婚話もあったが、子どもも二人いるし、再婚して子どもをまた産んでもあまり面倒を見きれないと思い、断った。また、支那事変から復員してきていた弟は、「結婚しろとも、結婚するなとも、誰もそんなことは言えない。これは本人の意志次第だ」と言って、干渉はしなかった。義姉の娘はこの家から嫁にやり、息子の方は彼が37～8歳になるまで同居した後、彼の父親の家督を継ぎ、離れていった。

●家の新築

昭和28年ごろ、義父の名義で家を建てた。自分の部落に戻ってきて、すぐに再開した豆腐作りで稼いだお金を建築費用にあてた。戦争が終わってからは、戦前に豆腐作りをしていた人以外も、現金収入を得るために豆腐作りをしていた。近所の学校の先生までもが豆腐作りをして、子どもに豆腐売りをさせていた。できた豆腐は那覇まで売りに行った。那覇では坂道沿いに物売りがたくさん並んでいた。子どもを食べさせるために、とにかく働いた。朝晩、豆腐作りをした。盆正月には豆腐の注文が多く、大変だった。また盆には餅を作る餅米を挽いて売ったりした。このころ家事は義母に任せて、もっぱら自分が稼いだ。自分の気持ちとしては経済的にあんまり良かったっということもないし、悪かったということもない、並みの暮らしだった。お金が無くても貸し手がたくさんいるから苦しいという時はなかった。持ってきてまで貸す人もいたから、あまりお金は困っていなかった。みんな、借りてもまたさっさと返すし、自分の儲けだけでやりくりしているので苦労はなかったと思う。

●子どもたちのこと

子ども達は厳しく育てた。長男がけんかに負けて泣いて帰ってくると、叱りつけた。長男は門の傍らに立つ木の下で涙をこらえ、泣きやんでから家に入ってくるようになった。父親がいないからこそ、子どもをたくましく育てたいという気持ちがあった。だが、一方で、生活に追われて勉強ができなかったために、学問がなく難儀な仕事をしている自分のことを思うとき、子ども達にはそんな思いをさせたくない、自分には学問の加勢はできないがお金の加勢ならできる、子ども達の勉学のためと働いた。そうした母の気持ちを察し

てか、長女も長男も自分に反抗したことがない。子ども達はもう50代、60代になっているが、今でも自分の口にはかなわない。

長女は高校を出て、看護学校に進み、今ではある総合病院の副院長をしている。看護学校を出てからは、長女は自分で自分の生活を切り盛りしているので、そのことだけで親孝行になっている。その長女は病院で現在の夫と知り合い結婚した。長女が嫁に行ったと言っても、看護学校に通う頃から分かれて暮らしていたので、家にはあんまり来ないのには慣れていて、あんまり寂しいとは思わなかった。結婚してからは、仕事もあるのであまり来ないが、盆正月や用事の時には電話したらやって来る。けれども休みになったら長女も自分の孫も見ないといけないはずだから、あっちこっち忙しいようだ。

長男は高校を卒業して、当時沖縄本島北部の名護にあった英語学校に通った。そして、そこで見た養豚業に目を付け、帰ってきてから自分で開業し、いまでは隣村に養豚場を構え、800頭もの豚を飼育している。長男は結婚後も自分と同居している。同居してからは、生活費は長男夫婦が稼ぎ、帰りの遅い夫婦に代わって、そのお金で自分が買い物をし、家事をするという生活である。長男と嫁は夫婦仲も良く、また自分にも良くしてくれる。特に嫁に関しては「こんないい嫁さんはいない」と思っているが、本人に面と向かってそうは言わない。だが、部落の人みんながあそこの嫁さんは優しいと知っていると思う。

長女が結婚した翌年に初孫が生まれた。その時は夫がいたら良かったねえーと思った。今は本当に戦争が終わって良かったな、と思う。けがはしてももう、命だけあるからいいと思っている。その初孫も入れて長女は3人、長男は5人の子宝に恵まれ、自分は8人の孫のおばあさんとなった。曾孫も3人見ることができた。曾孫に関して言えば、自分が生きているうちに四代見たなーという感慨はあるものの、離れて暮らしているし、自分の仕事に気を取られて会う機会も少ないので、あっちはあっちという感じである。女は結婚したら、婚家の両親の面倒をよく見なさい、こっちは嫁さんが見るからいいよと、長女にはそう言っている。同居している長男の子どもたちには、「あんたがたのお父さんは偉いよー、子どもをみんな大学出してるんだから。」と、長男がいないときにそう言い聞かせている。長女の子ども達はすっかり成長して自分の家庭もあるのであんまり来ないが、清明祭（旧暦4月末から5月頃、墓前に一族が集まって先祖を供養する行事）、旧盆、正月といった行事には遊びに来る。そんなときには曾孫にお年玉をあげたりする。孫がたくさんいると楽しみでもある。

●引退後の生活

60か65歳ぐらいから部落の役員をしていた。その頃に、人に誘われてゲートボールを習ってやり始めた。まだ目も勘もさえていたので、よく1番2番になったりした。それで仲間もたくさんできたし、楽しみでもあった。が、楽しみは楽しみだけれども、人がプレーするのをやいのやいの言い合うので、負けず嫌いな自分は最近ゲートボールに行かなくなった。

ゲートボールを始めるようになった頃から、那覇まで行って豆腐を売っていたのを、近

隣の店に卸すようになった。そこの店の人たちには兄弟のように仲良くしてもらった。

平成元年、数え73歳の成年祝いを迎えた。還暦祝いは忙しくてできなかったので、今度は身内だけででもやろうかと思っていたが、大勢客がやってきて祝ってくれた。その時に長男がもう豆腐作りはやるなと言っていたので、もうちょっとはやってもよかったと思ったが、そのまま豆腐作りから引退した。今となっては寂しい気もする。この頃から大きくなった孫達と食事の好みが合わなくなってきたので料理はあまりしなくなった。銀行や農協には自分で行ってはいるが、ここ一年ばかりは足も悪くなってきた。いつ頃からか何もできないようになるのかねえと思うこともある。だが、若いときはわさわさ働いてばかりいて、足を置く暇もなかった。今はもう何もやらないで、嫁や孫達がやるだけでいいとも思っている。これまでの人生でもう何もかもやったような気がする。孫達がおりこうに育てばそれで何も言うことはない。

K.A(21051)さん

●出生について

大正5年に親の出稼ぎ先のハワイで生まれた。きょうだいは男が2人、女が3人であり、1番目に生まれた長女である。ハワイにいたのは3歳くらいまでで、まだ小さかったためその時の環境などは覚えていない。

●戦前の苦労

家が農家だったため、芋の供出があり、芋を切り干しして出していた。この頃は働き手がいないので共同作業であり、忙しい時には誰かが手伝いに来てくれたこともあった。

●機織り

若い頃は遊んでばかりいたし、またお金も欲しかったので、何か仕事をしようと思い、学校を卒業してから結婚して子どもが生まれるまでの間、機織りをしていた。賃金をもらったら、いくらかは親に渡していた。仕事は楽しかったし、とても充実したものだった。

●結婚

昭和10年に結婚。夫の家とは隣りどうしであり、お互い顔は知っていたが、話したことも遊んだこともなかった。だから結婚は親どうしが認めて決まった。式は、ゆかたを着て友達を呼んで挙げた。最初、夫の両親と一緒に同居し、毎日農業の生活だった。昭和13年に長女が生まれた。15年に夫が兵隊に応召、昭和21年に帰ってきてから夫婦だけで暮らした。

●子育てについて

子どもは女4人男2人の6名で、夫が兵役に行く前に長女が生まれ、それから夫が帰ってきてから、あとの5人が生まれた。だから子育てが終わったのが60歳近くで、それまでは忙しくて大変だった。仕事をする時にも、子どもたちを前にも後ろにも体に結びつけ、

またおんぶしたりして汗をかきながらした。また長女を出産したあと、しばらく年数が経ってからあとの子どもたちを産んだので、末子が生まれた時はすでに40代になっていた。だから次男（5番目に生まれた子）の父兄参観日のときなど、他のお母さんに比べて年をとっているので、「来ないで」と言われたこともある。子どもには、健康に、また素直に育ってほしいと思っていた。

●子どもの進学

次女と三女と四女が本土の音楽大学に進んだ。昔は生活も苦しく大変だったが、夫が小さい頃は親の手伝いばかりさせられてあまり好きなことができなかったので、子どもたちが望むのなら進学させなさいと言ってくれた。また長女も、本当は進学したかったがその頃は余裕がなく進学できなかったので、妹たちには進学させてほしいという願いがあった。そのような家族の応援や生活にもゆとりが少し出てきたために、子どもの希望を尊重して大学まで行かすことができた。

●昔と今の生活の違い

昔の人は朝起きると、まずさとうきびの古葉（さとうきびの下の方にある枯れた葉のこと）を燃やした。また朝ご飯もなく苦労して財産を求めた。でも人間関係はとてもよく、もめごとといったものもなかったし、楽しく暮らすことができた。このようなことを言うと、今の人は「自分たちは人付き合いは大変なのに」と言うが、それはわがままをしてきているからである。また、めずらしいものやきれいなものなど、いろんな物をたくさん持っていると、「物がありすぎる」と言って捨てられたりもする。昔の人は何もないから物を捨てるというのは大変惜しいものだったし、だからこそ物を手に入れるのも食べるのも、人一倍働いてがんばった。そのように考えたら、昔の人は何も食べず、物もなく、ただひたすら働いていたので、本当にかわいそうだと思うし、このような昔のことは今の若い人たちにはわからない。

それに今の人はすぐ離婚をしたりするが、昔の人、特に女の人はがまんが第一だったので離婚なんてしなかった。今は結婚相手を選ぶ際にただ見かけだけで判断する女性もいるが、自分たちの時代には、子どもは親の背中を見て育つものであり、結婚する時にはまず親を見なさいと言われた。

●音楽の趣味

音楽がとても好きで、昔はオルガンを少し弾いていたし、学校時代に習った歌も全部知っている。また家に娘のために買ったピアノがあるが、本土にお嫁にいったために使う人がいなくなってしまったので、たまに弾いて遊んだりする。でも楽譜の読み方だけでも習っておけばよかったと今では思う。

●夫婦2人の生活

今は国民年金などもあり生活も安定しているし、身の回りのことも自分でできるので、夫婦2人で仲良く暮らしている。たまには子どもたちから電話がかかってきたり、また夕飯を持ってきてくれたりして家族そろって食べたりする。でも今後子どもたちと同居の予

定はない。

●家屋の変遷について

戦前の家は戦争のために消失したので、ほったて小屋を建てた。そしてその次にかやぶきの家を建てたが、かわらをのせようとしてかやをひっぱったら白アリが発生しているのがわかって、土台から全部こわすことになった。それで昭和31年にかわらぶきの家にして、その後昭和53年に現在の家を建てた。その頃は6名の子どもたちを育てていたのでとても大変だったが、公庫で借りて現在の家を作った。

●戦争について

戦争の時は戦火を逃れるために南部を一周した。弾が落ちてきても当たることもなく土だけをかぶり、幸い無傷だったが、逃げる途中で死んでいる人をたくさん見た。あの時はあっちこっちに死人がいて、家族が死んでも涙も出なかったという。そのような中で、一体いつ、どこで死ぬかわからないし、この時は本当に命を惜しまなかった。今思うとあの時死んでいった人たちは本当にかわいそうだと思うし、沖縄の人はみんな同じ気持ちだと思う。

●これからについて

毎年衰えは感じるが、できれば100歳までは生きたい。それに夫婦そろって80代というのは幸せなことであり、また子育てを終えて国民年金をもらうようになってから借金もなく生活にゆとりも出てきたので、今のように幸せで、夫婦元気で仲良く暮らしていきたい。

●大切なこと

健康が大切であり、そのために体操をしたりして積極的に体を動かすようにしている。また人間というのは生きている間は完成するものではなく、常に何かを学ぶべきであり、勉強に終わりはないと思うので、週に1回は公民館に行き、そこで習い事をしたり友達と話をしたり、体操を習ったりしている。

G.H(21060)さん

●子どもの頃

大正6年、農家の6人兄弟の長女として生をうけた。貧しい当時であったため、食べて行くのに苦しく、親は彼女を幼いころより教育よりは労働を優先させていた。また、兄弟のなかで一番上であったためよく面倒をみていた。また、兄弟仲はよかった。祖父母も彼女をよく、かわいがってくれていた。両親ともこのころは仲はよかった。

大正9年に母方の祖母が死亡。当時彼女はまだ3歳であったため、このときの記憶は余りない。昭和5年になり、彼女が13歳になったころ、家計を助けるために機織りをする。これが初めての仕事といえるが、どちらかというと家の手伝いみたいなものであった。また進学に関しては、本人に希望があったにもかかわらず、家庭の事情から断念せざるを得

なかった。当時、尋常小学校より上に進学できる人はかなり恵まれた人であり、自分のような境遇の人は少なくなかった。それに付け加え、父親が大工であったため、かなり頑固でそのころの彼女はよく父親に反発していた。

●父の再婚～離家

昭和7年の3月、15歳のとき母親が死亡。それから半年後に父親はいとこの女性と再婚した。自分はこのことに不満で、継母とも父親とも仲が悪くなってしまった。このころから彼女は家を出て行くことを考え始めたが、ちょうどその翌年に親戚のおじさんが内地からきており、そのおじさんの後をついていって、逃げるように大阪へ出ていった。これが初離家であり、また初の経済的独立でもある。

●初就職

その後、大阪で半年ほど職を探していたのだが見つからなかったため、大阪の友人の紹介で近畿地方の繊維工場に就職した。そこから名古屋へ勤務地が変わり、そこで女工として紡績工場で働いた。そこで16歳のころから22歳までの約6年間勤めた。当初、給料は月に3円と決して高いものではなく、生活は結構苦しい方であった。仕事は充実していた。月給も徐々にあがり、最終的には月28円をもらうまでに至った。その間、彼女は親に仕送りらしきことはしていない。その代わり、弟たちに衣服を送ってやったりしていた。しかし、沖縄に戻った後には親に200円程度の援助はしていた。

●帰郷、結婚

昭和14年、22歳になった年に沖縄へ帰郷した。その理由は親からの結婚の催促があったからで、その度に紡績工場の責任者から昇給を条件に引き留められたが、年齢が重なって行くと両親に悪い気がして戻ることにした。

結婚の形態はお見合いであったのだが、沖縄に帰ってくると、両親が既に結婚相手を決めてあって半ば強制的に結婚させられた。両親がこの結婚相手を決める際に重要視した条件は、相手方の先祖の善し悪しであったという。自分はこの結婚には乗り気ではなかったが、まわりの友人はみんなすでに結婚して自分は晩婚になっていたので文句もいえなかったこともあり、またこの結婚相手もいい人であったため流されるように結婚した。結婚儀礼はとりあえず式は挙げたのだが、それは自分の家で行い、披露宴もまた親戚のみで、ままごとみたいなものだった。このときの参列者は自分の方の親戚のみで、相手方は別に披露宴を行っていた。

●結婚後の生活

結婚した後、夫の両親と同居することになる。実際には彼の兄夫婦が両親と同居しており、兄夫婦は母屋に両親とともに暮らして、彼女たちの夫婦は母屋から離れたところに立てられた家で生活を行っていた。結婚・入籍をした年に長男が誕生。その翌年に夫は戦争へ出征して行った。結婚後、婚家で農業をやったが、これは一家総出で行う家の手伝いであった。このときの同居人は兄夫婦や姪っこなどを含めて総勢17名もの大家族であり、またみんな仲も良かった。

●戦争、夫の戦死～再婚

昭和17年に夫がソロモンにて戦死した。が、この時はその知らせを聞くことはなく、知り得たのは死亡から4年たってのことであった。昭和20年、沖縄戦で、実父、父方祖父、きょうだい（次男、三男、三女）が死亡した。自分は夫の家族とともに避難をしていたが、避難先で動物の罠にはまって指を切断してしまった。そのときの治療はアメリカ軍の救急隊にしてもらおうかとも考えていたが、敵に恥をさらすことはないと考え民間療法で治療をした。

その翌年、戦争の災難から一段落した後、これまでいた家を出ることになる。自分の夫が死亡したことを知った後、夫の兄から、これからはみんな一人でやって行くように言われ、これまでいた家を出なければならなかった。彼女は一人息子を連れて最初は自分の兄（長男）の家を頼っていたのだが、いつまでもそこにいるわけにもいかず、親戚の家を転々とした。仕事はおばさんの家で家事などを行い、その収入は食べて行くのにやっとの程度のものであった。

そのような生活が昭和30年まで続き、38歳になったころ、近所の同じように妻を亡くした方と再婚した。もともと近所に住んでいた人だけに情報はすべて知っていたし、またこのままでもいけないと考えていたため、周りの反対もなく再婚をした。しかし、再婚するにあたってこれまで育ててきた16歳の長男を、前夫の実家に預けなければならなかった。当時の考え方として、女性の方の連れ子はあまり好ましくなかった。

●再婚後の生活

再婚相手には連れ子が5人いたが、そのみんなと仲良くやっていけた。ただ、相手には同居している母親がいて、その姑がその地区で一番のやり手の方であって、何かと反発を繰り返していた。例えば、孫のために薬を買う金にしても、薬の代用に畑に自生している薬草を使わせるなど、簡単にはお金を渡さなかったという具合だった。再婚した年に夫の長女（継子）は中学校を卒業して弁当屋へ就職して行った。自分は継子のしつけや進学などに関しては口出しはしなかった。彼女がしなくても姑がしっかりしていたため、子どものしつけに口出しができなかったと言う。そうでなくても子ども達はしっかりしていて優しく、反抗期もそう波が立ったことはなかった。再婚してからも彼女は家の畑を耕しており、職業というよりは家事手伝いのようなものだった。

●子どもたちの独立

再婚してから6年後の昭和36年、次女（継子）が高校卒業後、すぐに結婚をし、初離家と初就職（床屋）をする。その翌年には長女（継子）も結婚をした。またその翌年の昭和38年に再婚相手との間に息子（夫からみて四男）をもうける。またその翌年には同じく五男をもうける。同じ年に長女の夫婦が別居し、子どもをもうけた。このころ、今までやって来た農業は体がきつくなってきたために、この辺りではなかった魚屋を始め、これが結構繁盛した。

昭和41年、長男（継子）が高校の定時制を卒業し就職した。その翌年、これまで好評で

あった刺し身屋の店をたたんだ。魚屋は氷を扱う仕事のために、手が神経痛をおこして商売を続けることができなくなったのが理由である。その後、彼女は現在営んでいる雑貨屋をはじめる。夫は園芸物を育ててそれを販売するなりわいをしていた。このころには財産が貯っていて、子どもが結婚するたびにその財産の一部を譲ったりするなどかなりの援助をした。

昭和46年、三男が理髪専門学校を卒業した。その翌年に彼は床屋に就職をし、離家した。この三男は高校の受験に失敗し、この時に初めて子どもと進学について話し合った。それから2年後、長男（継子）が結婚をし、離家した。また、同じ年に現在の自宅を新築し、ついでにアパートまで建築。アパートの管理も仕事の片手間でおこなっていたが、最終的には子どもにこのアパートの所有権を譲った。

昭和50年に姑が死亡。3年後に四男が中学校を卒業後、大工になった。昭和56年、64歳のとき、三男が結婚。翌年には四男が結婚し離家した。またその翌年、昭和58年に五男が高校を卒業をし、大学を受験したが失敗。2年間本土で浪人をした後に受験をあきらめ専門学校へ入学。昭和63年には本土の電気会社に就職した。

●現在

子どもが五男以外はすべて結婚しているために、早いところ五男にも結婚してもらいたいのが現在の希望。また、彼以外は他の子はすべて沖縄にいるために正月と盆以外でもよく会う。これまでの人生が現在のものと比べると、かなり苦しいものであったため人生において大事なものは金銭的なものと考えている。また働くのも好きなので、体が動けなくなるまでは雑貨屋を続けていきたい。

A.H(21098)さん

●生い立ちと子ども時代

大正7年生まれ。幼い頃に母親を亡くし、男家族しかいなかったため、小さくして一家の母親代わりを努めることとなる。自分自身も母親が必要だった時期に母親の存在がなかったのは、つらかった。洋服や食事のことなど相談もできず、すべて自分で片づけるしかなくて、大変悔しい思いをした。当時は父親が米の流通業を営み、兄達も家業を手伝っていたので食べるものには困っていなかった。

●父の再婚

昭和3年、家業を手伝うだうために尋常小を中退する。その頃は親の手伝いをするのが当たり前だったので自分も当然と考えていた。昭和9年に父親が再婚し、継母がやってきた。それまで家事を一人で切り盛りしてきたので、新しい母親が来てくれてうれしかった。また、とても優しい人であった。だがその幸せの日々も束の間であった。

●戦争

戦争が始まったある日、兄嫁とその子どもたちと連れ立ってヤンバルに見物に行ったところ、空襲が始まってしまい、家に帰れなくなってしまう。ただの見物のつもりだったので食料も何も持たず、空腹で山をさまようこととなる。あちこちの農家の手伝いをして食料をもらい、その日を食いしのいでいた。米軍の捕虜になった後は、あちこちの収容所を渡り歩く毎日となる。一緒にいた兄嫁とその子どもたちは避難中にマラリアにかかり死亡する。その頃家に残っていた父母は空襲で亡くなっていた。戦争で生き残った兄達と、健康だった自分だけが生き残った。

●戦後、結婚

戦争が終わって、故郷の村に帰った後、親戚から縁談を持ちかけられ、結婚する。30歳の頃のことである。夫となった人は漁師で、働きものではあったが、酒癖が悪く、酒を飲むとよく暴力を振った。42歳になるまでに子どもは5人生まれていたが、夫が暴力を振うと子どもたちをとなりの家に預け夫が静まるのを待った。生きた心地もしなかった。結婚後15年ほどして別居を決意する。家の財産は夫に食い潰されないうちにさっさと分配してしまった。それからは女手一つで子どもたちを育てる日々が始まった。今も死んだ夫に対して大いに恨みを感じている。夫と別居した後は、兄夫婦と一緒に農業を営んで生計を立てた。

●子どものこと

一番最初の子どもが学業を終了する頃、引っ越す。次女がアメリカに留学したいと言い出したときには結婚のことを考えて猛反対したが、次女の意志が固かったのと、長女がアメリカに嫁いでいたこともあり、結局許した。

●仕事

57歳よりかねてから友達の誘いのあった掃除婦を始める。派遣会社より各地の会社へ派遣されていって、掃除をしたり、お茶を沸かしたりする仕事である。楽しかったし、何より自分でお金を儲けているという実感があり、やりがいがあった。

昭和57年に家を新築した次男と同居するために現在の場所に引っ越してきた。

●現在

平成5年76歳の時に、年を考えて掃除婦を引退した。その後は次男が営んでいる花づくりに精を出す毎日である。体も大変丈夫なのが自慢で、平成6年に胆嚢を患ったほかは、病気らしい病気一つしたこともない。趣味も働くこと。週に一回教会で友人達と会っておしゃべりをすることが唯一の娯楽となっている。現在の心配はというと、来年アメリカに行っている次女が学校を卒業して帰ってくる予定であるが、実際予定通り帰ってくるか、また結婚できるかということである。

Y.K(22003)さん

●子ども時代

大正13年、長女として生まれる。下に妹1人、弟2人がいる。父親は2千坪の土地を持ち農業を営んでいた。父親はとても厳しくあまりしゃべらなかった。そのかわり祖母はとてもやさしかった。小学校1年生の時のとても寒い日に、服を火あぶったり、ふところに入れて温めてたりして、学校から帰ってくるのを待ってその服を着せてくれた事が忘れられない。

●卒業後

昭和14年（15歳）に高等小学校を卒業した。勉強が得意だったので進学希望はあったのだが、母親が病気だったため父親が反対した。話し合いをしたのだが、結局、進学することは出来なかった。卒業後は家の農業の手伝いをした。その頃は農業をやっている家が多く家業を手伝うのは当たり前であった。農業の手伝いをしながら青年学校には通った。これはとても役にたった。今の高校よりも役に立つと思う。機織りや養蚕、道徳、礼儀作法など色々なことを学んだ。しかし、この青年学校も母の病気に都合で2カ年の所を1カ年しか通えなかった。

昭和20年（21歳）、壕の穴を掘り土を固める作業をさせられた。沖縄戦で父親と妹、弟2人を亡くした。これで母親と2人きりになってしまった。

●結婚

昭和23年（24歳）、親戚の紹介により見合いをし、結婚した。主人は同じ村の人で、結婚後は相手の父親と同居をした。披露宴とまではいかないが、自宅で親戚、友達を呼んで仏壇の前で杯をかわし、有り合わせの食事を出した。結婚した24歳という年齢は適齢だと思う。主人の家も農業を営んでおり、生活のため働かないといけないという考えで働いて働きまくった。井戸も敷地内に掘られてなかったので共同井戸を使いとても忙しかった。

夫の母親はすでに亡く、その代わりも努めて、夫の3人の兄弟もきちんと結婚させた。夫の父親は終戦当時から酒飲みで大変だった。酒を飲み過ぎが原因で何回も病院へ連れて行った。でも文句はほとんど言わなかった。この頃から一番世の中で悪い病気はアルコール依存症だと思うようになった。

●子どもの誕生～家の新築

結婚してからも実の母親とはよく会っていた。子どもが生まれた時に経済的に援助してもらっていたが、とてもうれしく、ありがたく思っていた。子どもは第1子（長女）が、昭和24年（25歳）に生まれてから、昭和36年（37歳）に四女がうまれるまで2男3女を出産した。

その間の昭和29年（30歳）には急性肝炎で2カ月間入院した。入院費用がかさみお金の面で困った。その時ぐらいからいつも体に注意するようになり過労もしないようにした。

昭和36年（37歳）の時に家を新築した。前の家は戦後すぐに建てられたもので何回も倒れたこともあった。とても古くなっておりすきま風もよく入るようになっていたので、子

どもの健康に影響があると思い、思い切って新築した。資金は農協から15年払いで借りた。その後も少しずつ改築している。

●子育て

子育ては、子どもに勉強させるようにと一生懸命であった。参考書もたくさん買ってきて進学をさせようとした。女の子はやってくれたのだが、男の子は全然期待に応えてくれなかった。しつけは夫の方が厳しかったのだが、勉強については無頓着だった。長男が農林学校に通っている時の事だが、雨が降りそうだということでその日は学校の試験があるのにもかかわらず、夫は長男に畑に耕運機をかけてくるように言い、朝早くから長男を畑に行かせた。結局、試験にはいけずそのまま学校をやめてしまった。しつけの面ではもっとのびのびさせてあげれば良かったと思う。子育ての信条として「負けるが勝ち」をモットーとしていたので子ども達は反抗期もなかった。少しぐらいは反抗期もあった方が良かったとも思う。4人の女の子達は勉強も人並みにはしてくれてうまくいってくれている。

●子どもの独立

長女は昭和54年に結婚し、次女は翌年、4女は大学在学中に知り合った男性と昭和58年に結婚しそのまま大学もやめてしまった。この子からは何も請求してこないが生活が苦しいだろうということで結婚した翌年の子どもが生まれてから、お金や品物を少しずつ送っている。女の子の方は心配はないのだ二人の男が結婚をしていないので心配だ。しかし、二人の仲がとても良いのでその点では安心だ。二人とも家の農業を継いでいるのだが、農業は仲が良くないと出来ないからだ。現在は長男と次男と同居しているのだが嫁がいなくても娘達がよく来てくれてそうじや食事の準備を手伝ってくれるのでとても助かる。

昭和50年（51歳）から、実家の母が入院したので少しずつ世話をするようになった。忙しくて病院に行けないときには娘がよく行ってくれたので心配をすることはなかった。昭和63年（64歳）には母親の病気がひどくなったので、看病をするために農業をやめて家事だけをするようになった。この年に母親は亡くなった。

●現在

現在は初期の白内障と足が悪い以外は健康である。ただ、足がこれからもっと悪くなり外にあまり出れなくなると思うと辛い。足が悪くなければどこまでも歩いて行けるのにと思う。家事を済ませてから畑で雑草をとるのが楽しく、やはり人生で大切なのは健康であることだと思う。

Y.Y(22009)さん

●生い立ち

大正14年に8人兄弟の長女として生まれる。父は大工の棟梁で、厳しい人であった。母は優しい人であった。祖父母については小さかったこともあって記憶があまりないが、や

さしかったということだけは覚えている。兄弟は父の影響もあってか、みんなまじめである。

●就職

昭和14年に尋常高等小学校を卒業すると、親戚の経営していた病院で看護婦の見習いとして住み込みを始める。本当は進学したかったが、弟妹が多く、親が経済的に苦労しているのを知っていたので、進学はあきらめた。看護婦の仕事は親の勧めで就いたものだった。仕事は厳しく、礼儀作法をきっちりとしこまれた。が、職場の環境としては悪くなく、働きやすかった。もらった給料はすべて親に渡した。住み込みだったため、基本的にお金の必要があまりなかったからである。

看護婦の仕事を3年ほど続けた後、昭和17年に地元の商工会議所の事務員として勤め始める。この仕事も親戚（母親の兄）の紹介であった。看護婦に比べて給料が良かったので親もこの仕事を勧めた。ここは楽しい雰囲気の職場だった。また、小学校しか出ていない自分でも事務の仕事ができるということで、とてもうれしかった。このときの給料もそっくり親に渡していた。当時としてはそれはあたりまえのことであった。仕事を辞めた理由は戦争にあった。戦争が厳しくなってきたために、台湾へ疎開しなければならなくなったからである。

●戦争

昭和18年に台湾に疎開した。地域ぐるみの集団疎開であったため、疎開先の台湾では食糧難で非常に苦労した。疎開したきょうだいのなかで自分が最年長であったため、年下の弟や妹たちを食べさせることで必死だった。現地の台湾人と物々交換をしたりして、飢えをしのいだ。終戦後、兄がすぐ迎えに来てくれたときはとてもほっとしたことを覚えている。当時、敗戦についての印象はなにも持っていなかった。年齢が17〜18歳のときのことで、なにがなんだかわからなかったというのが正直なところである。

●終戦後の生活

昭和21年には、洋裁を習うため専門学校に通い始める。これからは技術を持たなくてはだめだと考えたからである。翌年にその学校を卒業し、親戚が経営していた地元の洋裁店に勤め始める。洋裁店での仕事は楽しかった。結婚後、子育てに追われるようになり洋裁店の勤めは辞めることになったが、洋裁は趣味として続けている。

●結婚、新婚生活

昭和24年に夫と結婚する。夫とは地元で顔見知りだった。また両親も賛成してくれた。結婚後、夫が一人っ子であったため、配偶者の姑との同居した。姑とは仲がよかったので、そんなに苦労はしなかった。

●出産、子育て

昭和25年には長女が生まれる。そのころは生活がとても苦しかったということを覚えている。昭和27年には次女が生まれた。次女が生まれたことで子育てに追われるようになり、洋裁店での仕事は辞めなければならなくなった。ただ、依頼がきたときには洋裁の仕事を

家でやった。

昭和29年には三女を出産。昭和31年には四女が生まれ、昭和34年に五女が生まれる。その翌年の昭和35年にやっと男の子（長男）が生まれた。子どもの面倒をみるのは妻である自分の仕事であった。家にいる間は子どもの責任は親にあると考えていたので、子どもたちを厳しく育て、わがままはさせなかった。

●結婚後の移動

昭和30年に税務署に勤めていた夫が沖縄本島に転勤になり、自分も姑、子どもらとともに沖縄本島に転居してきた。那覇に家を借りて一家で住んだ。昭和39年には市内で転居した。この家も借家であった。その後、貯めていたお金で家を建て、現住所に住み始めたのは昭和47年のことである。初めての持ち家であったこともあって、とてもうれしかったことを覚えている。

●子どもの就職や結婚、初孫の誕生

長男は大学卒業後、簿記の専門学校に通い、現在、税理士の仕事をしている配偶者といっしょに仕事をしている。長女の結婚が昭和53年、次女の結婚が昭和の55年であることは覚えているが、その他の娘の結婚時期は覚えていない。5人の娘は全員姑のいる長男と結婚した。そのため、結婚についての相談をうけたとき、必ず1度は反対した。現在は5人とも家庭内でうまくやっているようであり、その点ではほっとしている。長男は平成2年に結婚した。長女が結婚した翌年に初孫が生まれる。初孫が生まれた時にはうれしさのあまり静岡の長女のところにとんで行った。現在17人の孫に囲まれている。

●現在

現在、長男とは別居している。しばらくは二人でゆっくり過ごしたいから。すぐに孫のおもりをさせられたら大変だからとも思う。子どもたちとは週1度ほど会っているのでそう寂しくはないという。ただし本土にいる孫が訪ねてきた時はやはりうれしい。自分の人生は無我夢中だったけれども、ずっとコツコツとやってきた。敗戦、復帰などの歴史的体験は、それがあたりまえの時代だったのだと思う。だから自分が特別不幸だったとか、大変な目にあったとかは思わない。夫はまだ働いていて、自分自身もいろいろ忙しい毎日を送っている。

T.M(22063)さん

●厳しかった父親のしつけけ

昭和2年に8人きょうだいの長女として生まれた。大工の父親は非常に厳格な人であった。常に家の中を掃除してきちんとしていないと怒られて怖かった。夜寝る前にお茶碗なんかが、台所の流しに置いたままになっていると、よく父に叱られた。この茶碗で明日、誰が食べるか、においが臭くて食べられるかと、怒られてほんとうに怖かった。ご飯を炊

いても柔らかすぎると、これは誰が食べるか、人間が食べるご飯かと、怒られてすごく厳しかった。子どものしつけにはほんと厳しかった。小さいとき、兄弟の中で父に対して、早く死ねばいいと言う声があがったほど厳しかった。このように父が子どものしつけけに厳しかったので、母はあんまりうるさくなく、普通だった。

●きょうだいの離家

戦後すぐ、昭和２１年に３人の弟と一番下の妹がアメリカに移住している。長男と次男は沖縄本島で結婚して夫婦で移住し、３男はアメリカに行って沖縄の人と知り合って結婚している。末の妹は沖縄でアメリカの人と出会い子どもが出来て、一緒にアメリカに行って、アメリカ国移籍をもっている。みんなロサンゼルスに住んでいる。現在、日本に残っているのは上の姉と自分だけである、残りの妹はすでに他界している。アメリカに行った長男は、両親の位牌をアメリカに持って行き、墓もアメリカで造り、両親の命日に供養している。姉はアメリカの兄弟達の家を訪ねたことがあるが、自分はまだ一度も行ったことがなく、写真で見ただけである。

●初めての仕事

小学校を卒業して 14 歳の時に、家から 30 分ほどの所にある石灰を作る会社に就職した。田舎で就職先もなく、友達がみんな行くので自分もそこで働くことにした。また自分は中学も高校もでていなくて、自分の希望を満たすような仕事はこれしかないだろうと思い、この会社にお願いして就職した。自分は生まれた部落を離れたこともなく、そして初めての仕事で社会にでて、これからが自分の人生の始まりだなあと思った。仕事は全身石灰をかぶって、鼻から耳まで石灰が入ってかさかさして大変だったけど、友達がたくさんいて、毎日楽しかった。給料は安かったがこの仕事には満足していた。

就職をして２年目くらいで、会社が閉鎖になって、やむなく失業となった。まだ働きたかったがどうしようもなかった。そのあと仕事がなく結婚までどこへも勤めにはでていない。沖縄本島や台湾に出たかったが、父親が厳しく許してもらえなかった。

●子沢山の悩み

結婚後、子どもがたくさん出来て悩んでいた（10 人）。人に「なんで子どもたくさん持つか」と言われたので、悩んで、苦しんだ。貧乏人の家になんで子どもがこんなに生まれるかと、生まれるたびに泣いていた。しかし、あるおばさんが子どもは神様が創ってくれたもので、最初子どもが小さいうちは大変で苦労するけど、将来大きくなってから楽しみよ、そしてどんなお金かけても子どもはもてないよと励ましてくれたので、最初は悩んでいたけれど、それからは子どもが出来て良かったと思えるようになった。

●子どもの教育

夫は子どものしつけに対しては、一度も手をあげたことも、叱ったこともない、そのため自分が大声を出したり、叱ったりしていた。子どもの教育ということに対して夫婦の信条などはないが、子どもの素質がその子の進路を左右するもので、高校へ行ける能力があればいかせるし、そして大学へ行く能力があればいかせ、その素質にそくしてやってきた。

末の娘の反抗期がとても大変だった。学校でグループを作って、グループ外の他の女子生徒を殴ったということで、学校に呼ばれた。その時、娘は先生に叱られていて、それを見て母親である自分が娘を殴ったほどである、先生が止めてなんとかおさまったが、とにかくその娘の反抗期が大変であった。夫はそれについては何も言わなかった、ただ「こんな優しい子が、まさかそんなこと出きるか」と言っていた。他の子ども達はほんとにいい子で、生徒会長するような子どもで、先生にほめられるような子ども達であった。

進学や結婚は子ども達の好きにさせた、しかし三男が結婚する時は学生同士の結婚で反対したが、おなかに赤ちゃんが出来ていると言うことで、結婚を許した。そして二人で本土に行こうとしていたので、あんた達にできるかと言うことで反対した。しかし親からはなにもあげないよ、手足だけが親の財産と思って行きなさいといって行かせた。

●一番辛かったこと

昭和27年、25歳のとき、次男を出産して10日目のこと、「十日満産」という祝いをするというときに、実家の母が亡くなったという電報が届いた。死に目にあうことも出来ず辛かった。母の葬式の日、家族みんなで葬式を済ませ、墓に行く途中に、すぐ下の妹の子ども（二歳半）が川に落ちて行方がわからなくなってしまった。なかなか見つからず、下水の蓋に引っかかっていて亡くなっていた。この時は最悪の出来事で、自分は失神して倒れてしまったほど、なかなか意識が戻らなかった。妹は教員をしていて、働いていたため、自分がその子の世話をしていて、お母ちゃん、お母ちゃんとなついていてくれたので、ほんと辛くて悲しかった、その子を抱き上げて足踏みして泣いたほどであった。この時は、母の葬式にこの子の葬式が重なり、そして自分は失神して、ほんと最悪の事態であった。

●夫の入院

昭和54年に夫はが2カ月間入院した。病名がわからなく癌ではないかと思って、ほんとうに心配した。夫の症状は食べても戻してしまい、食べ物が下へ下がっていかなかった。戻すのは、赤ちゃんの便みたいな、黄色で食べた物全部戻して、トイレで倒れてしまって、救急車で病院に運ばれすぐ入院してどうなるかと思った。兵隊の時に、夫は銃剣で刺されて、後ろの肋骨が突かれたところに血の固まりが出来ていて、この血の固まりが腸を押しつけて、食べ物が下がらなかった。そのため、胃から腸に行くところを、切ってバイパスを入れるという手術をした。2ヶ月間、自分は毎日病院に付き添うため通い大変だった。末の娘はまだ高校生だし、修学旅行にも行かせられない状態だったが、先生が援助もらって行かせなさいと言うことで、やっとのことで行かせた。自分は手に職もなく、子どもに頼るしかなくて、父親と一緒に大工をしていた三男とやって行くしかないと思っていた。この時は、精神的にも肉体的にもそして経済的にも苦労した。

H.Y(22106)さん

●生い立ち

昭和３年に次女として生まれる。両親は最初結婚したときは子どもができないというので一度離婚させられており、お互い同じ相手と再婚どうしだった。そのため、姉と自分とは本当に待ちわびてやっと授かった子どもだった。昭和７年に父親は南洋のほうが暮らし向きがいいという話を聞いて、南洋へ移住する決心をする。最初は一人で行って生活の基盤を整えてから家族を呼び寄せようという考えで、一人でフィリピンに旅立っていってしまった。４年後の昭和 11 年になってやっと父親から呼び寄せがあったので、残されていた家族３人そろってフィリピンへ渡った。

●フィリピンでの豊かな暮らし

フィリピンで、両親は一生懸命働いていた。朝、母親は豆腐を作り、一通り売り終えてから、父親のやっている畑のほうに手伝いに行った。畑は常になにがしかの作物でいっぱいだったし、その他に家畜も養っていたため、食べるのには不自由しなかったし、生活も周りの人たちに比べるとかなり裕福なほうだったと思う。学校へ行くときにも他の人ははだしで通うなか、自分一人だけは靴を常に履かせてもらい、学校へ行く洋服と家で着る洋服が別々にあった。それになにか学校で行事があろうものなら、袴を履かせてもらったりしていた。おかげで学校では当時の上級生や下級生にまで名前を覚えられていたほどである。

両親は十二分に子どもによくしてくれた。しかし、親がこのようにするのには他にも訳があった。父の実家は沖縄本島にある裕福な家で、父はそこの長男ではあったのだが、父の母親は正妻ではなかったので、正当な財産を相続することができなかったのである。しかし、そこの家の財産は本妻の子どもに渡らず、まったく関係のないほかの人に食い潰されてしまったと聞いた。そのとき、父自分に学がなかったばっかりに、やすやすと家を乗っ取られてしまったことを悔いて、自分の弟妹達からはしっかり勉強させるようにすること、そしてたった二人授かった子どもたちにはなに不自由のない生活をさせたいという一念から一生懸命働き、家のために尽くしたと言うのだ。

しかし、子どもだった自分たちはそういう事情は何も知らないから、何も考えずにすくすく育った。町に遊びに出たり、他人の家にお世話になるときにも実は父親が、かかる費用を前払いしていてくれていたのだが、そのことに気づいたのは、もうずっと後の話だった。

●特殊な能力

子どもの頃から、自分は薄々自分はほかの人と比べて感の鋭いところがあると感じていた。例えばエスパーカードのようなゲームをやると、ほとんど百発百中で相手の手の中にあるカードが何か分かったし、遠くからやってくる人の足音でその人はどういう人か、例えば年よりか若い人か、男か女か当てることができた。そのときは分からなかったが、死んだ人の声みたいなものも聞こえていた。その頃はそれがなんなのか、どういうことなの

かも分からなかったので全然気にも留めていなかった。ただ、当時の担任の先生はちょっと風変わりな子だな、と感じていたことを後で知った。それが「生まれ」というもので、自分がユタになるように運命づけられていると知ったのは、ずっと後になってからのことだ。

こういう話もある。小さかった頃の話なので覚えていないのだが、自分の叔母とその友人が他人の噂話をしていたとき、叔母も小さい子どもの前だと思って気にもとめずにしゃべっていたのだろうが、少し離れたところにいて話の内容は聞こえていないはずの自分がつかつかと近づいてきて「叔母さん、早くうちに帰ろう。人の噂話なんてするもんじゃないよ、子どもは何も分からないからすぐにみんなに言い触らしてしまうよ。」と、叔母の手を引っ張ったそうだ。そのとき、叔母と傍にいた友人は身の毛もよだつような気がして、それからはどんな話をしていても自分が近づくとピシャっと口を閉じるようになった。あの時の話はいまでも語り草になっている。

●戦争時代

姉は学校を卒業するとサイパンへ渡り、洋裁を習って洋裁店を開いた。また本島にいた従兄弟は軍属だったので、いつも靴などを送ってくれていた。だから南洋での生活は本当に裕福だった。お金の心配などしたことはなかった。その頃の夢は産婆になることだった。そのために小学校を卒業した後は女学校へ行くことを考えていたし、試験を受ける準備をし、親も賛成してくれていた。

ところが戦争が始まりかけており、島にいた若い人はみんな飛行場を作るのに回された。進学どころの話ではなくなった。そのとき本島より仕事を求めてやってきていた男性と恋に落ち、その人の子どもを身籠もったため、昭和18年に結婚する。15歳の時のことである。同年長男を出産する。それと同時期、父親が防衛隊として本島へ行き、そこで戦死する。それに続くように生まれたばかりの長男が病気で亡くなった。

しばらく母親と夫婦二人だけの生活が続いた後、翌年に2番目の子を出産する。そして昭和19年に沖縄本島に渡り、母親の実家に住んだ。すぐに3番目の子どもが生まれ、北部にある夫の実家でお祝いをしてもらった。その子が1歳の誕生日を迎えるのを待って中部に移り住んだ。

●戦後

戦後、従兄弟よりかねてから誘いのあった軍で働くようになる。仕事の内容は簡単な掃除と商品の陳列であった。以後出産のため、仕事をやめたり、また働きだしたりを繰り返しながらも軍で働く日々が続く。

主婦をこなしながらも仕事を続けたのは夫の肺に戦争で飛んできた破片が入り込んで思うように体調が落ち着かず、働けない体になってしまったためだ。少し働いただけでも息が乱れるし、昼、日の中に出ると皮膚が赤くはれ上がってしまう。これではどうしようもない。自分が働くしかない。生活保護を受けられるようにもなったが、思春期を迎えた子どもたちが保護を受けることを執拗に嫌がったので結局やめてしまった。こうした戦争の

2次被害に関しては国や県の補償は全くといっていいほどない。治療費とそれに伴う渡航費用は出すという制度はあるにはあったが、5人もの子どもを家に置いたまま治療に行くというのは無理な話である。

更に同じ時期、夫が病院に入院していたときに知り合った人の借金の保証人となり、それを踏み倒されて、そのときやっと手に入れた家屋敷をそっくりそのまま借金の抵当にとられてしまった。そのときの担当だった裁判官が良い人で、道向かいにあった家を安い値段で譲ってくれたため、路頭に迷うことはなかったが、生活が以前にもまして苦しくなったことだけは確かだった。

小さいころから何不自由なく育てられ、ましてやお金の心配などしたこともなかった自分にとって、これは初めて直面した問題であった。そんなときいつも親身になって心配し、助けてくれたのは家こそ別々に暮らしているものの、やはり母親であった。金銭面から、精神的な面に至るまで常に支えになってくれた。

●大病～ユタになる

そうした生活も少しずつ落ち着いてきた頃、また新たな問題が発生した。原因不明の病気にかかってしまったのである。熱もいっこうに下がらない。医者の診断によると子宮筋腫だろうということですぐにでも手術をする必要があるという。しかし医者は、「一応手術はしてみるが、命の補償はできない。」という。そこで、そんな手術する意味があるのかなという疑問がはたとわいてきた。それに、その日の晩に「行くときには道があるが、帰りの道はない」というお告げめいた夢を見たのを思い出して、急に手術を受ける気がなくなり、病院から逃げ出して家に帰ってきてしまう。家で寝ていると驚いたことに今まで煩っていた病気が嘘のように消えてなくなってしまっていた。一方病院では自分がいなくなったということで病院中が大騒ぎをしていた。家に無断で帰ってきて、死ぬかも知らない間に病気が治っていたという話をすると、みんな驚きあきれかえっていた。

しかし、その日を境にして今まで自分が内に持っていた能力、つまり霊の感知能力というようなものがより強まり、コントロール可能になり、他人のことに関しても霊の声が聞こえるようになった。その後那覇に引っ越してから、お告げで、続けていた軍作業をやめることになった。今考えると、あれがユタへの正しだったんではないかと思う。ともかくも、その時期から今の仕事であるユタの道に入っていくこととなる。そのときにも一番の応援者になってくれたのは母であった。母は、自分の行く拝所全てに一緒についてきてくれ、自分のユタへの移行がスムーズに行くよう付き添ってきてくれた。

●子どもたちの独立

昭和43年になると一番上の子が結婚し、3年後の46年には初孫が生まれる。家では家族が一番価値のあるものだという考え方なので、孫の誕生は大変うれしかった。いつも孫をつれて歩き、夜寝るのも忘れて付き添った。

そういう家だから、長女の最初の子どもが生後5日で死亡してしまい、嫁ぎ先から跡取りが生まれないと困るという理由で一時期離縁されてきていたときには心配したし、次女

がアメリカ人と結婚してアメリカに渡るといったときにはもう２度と帰ってこないのではないかと思い、猛反対した。しかしそんな心配とは裏腹にみんな立派に自分の家庭を築き、幸せにやっているので子どもたちの結婚に関しては満足している。長男とは結婚後ずっと同居していたが、仕事の関係で神奈川へ行くこととなったので、沖縄で進学・就職を予定していた長男の孫以外とは別居生活をすることとなる。

●母の死

昭和57年には最愛の母が病気になる。ユタの仕事の合間を縫い、掃除婦をしている姉とも交替でまた家族の協力の得て看病したが、そのかいもなく７か月間の闘病生活の末になくなる。母の死は大変ショックだった。母の葬式には地域の青年会や婦人会の人々がたくさん駆けつけてきてくれ、大きなものとなった。四十九日までは姉と二人で母の家に泊まり込み、線香の火を絶やさないようにした。そうして一通り母の弔いをおえた後、やっと家に戻った。

●現住所に転居

昭和59年からは現在の住所に家を新築し、翌年の１月に新築祝いをする。２階を長男家族のものと考えて造ってはいるが、現在、長男夫婦は神奈川県にいるので沖縄で就職している孫だけが２階に住んでいる。

●二度目の大病

平成７年には脚の付け根からリンパを摘出する大手術を行なった。良性の腫瘍であったから良かったのだが、腫瘍の成長を押さえる注射を月に何度か打たなくてはならなかったため、８カ月間入院した。姉と家族が交代で看病してくれ、とても助かった。アメリカから里帰りしてきていた次女も半年間沖縄に来て看病してくれた。入院費用も子どもたちお金を出し合って支払ってくれている。入院生活が長かったため、歩き回るのには少し不自由し、ユタ業は直接出向いてくる人以外はお断りしているが、健康のほうはもう何の心配もない。

●現在

孫21人、曽孫５人にも恵まれ、生活も安定し、不安のない毎日を送っている。ただ一つ心残りなのは自分の墓をまだ建てていないことである。死んでしまったあとに子どもたちが右往左往しないよう、ここ数年の間には墓を建てたいと思う。そして体が本調子になり、ユタ業を再開する日が来るのを楽しみにしている。

K.S(22107)さん

●生い立ち

昭和２年、北部の村に生まれる。この年に父親は亡くなった。翌年、母は他村から嫁いできた人だったので、夫の死後村にいづらくなり、サイパンへ移住した。この時、姉は一

人沖縄に残したので、沖縄に帰ってきてから仲が悪かった。母は、厳しくなく、勉強しなさいとは言わない優しく、父親についてどういう人だったとよくしゃべってくれたので父親について尊敬の念を持っている。サイパンでは日本人学校に通った。先生は本土の人で沖縄の人にやさしかった。ここでの学校生活はとても思い出に残っている。

●沖縄に戻る

昭和15年（13歳）、沖縄に帰ってくる。祖父母と一緒に暮らした。祖母はやさしく、祖母は何でも出来る人だったのだが、それがゆえに草刈りや畑仕事が上手に出来なかった時にはよく愚痴をこぼされたのを覚えている。しかし、そのおかげで畑仕事は上手になった。昭和17年（15歳）、高等小学校を卒業した。進学がしたかったのだが、家が貧乏だったため仕方がないとあきらめた。

昭和19年（17歳）ごろから勤労動員として飛行場作りとして石ころ拾いや、山の中で壕を作るための穴掘り、道作りなどをさせられた。食事もとても粗末で朝、昼ともいもを食べた。たまに雑炊を食べるのが楽しみだった。このころからの本土の人への憎しみが今でもある。

●結婚～子どもの誕生

昭和22年（20歳）、母の知り合いの息子を紹介され、結婚した。戦後のことで物がない時代だったので、披露宴はもちろんなく簡単な料理を持ってきて家で質素なお祝いをした。夫が経済連に勤めていたので那覇市の社宅に住んだ。ここは、隣近所の人がとてもよい人ばかりで気が合い心の豊かさがあった。昭和23年（21歳）から昭和33年（31歳）まで長男を筆頭に3男1女の子どもを出産した。名付けはすべて主人にまかせた。

●子育て

このころは配給がほとんどなかったのでとても大変で苦しかった。子どもを育てることで精一杯で、それ以外は考えられなかった。休みの日には主人がよく公園や海に連れて行ってくれたので、子どもとの関係はとても良いものがあった。しつけはそんなに厳しくなかったのだが、反抗期の時にはものさしを持ってたたいたりした。三男の時には余裕がでてきたのか、たたかなかった。子育ての信条としては人を大事にする、お客を大事にするという事を言い聞かせていた。

●親との関係

昭和35年（33歳）に母方祖母が亡くなり母親が一人になったので月に一回程度、会いにいった。子どもが4人いて生活が苦しかったため、あまりたくさんはしてあげられなかったが、たまに物を持っていった。夫はとてもいい人で、直接お金をあげると母親が恐縮するので、アイスケーキを持ってきたとみせかけて、その箱の中にお金を入れて持ってきたこともあった。夫はよく「自分はあなたの母親も看るから、あなたも私の母親を看てほしい」とよく言っていた。それで、昭和43年（41歳）には、夫の父親の面倒を看るために同居をした。主人は三男なのだが、長男、次男とも亡くなっているので実質的には主人が長男の役割をしていた。主人の母親は気が強い所があったのだが、主人の姉がとても物分か

りの良い人で、仲が良くなった。それからはたくさんのことを夫の母親から教わった。昭和47年（45歳）のとき、その母親が亡くなった。

●子どもの独立

子どもは別段の問題もなく就職し、結婚していったのだが、三男だけは離婚してしまった。離婚はとても悪い事だという考えがあったので三男の離婚はみとめたくなかったのだが仕方がないと納得した。今では、やり直すことも良いことだと思うようになった。

●転居、家の新築

昭和51年（49歳）、現在の住所に自宅を新築した。夫が自営業をするために経済連をやめたので、それまで住んでいた社宅を出なければならなかったのが理由である。この社宅は住み心が良く、もう少し辞めずに勤めて居てくれたら今はもっと楽な暮らしをしていたのにと思う。今の所には土地を友達と半分ずつ買ってあったので半分を友達から借りて家を建てた。電気や水道の集金がくることさえも恐く、家を建てた喜びとともに、お金がないという苦しみの両方があった。

●長男夫婦との同居

この年からは、家を建てたということで長男夫婦と同居をしている。同居といってもお互い気を使わないようにと1階と2階は完全に分離してすべて別々にして生活している。初めのころは、子どもがうるさいと感じていたが今は子どもがそばに居てとても良かったと思う。

●現在の生活

歳を重ねるにつれて考え方も変わったきた。以前は、いずれは嫁に介護してもらい看てもらうつもりだったが、あてにならなさそうなので、少しずつお金をためて老人ホームに行こうと思っている。そのために今はぜいたくをしてはいけないと思っている。年金だけでは生活が苦しいので、平成3年（64歳）からは、花笠作りの内職をはじめている。収入は少ししかないのだけれども、以前は暗かった性格が明るくなった。そうすると人との付き合いも良くなった。遊んでいたら生活が苦しくなるが働けば生活が楽になるから仕事が出来る範囲では何かやるべきだと感じる。性格が明るくなったおかげで老人会にも良く行き現在では副会長を勤めている。研修が多く忙しいのだが、色々な話が聞けて、色々な事が学べるので楽しい。習い事で大正琴もやっている。毎日が充実し楽しい日々を過ごしている。